

# 山口県立美術館年報

昭和 56～57年

ANNUAL REPORT

1981～82.

THE YAMAGUCHI PREFECTURAL MUSEUM  
OF ARTS

# 山口県立美術館年報

昭和56～57年

ANNUAL REPORT

1981～82

THE YAMAGUCHI PREFECTURAL MUSEUM  
OF ARTS

## 目 次

沿 革	5
事 業	
I. 展覧会	9
II. 普及活動	67
III. 入館者数一覧	85
収集資料	
I. 館蔵品貸出利用状況	90
II. コレクション	92
III. 美術図書	104
組 織 等	113

## 沿 革

### 美術館建設の経緯

46年度 47年度	調査費計上	
48年度	調査費計上 構想案作成	指導主事 1 名配置
49年度	建設基本方針策定（49.11.30） 建設用地の測量、地質調査（49.12） 基本設計完成（50.3.31）	専門研究員 1 名配置
50年度	実施設計作成（51.3）	研究員 1 名配置
51年度	実施設計一部修正 用地取得（52.3）	作品審査会設置
52年度	入札、議会議決（52.7.29） 起工式着工（52.8.8）	研究員 1 名配置
53年度	定礎式（54.1.29） 美術館条例議会議決（54.3.10） 完工（54.3.25）	昭和53年 4 月 開設準備室設置 室長→文化課長兼任 室長補佐→課長補佐兼任 研究員 2 名配置 主任主事 1 名配置
54年度	美術館条例公布施行（54.4.1） 開館（54.10.7）	昭和54年 4 月 美術館組織発足 顧問会議設置 美術品収集審査会(再編)設置 学芸員 1 名配置
55年度	第二次作品収集計画案策定	
56年度		学芸員 1 名転出(山口大学へ) 学芸員 1 名配置 専門研究員 1 名下関市へ出向

## 本館四か年のあゆみ

昭和54年秋の開館時には、まだ建設中であったパークロードも今ではその街路樹に彩られ、県庁前の文化ゾーン一帯は、四季を通じてうおいと清新の気が漂っている。

草創期ともいえるこの四年間の館活動の展開を分析してみると、館の運営方針にそいながらも事業そのものに対する考え方やとりくみ方は、確かに変容しつつある。未経験者ばかりでの滑りだしであっただけに、ひとつひとつの事業体験は大きく、その積み重ねの結果から生まれる問題意識、課題意識による館並びに館員自らの内的変容によるものである。

## 自主企画展について

本館の自主企画展は、開館記念展「生誕150年 狩野芳崖」にはじまり、年間二本を原則に「桂ゆき展」、「近代洋画の人間像」、「香月泰男展」、「古萩展」、「円山派と森寛斎」、「中本達也と戦後美術の一断面」、「三輪休和展」を開催してきた。これら一連の企画展は、昭和52年度に立案した第一次自主企画展年次計画案（昭和54～59年度）にそって基本的には順次開催するようにつとめているのだが、内容はそのとりあげの程度の深浅の差はあるが、いずれも本県の美術とのつながりをもっている。県民へ本県の美術を紹介し、その理解を深めるためには、まず、本館自らが「知る」ことから出発し、その特性を浮き彫りにする必要があるという前提に立って調査研究にとりくんだからである。従って、本館の自主企画展の内容は、県民の多様なニーズに応えるとともに、その規模や観点、対象への切り込みは担当スタッフの見識を尊重という研究発表方式という要素が強い。常設展や全国巡回展、あるいは普及事業などととも複々線のダイヤをぬって自主企画展を前提とした調査研究に打ち込む時間は不足気味であるが、特別な緊急の場合を除いては2～3年の準備期間がとれるようバランスをとるようつとめている。このような本県の伝統を新しい角度から再検証しようという考え方に立った、全能を傾けるスタッフが企画する自主企画展とともに、昭和56年度から県民の創作活動の活性化に直接、間接にかかわる企画展をという課題意識から、隔年交互に開催する「山口の現代美術」と「現代の陶芸 いま、土と火で何が可能か」が計画され実施された。この両展は前述の自主企画展がスタッフ中心に展開されるのに対し、選択した作家に本館の企画展示室空間を解放し、作家とともに構想し、現代美術とは何かという問題を提起し、理解を深めるための企画展である。館が常に今日的視座から本県の美術文化を直視するとき、事業そのものへの考え方やとりくみ方もまた館自らが創造的でなくてはならないという考え方に立った試みなのである。

## コレクションについて

開館後のコレクションの充実もまた、収集に対するとりくみ方や考え方に変化が生じている。

本館の館蔵品の収集は建設準備の初期の段階から開始された。昭和48年度に作成された第一次作品収集計画案も、昭和49年度から開館時までに、主として明治以降の絵画、彫刻、工芸における本県関

係作家の作品を対象として、1回の常設展示作品100点を3回展示替えできる点数300点を目標に収集するといった予算見積書添付資料的なプランであり、調査研究に裏付けられた将来ビジョンを見通したものでなかった。建設や開館の時期が決定された昭和52年度に、このプランは修正され、収集期間も昭和55年度までに延期された。従って開館後の2年間における作品収集に対する考え方は、準備段階の延長線上にあったのである。この第一の実績は、結果として383点(内訳 購入94点、寄贈289点)と関係作家のスケッチや画稿等の資料数100点となったのである。寄贈作品の全体に占める割合は大きい、寄贈とはいっても受贈条件には意を払ったので、収集対象作家の代表的作品や貴重な資料としての水準は確保できた。なかでも、香月泰男のシベリアシリーズ(香月家)、小林和作の作品とコレクション(小林家)、狩野芳崖の代表的作品である梶山鼎介コレクション(梶山家)、森寛斎資料(森家)等まとまった作品群は貴重なもので、本館コレクションの核となっている。開館後の収集で特筆すべき作品は、雪舟作品「山水小巻」(重文)であろう。

この第一次作品収集では、前述したように、対象作家の画業の全貌を把握するに至らない状況での作品選択とか、常設展示においてテーマ性をもった魅力のある生きた展示が構成できないといった問題点を既に内包していたため、昭和55年度に現況を十分分析し、第二次作品収集計画を立案した。策定をみた第二次計画では、将来につながるコレクション活用に対して配慮しながら質を重視する収集活動を展開することとなった。その基本的な方向づけとしては、絵画は対象とする時代幅の拡張——たての関係で近代から逆のぼり近世、中世まで、また現代美術も積極的にとりあげる。一方、重点作家の画業の質的掘り下げ——よこの関係で関連作家のすぐれた作品を収集する。彫刻については、美術館周辺環境の美術的整備に関心をむけ、収集対象に包摂する。工芸は、萩焼の重点的系統的収集につとめ近世から現代までを対象とする。また新しい創作を期待する意味から、現況によき刺激となる現代の陶芸も収集対象とするとし、従来の本県ゆかりの作家にのみ限定していた対象の範囲をひろげることになった。56～57年度に収集したものには、雪舟作品「牧牛図」2幅(重文)。高橋由一作品「鴨」、長谷川三郎作品「星空の富士山」、代表的前衛陶芸作家の作品などがあり、含めて購入作品66点、寄贈作品4点計70点となった。しかし、現段階は限られた予算の中で、特色あるコレクションを求めて一歩を踏み出した段階であり、まだ特色ある常設展示ができる状況ではない。

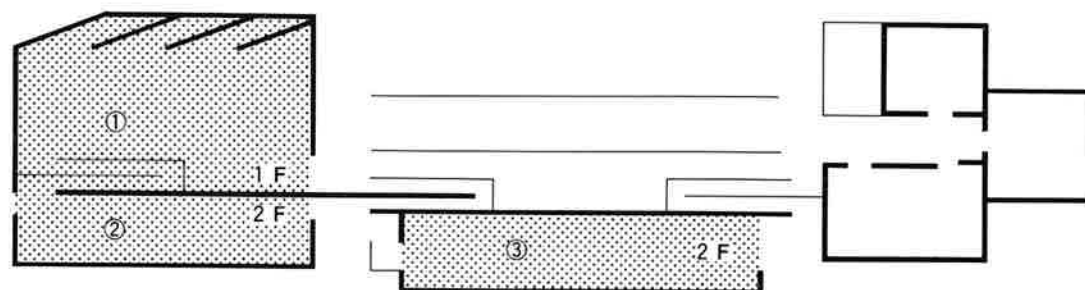
## 事業

### I. 展覧会

(1) 企画展 .....	10
(2) 常設展 .....	36
(3) 共催展など .....	61

## (1) 企画展

館主催による自主企画展を毎年3本ひらいている。内訳は、予算規模にのっとって大型企画展2、小型企画展1の割りで夏季をのぞく各季節にふりわけて開催しているが、大型企画展ではおもに個人作家の回顧展およびテーマ展、小型企画展（普及活動）では現代美術をそれぞれとりあつかい、前者を秋と冬、後者を春に開くことがなかなば慣例化しつつある。会場は、基本的に企画展示室Ⅰ①・Ⅱ②を使用。内容によっては両室を別々の展覧会に利用することもあり、また大型企画展の場合、この二室に加え常設展示室Ⅱ③を併用し3つの会場を効果的に利用するなど、会場使用の原則には内容において柔軟性をもたせている。



- ①企画展示室Ⅰ 583.298㎡（延べ面積）
- ②企画展示室Ⅱ 304.695㎡（ 〳 ）
- ③常設展示室Ⅱ 471.825㎡（ 〳 ）

### 昭和56～57年度の企画展

- 1. 古萩………11  
—その源流と周辺—
- 2. 円山派と森寛斎………19  
—応挙から寛斎へ—
- 3. 中本達也と戦後美術の一断面………24
- 4. 三輪休和………30

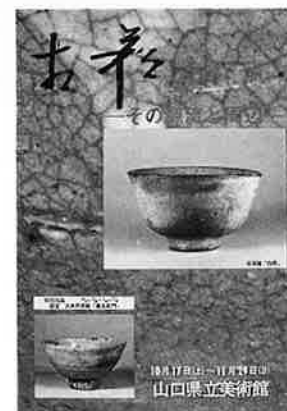
※ 凡例 企画展記録は、名称・趣旨・会場構成・展覧カタログ・出品作品・展評の順で編集されている。

## 1. 古萩

—その源流と周辺—

1981(昭和56)年10月17日～11月29日

月曜日休館・11月23日開館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



### (1) 趣 旨

近世日本陶磁史は、従来伝世品を軸に茶陶という視座から、その体系づけがなされることが多かったが、近年の考古学的発掘による成果は、その体系づけに新たな要素を付け加えるとともに、伝世品の見直しという状況をも生みだした。

萩焼も、昭和51年山口県教育委員会が発掘調査に着手、5年間に坂古窯、林古窯を手がけ、昭和56年度をもって終了した。

本展覧会は、この発掘調査をふまえ、伝世品と発掘遺品によって、近世萩焼の様式変化を追う試みを行うとともに、その源流である李朝前期の遺品や、同じ李朝の系譜をひく九州諸窯の遺品をあつめた。

李朝前期の遺品については、高麗茶碗と粉青沙器にしばり、粉青沙器では、祭器的なものに力点を置いた。

九州諸窯については、その創業期に重点をおき、唐津は茶陶を主に、高取は宅間窯、内ヶ磯窯、上野は釜ノ口窯、八代は奈良木窯、薩摩は野野窯系を主に出品作品を構成した。また、萩の発掘破片との比較のため、それぞれの窯の発掘破片を展示した。

以上が本展の基本構成である。展示にあたっては、次のねらいのもとに会場を構成した。萩焼の伝世品はその大部分を茶碗が占めるため、まず茶碗だけの一群によって様式編年を試みた。編年は、江戸時代の前期、中期、後期の3期にわけた。それぞれが17世紀前半から後半、17世紀後半から18世紀前半、18世紀後半から19世紀前半を目やすとしたが、かならずしも正確とはいえない。また、前期

は坂一号窯、中期は坂三号窯、後期は坂二号窯、林窯にはば対応するものと仮定し、その遺品との対照を、やはり茶碗関係を主として試みた。

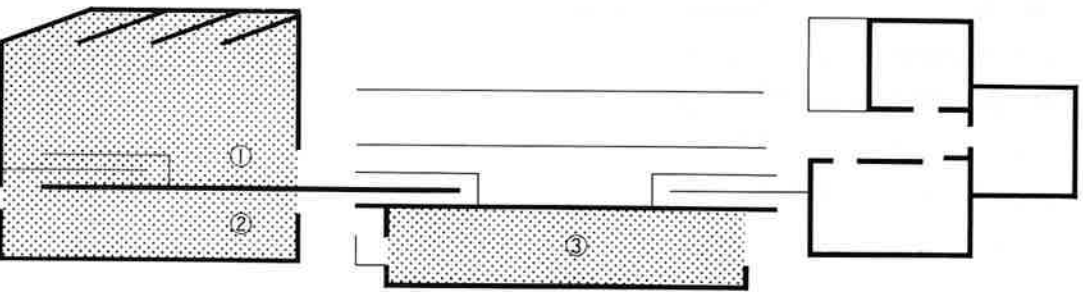
つぎに高麗茶碗、粉青沙器を展示した。九州諸窯の展示にあたっては、それぞれの発掘破片とともに展示した。さらに萩焼の広がりとお行をみるために、茶碗の一部と水指などそれ以外の伝世品を展示し、最後に、萩焼の関係資料を展示した。このコーナーにおいては、九州諸窯と萩焼の発掘破片の比較なども試みた。

萩焼は、従来国焼茶陶の中において評価、位置づけがなされており、先に述べたように、伝世品は茶碗が大部分をしめている。この中において、箱書などから編年作業が試みられているが、困難をきわめているといっても過言ではない。

発掘された坂古窯は、他の近世藩窯のありかたと同様に、茶陶はごく一部で、大部分はいわゆる日常雑器であった。

このような状況下で、伝世品との密接な対応をもとめるのは無理であることはいうまでもないが、すくなくとも、江戸中期・後期については多少の手がかりを得たといつてよい。前期についても、技術の質といったものが知られるのは伝世品を見るうえで役立つといえよう。また九州諸窯の発掘破片との比較では、その共通性と、萩の独自性をみるよい機会となった。

(2) 会場構成



①会場Ⅰ ▶萩焼の様式展開 ▶高麗茶碗 ▶粉青沙器 ②会場Ⅱ ▶唐津 ▶高取 ▶上野 ▶出雲 ▶萩焼の広がり ③会場Ⅲ ▶萩焼の広がり ▶萩焼関係資料

(3) カタログ

責任編集 榎本徹  
内容  
ごあいさつ  
萩焼の背景 林屋晴三  
カラー図版  
萩焼—萩藩窯の成立と発展— 河野良輔  
李朝陶技の交流と九州諸窯 永竹威

展覧会ノート—伝世品と発掘破片から— 榎本徹  
萩焼関係資料  
萩焼年表  
萩藩御用窯の系譜  
鑑賞のために  
萩焼文献目録  
出品目録



●A 4版 220ページ ●アート紙110kg／4色オフセット128ページ ●上質紙90kg／オフセット92ページ

(4) 出品作品

(●印国宝、◎印重要文化財)

番号	作品	時代	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	所蔵
● 李朝-1	大井戸茶碗「喜左衛門」	李朝時代	15.3	9.1	5.5	東京国立博物館
李朝-2	大井戸茶碗「有楽」	李朝時代	15.1	9.2	5.4	
李朝-3	大井戸茶碗「常磐」	李朝時代	14.4	8.3	5.4	
李朝-4	青井戸茶碗「土岐」	李朝時代	14.5	6.7	5.1	東京国立博物館
李朝-5	狂言袴茶碗「浪花筒」	李朝時代	11.3	9.2	5.8	額川美術館
李朝-6	雨漏茶碗	李朝時代	15.5	8.8	6.5	福岡市美術館
李朝-7	粉引茶碗	李朝時代	16.8	7.0	5.5	東京国立博物館
李朝-8	古三島茶碗「白菊」	李朝時代	15.8	7.4	5.9	
李朝-9	無地刷毛目茶碗「村雲」	李朝時代	13.0	10.6	7.0	
李朝-10	そば茶碗「花曇」	李朝時代	17.4	6.9	5.4	東京国立博物館
李朝-11	とと屋茶碗	李朝時代	14.5	5.3	5.2	
李朝-12	刷毛目茶碗「白妙」	李朝時代	15.6	8.1	6.2	
李朝-13	割高台茶碗	李朝時代	14.7	8.4	7.1	東京国立博物館
李朝-14	熊川茶碗「田子月」	李朝時代	13.5	8.4	5.3	
李朝-15	彫三島茶碗「木村」	李朝時代	15.0	6.3	5.2	
李朝-16	御本立鶴茶碗	李朝時代	12.2	10.0	6.3	東京国立博物館
李朝-17	紅葉呉器茶碗「升屋」	李朝時代	14.0	9.2	6.0	
李朝-18	釘彫伊羅保茶碗「羊腸」	李朝時代	14.6	8.7	5.7	
李朝-19	黄伊羅保茶碗	李朝時代	13.7	7.0	5.3	東京国立博物館
李朝-20	粉青沙器蓮花文俵壺	李朝時代	4.7	17.3	胴径21.2 ×15.0	東京国立博物館
李朝-21	粉青沙器線刻魚文双耳鉢	李朝時代	27.4	15.5	11.0	東京国立博物館
李朝-22	粉青沙器粉引祭器	李朝時代	18.0 ×24.5	11.6	6.9 ×9.6	五島美術館
李朝-23	粉青沙器刷毛目祭器	李朝時代	23.7	10.5		東京国立博物館



番 号	作 品	時 代	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	所 蔵
李朝-24	粉青沙器播落牡丹文扁壺	李 朝 時 代	5.0	19.8	胴径17.2 ×14.4 底径 8.5	五島美術館
李朝-25	粉青沙器鉄絵柳鳥文瓶	李 朝 時 代	6.7	29.8	胴径17.6 底径 6.9	大和文華館
李朝-26	粉青沙器粉引瓶	李 朝 時 代	4.1	16.0	6.4	
李朝-27	粉青沙器粉引瓶	李 朝 時 代	4.6	18.0	胴径11.3 底径 6.3	東京国立博物館
李朝-28	粉青沙器粉引獣形香炉	李 朝 時 代	6.5	12.9		永青文庫
萩 - 1	萩茶碗「白雨」	江戸時代前期	14.9	7.9	5.8	
萩 - 2	萩茶碗「苔屋」	江戸時代前期	15.4	7.7	5.8	
萩 - 3	萩筆洗形桜高台茶碗	江戸時代前期	12.5	7.8		藤田美術館
萩 - 4	萩桜高台茶碗「大との」	江戸時代前期	13.9	9.2	5.2	
萩 - 5	萩茶碗	江戸時代前期	12.2	8.2		防府毛利報公会
萩 - 6	萩茶碗	江戸時代前期	14.5	8.9	6.9	
萩 - 7	萩檜垣文筆洗形茶碗	江戸時代前期	15.4	7.3	5.7	
萩 - 8	萩三島写茶碗「椎葉」	江戸時代前期	13.9	8.9	5.4	
萩 - 9	萩茶碗「李華」	江戸時代前期	14.0	8.5	6.8	
萩 - 10	萩茶碗「白鶴」	江戸時代前期	13.3	8.4	5.0	
萩 - 11	萩筆洗形割高台茶碗	江戸時代前期	14.6	8.7		
萩 - 12	萩茶碗	江戸時代中期	16.9	8.5	5.5	
萩 - 13	萩茶碗	江戸時代中期	14.2	7.8	5.6	防府毛利報公会
萩 - 14	萩茶碗「島守」	江戸時代中期	13.9	7.4	5.9	
萩 - 15	萩刷毛目茶碗	江戸時代中期	15.0	8.8	5.7	
萩 - 16	萩立鶴茶碗	江戸時代中期	10.3	9.3	5.1	
萩 - 17	萩茶碗「普賢」	江戸時代前期	15.5	8.2	6.1	正木美術館
萩 - 18	萩茶碗	江戸時代前期	14.0	8.7	6.6	
萩 - 19	萩割高台茶碗	江戸時代前期	14.7	9.0	6.6	
萩 - 20	萩茶碗	江戸時代中期	13.5	8.1	5.5	
萩 - 21	萩割高台茶碗「白雲」	江戸時代前期	13.7	8.5	6.5	
萩 - 22	萩割高台茶碗	江戸時代前期	13.5	8.4	5.8	逸翁美術館
萩 - 23	萩茶碗「冬空」	江戸時代前期	14.0	9.0	6.4	
萩 - 24	萩割高台茶碗「福ノ浪」	江戸時代中期	15.9	8.0	6.4	
萩 - 25	萩茶碗「富士」	江戸時代前期	14.0	11.1	6.4	
萩 - 26	萩茶碗「神楽」	江戸時代前期	12.8	8.8	6.4	
萩 - 27	萩割高台茶碗「末広」	江戸時代前期	14.5	8.7	5.5	
萩 - 28	萩割高台茶碗	江戸時代前期	12.0	8.5	5.8	
萩 - 29	萩筆洗形割高台茶碗	江戸時代前期	15.0	8.0		山内神社宝物資料館
萩 - 30	萩茶碗	江戸時代前期	12.9	9.5	6.1	
萩 - 31	萩茶碗	江戸時代中期	11.7	8.7	5.9	
萩 - 32	萩茶碗	江戸時代中期	12.7	8.2	5.5	
萩 - 33	萩割高台茶碗	江戸時代前期	16.5	8.5	6.2	
萩 - 34	萩割高台茶碗	江戸時代中期 ～後期	12.0	9.0	5.6	
萩 - 35	萩筆洗形割高台茶碗	江戸時代前期	15.0	9.2		
萩 - 36	萩割高台茶碗	江戸時代前期	14.9	9.2	6.8	
萩 - 37	萩茶碗	江戸時代前期	13.1	8.3	5.9	
萩 - 38	萩筆洗形割高台茶碗	江戸時代前期	13.0	7.5	5.4	逸翁美術館

番 号	作 品	時 代	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	所 蔵
萩 - 39	萩檜垣文筆洗形割高台茶碗	江戸時代前期	15.4	8.3	5.8	山口県立美術館
萩 - 40	萩檜垣文筆洗形割高台茶碗	江戸時代前期	14.8	8.2	5.9	
萩 - 41	萩茶碗	江戸時代中期	14.2	8.3	5.6	防府毛利報公会
萩 - 42	萩割高台茶碗	江戸時代中期	13.3	8.2	5.1	
萩 - 43	萩綴目茶碗	江戸時代中期	11.7	7.6	5.9	
萩 - 44	萩割俵形茶碗「福の神」	江戸時代中期	13.7	9.5	5.1	
萩 - 45	萩熊川写茶碗「ふくら雀」	江戸時代中期	13.7	9.1	5.9	
萩 - 46	萩熊川写茶碗	江戸時代中期	14.1	9.1	6.4	
萩 - 47	萩熊川写茶碗	江戸時代中期	14.1	8.5	6.7	
萩 - 48	萩茶碗「仙人」	江戸時代前期	14.9	7.9	5.7	
萩 - 49	萩鏤絵花文茶碗	江戸時代後期	12.5	7.5	5.3	防府毛利報公会
萩 - 50	萩唐人笛形茶碗	江戸時代後期	11.4	9.7	5.8	
萩 - 51	萩茶碗	江戸時代後期	15.8	5.7	5.0	
萩 - 52	萩芋頭形水指	江戸時代前期	12.3	15.8	胴形15.8 底形 7.6	
萩 - 53	萩綴目水指	江戸時代中期	20.3	15.0		
萩 - 54	萩綴目水指	江戸時代中期	19.4	13.8	15.3	
萩 - 55	萩編笠形水指「龍津瀬」	江戸時代後期	25.2	12.2	9.8	
萩 - 56	萩透し文鉢	江戸時代中期	25.3	10.5	10.2	
萩 - 57	萩花文割俵形鉢	江戸時代前期	22.0	10.7		熊谷美術館
萩 - 58	萩花文割俵形鉢	江戸時代前期	19.5	10.8	8.1	山口県立美術館
萩 - 59	萩花文割俵形鉢	江戸時代前期	21.0	7.5	9.3	
萩 - 60	萩十字文割俵形鉢	江戸時代前期	16.6	11.8		根津美術館
萩 - 61	萩祭器形鉢	江戸時代前期	24.6 ×19.0	11.2	10.9	東京国立博物館
萩 - 62	萩祭器形鉢	江戸時代前期	15.0 ×21.8	8.5	10.5	
萩 - 63	萩耳付鉢	江戸時代中期	29.5	9.4	11.6 総径31.5	
萩 - 64	萩四方鉢	江戸時代前期	26.2	9.0	10.6	
萩 - 65	萩手付鉢	江戸時代後期	26.0	12.5	9.3	
萩 - 66	萩手付鉢	江戸時代後期	21.0	13.9		
萩 - 67	萩肩衝茶入「握拳」	江戸時代前期	3.7	6.8	5.0 胴径 6.2	防府毛利報公会
萩 - 68	萩肩衝茶入	江戸時代前期	4.9	9.1	胴径 6.6	大和文華館
萩 - 69	萩盃	江戸時代中期	6.6	2.9		大和文華館
萩 - 70	萩德利	江戸時代中期		15.0	胴径14.6	
萩 - 71	萩德利	江戸時代中期	3.4	16.2	6.3	
萩 - 72	萩德利	江戸時代中期	4.5	19.5	6.2	
萩 - 73	萩桃形香合	江戸時代前期		5.5	胴径5.8	
萩 - 74	萩割山椒向付（5客）	江戸時代中期	12.8	6.8	6.7	
萩 - 75	萩木葉形皿（5客）	江戸時代中期	15.0	4.7		藤田美術館
萩 - 76	萩牡丹唐獅子香炉	江戸時代中期		23.2	21.7	
萩 - 77	萩鉄拐置物	江戸時代中期		26.5	胴径21.1	
萩 - 78	萩飛獅子置物	江戸時代中期		32.0	胴径21.0	
萩 - 79	萩飛獅子置物	江戸時代中期		20.0		
萩 - 80	萩琴高仙人置物	江戸時代中期		37.6	長径43.5	

番 号	作 品	時 代	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	所 蔵
萩 - 81	萩蓑仙人置物	江戸時代前期		41.3		
	萩破片 (坂1号窯)	江戸時代前期				山口県埋蔵文化財センター
	萩破片 (坂3号窯)	江戸時代前期				山口県埋蔵文化財センター
	萩破片 (坂2号窯)	江戸時代中期				山口県埋蔵文化財センター
	萩破片 (坂4号窯)	江戸時代後期				山口県埋蔵文化財センター
	萩破片 (林窯)	江戸時代後期				山口県埋蔵文化財センター
	萩破片 (深川東ノ新窯)	江戸時代後期				
出雲 - 1	出雲伊羅保写茶碗	江戸時代前期	15.5	9.7		
出雲 - 2	出雲茶碗	江戸時代前期	15.7	6.6	5.5	
出雲 - 3	出雲茶碗「山里」	江戸時代後期	15.6	7.1	5.6	防府毛利報公会
唐津 - 1	彫唐津茶碗	桃 山 時 代	12.0	9.9	8.7	東京国立博物館
唐津 - 2	奥高麗茶碗「秋の夜」	江戸時代前期	15.2	8.6	5.8	出光美術館
唐津 - 3	奥高麗茶碗「残雪」	江戸時代前期	13.4	9.5	5.9	逸翁美術館
唐津 - 4	絵唐津丸十字文茶碗	江戸時代前期	14.0	8.9	5.6	出光美術館
唐津 - 5	絵唐津木賊文茶碗	江戸時代前期	12.0	9.0	6.3	田中丸コレクション
唐津 - 6	絵唐津菖蒲文茶碗	江戸時代前期	12.0	9.0	6.3	田中丸コレクション
唐津 - 7	絵唐津四方向付 (5客)	江戸時代前期	8.0	6.9	4.0	田中丸コレクション
			×8.4			
◎ 唐津 - 8	絵唐津松文輪花皿	江戸時代前期	44.2	13.3	13.4	梅沢記念館
唐津 - 9	絵唐津蘆唐草文壺	江戸時代前期	15.0	13.9	8.9	日本民芸館
唐津 - 10	斑唐津壺	桃 山 時 代		11.7	胴径15.7	大和文華館
唐津 - 11	三島唐津象嵌文耳付水指	江戸時代前期	14.0	17.5	11.4	田中丸コレクション
唐津 - 12	絵唐津平茶入	江戸時代前期		5.1	胴径 8.6	出光美術館
唐津 - 13	絵唐津肩衝茶入	江戸時代前期	3.3	9.1	4.9	東京国立博物館
唐津 - 14	絵唐津茶入「八重垣」	江戸時代前期	3.3	6.5	4.0	
	唐津破片 (帆柱窯・岸岳皿屋窯・山瀬下窯)	桃山～江戸時代前期				
高取 - 1	高取沓形茶碗	江戸時代前期	14.4	7.8	6.5	
高取 - 2	高取水指	江戸時代前期	16.0	20.3		
高取 - 3	高取肩衝茶入「夏草露」	江戸時代前期	4.1	9.8		田中丸コレクション
高取 - 4	高取瓶	江戸時代前期	5.5	24.0	8.0	
高取 - 5	高取耳付壺	江戸時代前期	10.6	27.1	10.3	
高取 - 6	高取割高台茶碗「朧月」	江戸時代前期	13.0	7.0	5.4	
高取 - 7	高取刻線文壺	江戸時代前期	9.5	14.9	9.1	根津美術館
高取 - 8	高取水指	江戸時代前期	10.5	11.7	7.0	佐賀県立九州陶磁文化館
高取 - 9	高取耳付平水指	江戸時代前期	14.1	8.6		田中丸コレクション
高取 - 10	高取肩衝茶入	江戸時代前期	3.2	9.1	4.9	田中丸コレクション
高取 - 11	高取向付 (5客)	江戸時代前期	7.0	9.5	6.0	出光美術館
高取 - 12	高取四方手付鉢	江戸時代前期	21.8	11.9	9.4	
			×23.0			
	高取破片 (宅間窯)	江戸時代前期				
	高取破片 (内ヶ磯窯)	江戸時代前期				直方市教育委員会
上野 - 1	上野茶碗「普賢」	江戸時代前期	14.5	8.1	6.0	出光美術館
上野 - 2	上野茶碗	江戸時代前期	10.4	8.4	5.0	田中丸コレクション

番 号	作 品	時 代	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	所 蔵
上野 - 3	上野茶碗	江戸時代前期	11.6	7.2	4.5	
上野 - 4	上野耳付角水指「若葉雨」	江戸時代前期	15.0 ×14.5	19.4	15.3	田中丸コレクション
上野 - 5	上野耳付水指	江戸時代前期	15.5	16.6	12.1	田中丸コレクション
上野 - 6	上野台鉢	江戸時代前期	19.8	9.8	9.2	田中丸コレクション
上野 - 7	上野割山椒向付	江戸時代前期	11.7	8.0	5.5	出光美術館
上野 - 8	上野割山椒向付 (5客)	江戸時代前期		8.2		田中丸コレクション
上野 - 9	上野象嵌菊花文花瓶	江戸時代前期		10.3	胴径 8.3	
	上野破片 (釜ノ口窯)	江戸時代前期				
八代 - 1	八代牡丹文茶碗	江戸時代前期	10.0	9.0	6.5	
八代 - 2	八代茶碗「新月」	江戸時代前期	11.5	7.5	5.5	
八代 - 3	八代象嵌牡丹文茶碗	江戸時代前期	9.8	11.8	6.4	永青文庫
八代 - 4	八代肩衝茶入	江戸時代前期	3.0	7.0	胴径 5.8 底径 3.4	熊本県立美術館
八代 - 5	八代象嵌菊花文角鉢	江戸時代前期	23.8 ×24.5	7.0		田中丸コレクション
	八代破片 (奈良木窯)	江戸時代前期				
薩摩 - 1	薩摩茶碗	江戸時代前期	10.0	10.4	6.8	
薩摩 - 2	薩摩茶碗	江戸時代前期	11.5	8.0	5.3	東京国立博物館
薩摩 - 3	薩摩蓮葉形茶碗	江戸時代前期	14.4	9.3	5.8	東京国立博物館
薩摩 - 4	薩摩瓜形茶碗	江戸時代前期	10.8	9.0	5.6	
薩摩 - 5	薩摩御判手茶碗	江戸時代前期	12.3	8.0	5.7	尚古集成館
薩摩 - 6	薩摩水指	江戸時代前期	14.3	16.4	15.1	
薩摩 - 7	薩摩文琳茶入「薩摩文琳」	江戸時代前期	2.4	7.5	3.0	
薩摩 - 8	薩摩肩衝茶入「君ヶ代」	江戸時代前期	3.1	8.6		田中丸コレクション
	薩摩破片 (堅野冷水窯)	江戸時代				

## (5) 展評など

新聞 (報道記事をのぞく)

## 展評

古萩—その源流と周辺展 名品でたどる萩焼の展開 読売(大阪)／56・10・28「古萩展」をみて 中国新聞／(寺本) 56・11・4

## シリーズ

古萩展から 朝日新聞(県内)

1. 大井戸茶碗「喜左衛門」(56・10・19)
2. 狂言袴茶碗「浪花筒」(10・20)
3. 雨漏茶碗(10・21)
4. 粉引獸形香炉(10・22)
5. 鉄絵柳鳥文花瓶(10・23)
6. 粉引瓶(10・24)
7. 萩茶碗「白雨」(10・25)
8. 萩筆洗形桜高台茶碗(10・27)
9. 萩茶碗(10・28)
10. 萩三島写茶碗「椎葉」(10・30)
11. 萩檜垣文筆洗形割高台茶碗(10・31)
12. 萩十字文割俵形鉢(11・1)
13. 萩蓑仙人置物(11・3)
14. 萩桃形香合(11・5)
15. 萩肩衝茶入(11・6)
16. 萩透し文鉢(11・7)
17. 萩徳利(11・8)
18. 萩綴目水指(11・10)
19. 「萩錆絵花文茶碗」(11・11)
20. 萩手付鉢(11・12)
21. 出雲茶碗(11・13)
22. 出雲茶碗「山里」(11・14)
23. 奥高麗茶碗「秋の夜」(11・15)
24. 絵唐津蘆唐草文壺(10・17)
25. 絵唐津松文輪花皿(11・18)
26. 絵唐津菖蒲文茶碗(11・19)
27. 上野茶碗(11・20)
28. 上野耳付水指(11・22)
29. 八代牡丹文茶碗(11・24)
30. 高取沓形茶碗(11・25)
31. 高取刻線文壺(11・27)
32. 薩摩茶碗(11・28)
33. 薩摩文琳茶入「薩摩文琳」(11・29)
34. 萩茶碗「富士」(11・30)

エッセイ

九州陶器文化圏内における萩焼 榎本徹 読売新聞(西部) 56・11・9

分岐点を迎えた萩焼 河野良輔 中国新聞

萩焼スタイルの成立考察 榎本徹 中国新聞 56・11・19

その他

古萩展担当の県立美術館学芸員 榎本徹さん 朝日新聞(県内) 56・10・17



## 2. 円山派と森寛斎

——応挙から寛斎へ——

1982(昭57)年1月8日～2月11日

月曜日休館・1月15日開館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



### (1) 趣 旨

江戸中期、円山応挙の出現によって確立された写実表現を基調とする様式は、当時の上方市民層（町衆）の趣味を具現化したものとして支持をうけ、ひとつの流派として大きく発展していった。しかしその一方で、流派としての類型化もすすみ、江戸末期になるとその中心的存在さえも欠く状況となったのである。

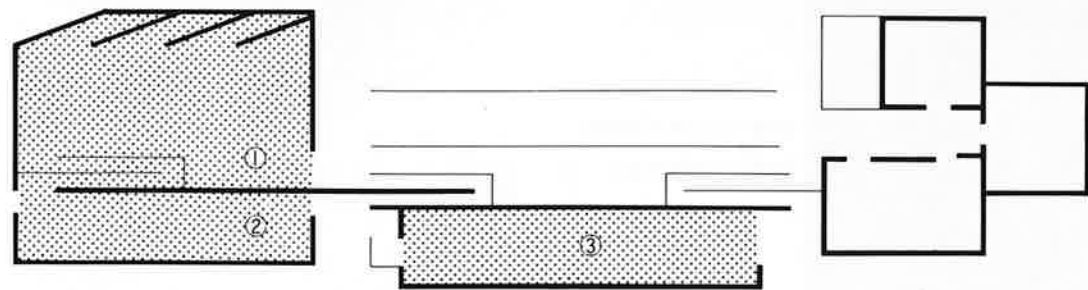
森寛斎は応挙門下の十哲のひとり森徹山に師事したが、この徹山の世話により、幕末期に京都において円山派画人として画塾をひらき、当時衰退の一途を辿っていた円山派を支え、やがて画人としてのその地歩を固め、明治以降は画壇の中心的存在となり、京都における近代日本画の基盤を築いていった。

寛斎の作品を検討してみると、南画的様式を摂取したり、大和絵風の人物表現を研究したり、かなり広範で多様な画風をもっていたことをうかがわせるが、しかしその多様性も応挙以来の円山派の画風が基礎となった上に成り立ったものであることが、その多くの応挙画の模本などで明らかである。

今回の展覧会では、応挙をはじめとした円山派画人とその円山派と密接な関わりがあり、寛斎の師森徹山の自家でもある森派の画人を加え、それらと寛斎の作品とをあわせて展示し、その画風の受容のされ方をみるとともに、寛斎とそれら円山派（森派）画家とのちがいをみることによって寛斎が円山派（特に応挙）の土台の上に、さらになにを追求したかを考えてみた。特に今回は作品の比較検討のしやすさという観点から(1)走獣画・(2)花鳥画・(3)山水画・(4)人物画の4つのジャンルに分け、それぞれの分野における応挙と寛斎を両極とした画風の変遷および差異についてみた。

本展でとりあげた画家は、円山派では、応挙をはじめとしてその長男の応瑞、その後見役であった源琦、応瑞のあとを継いだ応震、早逝した応震のあと円山派を支えた中島来章など、森派では周峰、狙仙の兄弟と、周峰の子である徹山、徹山のあと森派を継いだ一鳳などである。寛斎の弟子筋では、寛斎の後嗣森雄山、塩川文麟の亡くなったのち寛斎に師事した野村文挙、のちに京都画壇の重鎮となった山元春挙、早逝したが非凡な才能を示した巖島虹石などである。

## (2) 会場構成



①会場Ⅰ ▶走獣画 ▶花鳥画 ②会場Ⅱ ▶花鳥画 ③会場Ⅲ ▶人物画 ▶山水画 ▶写生・模本類

## (3) カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

ごあいさつ

「円山派と森寛斎」展に寄せて

土居次義（京都工芸繊維大学名誉教授）

カラー図版

モノクローム図版

円山派と森寛斎—応挙から寛斎へ— 勝津吉生

年譜・資料(高田)／落款・印譜(勝津)／作家略歴(勝津・高田)／

鑑賞のために(勝津)／参考図版(勝津)／文献目録(高田)／出品目録



- A4版 176ページ ●アート紙110kg／4色オフセット24ページ 2色オフセット88ページ
- 上質紙90kg／オフセット64ページ

## (4) 出品作品

番号	作品	作者	形状	材質	寸法(cm)	制作年	所蔵
走獣-1	岩頭遊猿図	円山 応挙	額	紙本墨画淡彩	181.0×178.0	安永10(1781)年	円満院
走獣-2	狗子図	〃	軸	絹本彩色	43.1×66.6	天明3(1783)年	
走獣-3	王羲之龍虎図	〃	軸3幅	絹本彩色	各113.3×52.1	天明7(1787)年	大乘寺
走獣-4	燈籠群猿図	森 祖仙	軸	絹本彩色	104.0×38.0		逸翁美術館

番号	作品	作者	形状	材質	寸法(cm)	制作年	所蔵
走獣-5	猿猴図	森 祖仙	軸	絹本彩色	83.0×34.9		大阪市立博物館
走獣-6	月下双鹿図	〃	軸	絹本彩色	104.0×43.0		白鶴美術館
走獣-7	牧童図屏風	森 周峰	屏風4曲半双	紙本彩色	156.2×357.0		
走獣-8	猿猴図	森 派合作	軸	紙本墨画淡彩	131.3×57.5	文化11(1814)年	
走獣-9	牛図屏風	森 徹山	屏風4曲半双	紙本銀地彩色	165.0×281.0		東京国立博物館
走獣-10	秋草鹿図屏風	〃	屏風2曲1双	紙本淡彩	各159.7×172.6		普賢院
走獣-11	松猿図	〃	軸	絹本彩色	137.8×83.8		
走獣-12	藤花に亀図	円山派合作	軸	絹本彩色	106.0×44.6		
走獣-13	龍虎図	円山 応震	軸2幅	絹本墨画淡彩	各116.8×56.9		京都国立博物館
走獣-14	群猿図屏風	森 寛斎	屏風4曲半双	紙本金地墨画	168.5×376.0	慶応1(1865)年	
走獣-15	瀑布松上遊猿図	〃	軸	絹本彩色	98.2×39.9		
走獣-16	秋景遊鹿図屏風	〃	屏風4曲半双	絹本彩色	158.4×252.8	明治12(1879)年	金刀比羅宮
走獣-17	秋景遊鹿図屏風	〃	屏風2曲1双	絹本彩色	各154.2×169.4	明治12(1879)年	金刀比羅宮
走獣-18	古柏猿鹿図	〃	軸	絹本彩色	232.0×143.0	明治13(1880)年	宮内庁
走獣-19	葡萄とりす	〃	軸	絹本墨画	144.0×55.0	明治15(1882)年	山口県立美術館
走獣-20	春夏秋冬図	〃	軸3幅	絹本彩色	各132.0×51.0	明治19(1886)年	藤田美術館
走獣-21	群猿山水図	森 雄山	軸	絹本彩色	141.0×71.3		
走獣-22	雪中遊鹿図	巖島 虹石	軸	絹本彩色	149.0×57.0		
花鳥-1	鳶鴨図	円山 応挙	軸	絹本彩色	176.0×97.0	明和3(1776)年	藤田美術館
花鳥-2	孔雀牡丹図	〃	軸	絹本彩色	132.0×191.0	明和8(1771)年	円満院
花鳥-3	藤花小禽図	〃	軸	絹本彩色	93.0×28.0	天明7(1787)年	
花鳥-4	波濤図	〃	軸4幅(軸28幅の内)	紙本墨画淡彩	各174.0×92.0	天明8(1788)年	金剛寺
花鳥-5	雪中松鷲齋図	〃	軸	絹本彩色	152.6×84.8		穎川美術館
花鳥-6	雪中南天図	〃	軸	絹本彩色	123.0×58.0		逸翁美術館
花鳥-7	群鶴図	〃	軸	絹本彩色	114.0×53.0		白鶴美術館
花鳥-8	春秋花鳥図屏風	〃	屏風6曲1双	紙本金地彩色	各134.5×270.4		
花鳥-9	朝顔小禽図	源 琦	軸	絹本彩色	100.0×38.0	寛政7(1795)年	藤田美術館
花鳥-10	牡丹孔雀図	中島 来章	軸	絹本彩色	198.0×116.0		大阪市立美術館
花鳥-11	孔雀図	森 一鳳	軸2幅	絹本彩色	各126.0×60.6		静嘉堂文庫
花鳥-12	花鳥図屏風	森 寛斎	屏風4曲1双	紙本彩色	各159.3×360.8	天保14(1843)年	
花鳥-13	巖上鷺図屏風	〃	屏風6曲半双	紙本金地彩色	158.1×360.6		
花鳥-14	白藤群雀図	〃	軸	絹本彩色	167.0×86.0	万延1(1860)年	
花鳥-15	四季花鳥図襖絵	〃	襖4面	紙本彩色	各168.4×92.7		寧楽美術館
花鳥-16	春秋花鳥図屏風	〃	屏風6曲1双	紙本彩色	各136.0×360.0		
花鳥-17	雪中南天図	〃	軸	絹本彩色	148.0×51.0		
花鳥-18	胡枝花鴨図	〃	軸	絹本彩色	115.8×48.6		
花鳥-19	木槿双鳩図	〃	軸	絹本彩色	158.8×55.3		
花鳥-20	波濤図屏風	〃	屏風2曲1双	紙本墨画淡彩	各150.8×169.6	明治4(1871)年	
花鳥-21	桜花小禽図屏風	〃	屏風2曲1双	絹本彩色	各166.0×182.6	明治12(1879)年	金刀比羅宮
花鳥-22	雪中荒磯図屏風	〃	屏風6曲1双	紙本墨画	各165.8×371.6	明治22(1889)年	岡山美術館
花鳥-23	義士の面影	山元 春挙	軸	絹本彩色	42.0×57.0	昭和6(1931)年	
山水-1	嵐山春曉図	円山 応挙	軸	絹本彩色	87.5×126.5	安永9(1780)年	逸翁美術館
山水-2	京名所図屏風	〃	屏風6曲1双	紙本彩色	各156.0×311.4	寛政1(1789)年	
山水-3	蓬萊山・竹鶏図	〃	軸3幅	絹本彩色	各101.8×35.5	寛政2(1790)年	
山水-4	枳殻邸涉成園図	円山 応瑞	軸	紙本彩色	84.0×180.3		東本願寺

番号	作 品	作 者	形 状	材 質	寸法(cm)	制 作 年	所 蔵
山水-5	秋景山水図襖絵	森 徹山	襖4面	紙本墨画淡彩	各169.0×69.0		仁和寺
山水-6	洛東春色図	森 寛斎	軸	絹本彩色	71.2×113.8	嘉永2(1849)年	熊谷美術館
山水-7	武陵桃源・劉阮天台図屏風	〃	屏風6曲1双	紙本彩色	各156.5×347.4	安政3(1856)年	足立美術館
山水-8	新緑山水図	〃	軸	絹本彩色	130.5×42.3	安政3(1856)年	
山水-9	溪山秋思図	〃	軸	紙本墨画淡彩	58.4×120.6	文久1(1861)年	
山水-10	山水図	〃	軸2幅	紙本墨画	各143.6×44.4	慶応1(1865)年	
山水-11	蓬萊仙閣図	〃	軸	絹本彩色	36.0×99.8	慶応1(1865)年	
山水-12	松林瀑布山水図	〃	軸	絹本墨画	144.6×86.2	明治1(1868)年	山口県立美術館
山水-13	山水図屏風	〃	屏風6曲1双	紙本墨画淡彩	各154.5×362.0	明治1(1868)年	山口県立美術館
山水-14	山村静隠図	〃	軸	紙本墨画	131.8×50.2	明治2(1869)年	
山水-15	赤壁図	〃	軸	紙本墨画淡彩	131.8×60.8		
山水-16	蓬萊山図	〃	軸2幅	絹本彩色	各156.0×86.0	明治5(1872)年	白鶴美術館
山水-17	京都名所四季図屏風	〃	屏風2曲1双	紙本彩色	各152.0×169.0	明治6(1873)年	京都府立総合資料館
山水-18	雪中嵐山図	〃	軸	絹本彩色	135.0×50.1		山種美術館
山水-19	嵐山雪景図屏風	〃	屏風6曲半双	紙本墨画	124.3×262.9	明治13(1880)年	
山水-20	蓮萊山図	〃	軸	紙本墨画淡彩	40.9×81.9	明治14(1881)年	
山水-21	観瀑図屏風	〃	屏風6曲1双	絹本墨画	各152.1×355.0	明治14(1881)年	大阪市立博物館
山水-22	春秋山水図	〃	軸2幅	絹本彩色	各108.2×42.2	明治16(1883)年	
山水-23	絶壁巨瀑図	〃	軸	絹本彩色	154.0×86.0		藤田美術館
山水-24	松溪瀑布図	〃	軸	絹本彩色	141.4×52.0	明治19(1886)年	
山水-25	溪亭避暑図	〃	軸	絹本彩色	115.8×40.3	明治20(1887)年	
山水-26	松間瀑布図	〃	軸	絹本彩色	143.5×83.6	明治23(1890)年	
山水-27	蓬萊山図	〃	軸2幅	絹本彩色	各107.4×41.9	明治24(1891)年	白鶴美術館
山水-28	松林山水・雪景山水図	〃	軸2幅	絹本彩色	各125.3×41.2	明治24(1891)年	
山水-29	紅葉山水図	野村 文挙	軸	絹本彩色	133.2×49.4		
山水-30	雨中春景清水図	〃	軸	絹本彩色	126.6×49.5	明治16(1883)年	
山水-31	ロッキーマンの雪	山元 春挙	軸	絹本墨画淡彩	220.0×175.0	明治38(1905)年	高島屋史料館
山水-32	山水図屏風	巖島 虹石	屏風6曲1双	紙本墨画	各156.0×363.0		山口県立美術館
人物-1	郭子儀祝賀図	円山 応挙	軸	絹本彩色	118.0×58.2	安永4(1775)年	
人物-2	琴高仙人図	〃	軸	絹本彩色	124.3×65.6	安永8(1779)年	静嘉堂文庫
人物-3	群仙図	〃	軸4幅(軸12幅の内)	紙本墨画淡彩	174.4×92.3(2幅) 174.4×79.0(老子図) 174.4×88.4(鉄拐図)	天明8(1788)年	金剛寺
人物-4	釈迦三尊像	森祖仙・徹山・周峰	軸3幅	紙本彩色	中幅161.4×94.8 左右幅各161.4×81.3	文化3(1806)年	西福寺
人物-5	潘妃図	源 琦	軸	紙本彩色	111.0×45.0		東京国立博物館
人物-6	飲中八仙図襖絵	森 寛斎	襖4面	紙本彩色	各168.4×65.6		
人物-7	観音像	〃	軸	絹本墨画淡彩	128.8×55.8		
人物-8	十六羅漢図	〃	軸	紙本墨画	125.0×53.3		京都国立近代美術館
人物-9	群仙図	〃	軸	紙本墨画淡彩	166.8×92.7		
人物-10	親鸞聖人枕石図	〃	軸	絹本彩色	99.8×41.0		
人物-11	三十六俳仙図	〃	軸	紙本墨画淡彩	132.0×30.3		
人物-12	三忠臣図	〃 斎	軸3幅	絹本彩色	各99.8×36.4		防府毛利報公会

番号	作 品	作 者	形 状	材 質	寸法(cm)	制 作 年	所 蔵
人物-13	芥川図	森 寛斎	軸	絹本彩色	97.0×35.0		山口県立美術館
人物-14	森徹山像	〃	軸	絹本彩色	85.8×36.8	明治6(1873)年	山口県立美術館
人物-15	郭子儀図	〃	軸2幅	絹本彩色	各101.8×42.0	明治14(1881)年	
人物-16	見真大師図	〃	軸	絹本彩色	105.9×40.6	明治15(1882)年	
人物-17	業平八橋図	〃	軸	絹本彩色	125.1×50.8		
人物-18	鴨東妓女図	〃	軸2幅	絹本彩色	各99.8×35.2	明治20(1887)年	
人物-19	黄初平叫石図	山元 春挙	軸	絹本彩色	167.0×80.7	明治24(1891)年	西宮市大谷記念美術館
人物-20	法塵一掃図	〃	軸	絹本彩色	160.0×232.0	明治34(1901)年	滋賀県立琵琶湖文化館
人物-21	森寛斎像	森 雄山	軸	絹本彩色	84.9×36.1		山口県立美術館
画卷-1	七難七福図巻	円山 応挙	画卷	紙本彩色	下巻32.0×1203.5		円満院
画卷-2	写生帖	〃	画帖	紙本彩色			東京国立博物館
画卷-3	写生図巻	森 寛斎	画卷	紙本彩色	26.7×668.7 26.8×777.8 26.8×778.5 26.8×778.1		山口県立美術館
画卷-4	山水図巻	〃	画卷	紙本墨画	22.0×106.0	明治4(1871)年	

## (5) 展評など

新聞(報道記事をのぞく)

展評

円山派と森寛斎 朝日新聞(西部)／(源) 57・1・16

円山派と森寛斎展 近代への流れ明確に 読売新聞(西部)／(秋山) 57・1・21

シリーズ

「寛斎展から」 朝日新聞(県内)

花鳥画「白藤群雀図」(57・1・11) 走獣画「古柏猴鹿図」(1・18) 人物画「飲中八仙図襖絵」(1・25) 山水画「絶壁巨瀑図」(2・1)

その他

研究室から 新春企画展に奔走 寛斎の画業掘り起こす一県立美術館学芸員 勝津吉生さん(27) 中国新聞 56・12・24

「森寛斎ははざまの画家」一県立美術館学芸員 勝津吉生さん(27) 朝日新聞(県内) 57・1・13



### 3. 中本達也と戦後美術の一断面

1982(昭57)年7月24日～8月22日

月曜日休館



主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ



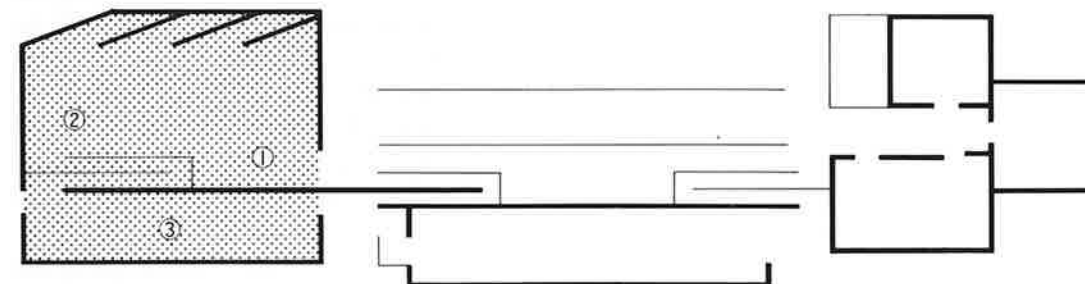
#### (1) 趣 旨

第二次世界大戦は、わが国が歩んできた近代化の流れを大きく変化させた。美術においても今次の大戦の意味はきわめて大きいといわなければならないが、戦後の美術状況はまさにその地点からのスタートであったために、近代から現代を通観するうえきわめて重要である。たとえば個性の解放としての近代的芸術意識は、戦争という特殊状況の中で脆くも崩壊し、表現の自由といった理念も強大な権力の前にほとんど空念仏化したといえる。大正11年、県下大島郡東和町に生まれた中本達也は、こうした近代の崩壊期に美術学生となり、戦後一時期の空白期を経て作家として再度歩みをはじめるという足どりをみせた。昭和48年、脳腫瘍で斃れるまでの約20数年間に中本の画業は集中し、それは内容的に大きく2期、即ち前期(1950ごろ～1963年)と後期(1964～1973年)に分けることができる。前期は、自由美術家協会への出品を中心とした作画であり、重厚なマチエルと生きもののしたたかな生命力が中心テーマであった。何か生命あるものそのものといった感じのマチエルへの執着は次第に強いものとなり、そこに刻まれる線はその肌に生じた亀裂のようにマチエルにくい込んだものとなっていく。前期は第1回みづゑ賞や第3回安井賞の受賞というかたちで成果を生んだが、中本はいろいろな原因から仕事にいきづまりをきたして意識転換にヨーロッパへ旅立ち、帰国から最晩年までが後期となる。後期は物理的にマチエルを見せるのではなく、彩やかな色彩をのせて岩肌を写しとった色面を切りとって人間像を創出する方法に集中。画壇はこの中本の変身を正確に読みとれず、中本の評価は中ぶらりんとなったが、ここでも主たるテーマが生命的な力の形象化であったことはこのたびの展観で明らかである。この間に戦後の美術状況はひとつの節目をむかえている。読売アンデパンダン

展の終了(1963年)は、団体に属さない若い世代を育てあげてきた同展の意義と限界を端的に示すものであったが、いわゆる60年代作家が50年代後半から続々と登場したとき、中本たちの世代が世代としてかわってきた表現の基盤、たとえばヒューマニズムといったもののそのものに対して疑問が投げかけられるようになっていった。

本展は、中本達也の画業を回顧するとともに、ほぼ同世代に位置する先輩、後輩の典型的な作品をととして、彼の画業の中心的な1950年代の美術状況を、中本周辺という地点で照し出そうとするものであった。

#### (2) 会場構成



①中本達也 前期 ②中本達也 後期 ③1950年代の作家たち

#### (3) カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

ごあいさつ

歴史としての絵画—中本達也 針生一郎(美術評論家)

人間の声—明日のための断片 海上雅臣( )

中本達也とその周辺 高田美規雄

図版(カラー・モノクローム)

年譜・資料・文献目録 高田美規雄

出品目録



●A4版 178ページ ●アート紙110kg/4色オフセット24ページ  
モノクロ96ページ ●上質紙90kg/オフセット158ページ



## (4) 出品作品

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸 法 (縦×横)cm	制作年	所	蔵
1	病 (母)	中 本 達 也 (1922～1973)	油彩・キャンバス	15.5× 22.5	1948		
2	回 想	〃	油彩・キャンバス	97.8× 97.3	1952		
3	漁 譜	〃	油彩・キャンバス	98.0×131.0	1952		
4	牝 犬	〃	油彩・キャンバス	63.5× 45.6	1952		
5	牛と人	〃	油彩・キャンバス	90.5× 72.5	1953		
6	土 壤	〃	油彩・キャンバス	99.7×129.5	1953		
7	誕 生	〃	油彩・キャンバス	45.0× 82.0	1953		
8	牛と人	〃	油彩・キャンバス	64.5× 57.5	1954		
9	牛買い	〃	油彩・キャンバス	140.0× 73.0	1955		
10	水 浴	〃	油彩・キャンバス	105.0×151.5	1955		
11	青年演技者の顔	〃	油彩・キャンバス	41.0× 53.0	1955		
12	牛飼い	〃	油彩・キャンバス	107.5×156.0	1956		
13	洪 水	〃	油彩・キャンバス	102.5× 68.0	1956	山口県立美術館	
14	母 子	〃	油彩・キャンバス	60.5× 78.5	1957		
15	憩える海人	〃	油彩・キャンバス	106.5×117.5	1957	山口県立美術館	
16	渴 き	〃	油彩・キャンバス	114.0× 55.0	1958	山口県立美術館	
17	供 物	〃	油彩・キャンバス	139.0×166.0	1958		
18	水旱馬	〃	水彩・コンテ・紙	116.0× 79.0	1959		
19	黒 潮	〃	カゼインカラー・紙	41.0× 69.5	1959	山口県立美術館	
20	群 れ	〃	油彩・キャンバス	91.0×156.0	1959	東京国立近代美術館	
21	森の声	〃	油彩・キャンバス	104.5×141.0	1960	山口県立美術館	
22	土 壤	〃	油彩・キャンバス	188.0×188.0	1960		
23	海の扉	〃	油彩・キャンバス	111.0×193.0	1961	山口県立美術館	
24	気配 (獣)	〃	油彩・キャンバス	190.0×138.0	1962		
25	東洋の声	〃	油彩・キャンバス	143.0×220.0	1962		
26	古代ローマの二人	〃	ペン画・紙	78.0× 54.0	1964	山口県立美術館	
27	人びと	〃	水彩・紙	75.5× 53.0	1965	山口県立美術館	
28	人間讃歌	〃	油彩・キャンバス	116.0× 91.0	1965		
29	人 柱	〃	油彩・キャンバス	189.0×220.0	1967		
30	残された壁(人間の扉)	〃	油彩・キャンバス	179.5×140.5	1967	山口県立美術館	
31	残された壁(人間断片)	〃	混合技法・キャンバス	134.0×107.0	1967		
32	残された壁(人間断片A)	〃	混合技法・コラージュ キャンバス	113.0× 89.3	1967	山口県立美術館	
33	残された壁(祭壇)	〃	混合技法・コラージュ キャンバス	145.0× 97.0	1967	山口県立美術館	
34	残された壁(女)	〃	混合技法・コラージュ キャンバス	145.0× 97.0	1967	山口県立美術館	
35	残された壁(女と男B)	〃	混合技法・コラージュ キャンバス	166.0×181.0	1967	東京国立近代美術館	
36	残された壁(女と男C)	〃	混合技法・コラージュ キャンバス	167.0×182.0	1967	山口県立美術館	
37	人間の邑	〃	リトグラフ	79.0×182.0×2	1968	山口県立美術館	
38	残された壁(人間断片1)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
39	残された壁(人間断片4)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
40	残された壁(人間断片5)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
41	残された壁(人間断片11)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
42	残された壁(人間断片12)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
43	残された壁(人間断片13)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
44	残された壁(人間断片14)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
45	残された壁(人間断片20)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
46	残された壁(人間断片21)	〃	アクリルカラー コラージュ・紙	75.5× 56.5	1968		
47	人間断片 1	〃	アクリルカラー・紙	109.0× 79.0	1972		

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸 法 (縦×横)cm	制作年	所	蔵
48	人間断片 2	中 本 達 也 (1922～1973)	アクリルカラー・紙	109.0× 79.0	1972		
49	人間断片 3	〃	アクリルカラー・紙	109.0× 79.0	1972		
50	人間の声 2	〃	アクリルカラー・紙	120.0× 69.0	1972		
51	人間の声 3	〃	アクリルカラー・紙	120.0× 69.0	1972		
52	人間の声 4	〃	アクリルカラー・紙	120.0× 69.0	1972	山口県立美術館	
53	岩の声(エスキース)	〃	アクリルカラー・紙	109.0× 79.0	1972		
54	岩の声(レリーフ)	〃	石膏	104.0× 70.0	1972	山口県立美術館	
55	鳥	〃	エッチング・紙	8.1× 9.9	1959	山口県立美術館	
56	さかな	〃	エッチング・紙	8.9× 13.8	1959	山口県立美術館	
57	潮	〃	エッチング・紙	6.7× 17.8	1960	山口県立美術館	
58	黒 土	〃	エッチング・紙	8.9× 13.9	1960	山口県立美術館	
59	少 女	〃	エッチング・紙	13.9× 8.9	1960	山口県立美術館	
60	ザクロ	〃	エッチング・紙	17.8× 7.1	1960	山口県立美術館	
61	森	〃	エッチング・紙	13.9× 17.8	1960	山口県立美術館	
62	小さな花	〃	エッチング・紙	13.9× 13.1	1960	山口県立美術館	
63	海 鳥	〃	エッチング・紙	8.9× 13.8	1960	山口県立美術館	
64	網	〃	エッチング・紙	13.8× 8.8	1960	山口県立美術館	
65	青い実	〃	エッチング・紙	15.9× 6.1	1960	山口県立美術館	
66	西 瓜	〃	エッチング・紙	10.9× 15.7	1960	山口県立美術館	
67	夏の花	〃	エッチング・紙	8.9× 10.5	1961	山口県立美術館	
68	鳥の巣	〃	エッチング・紙	8.9× 13.8	1961	山口県立美術館	
69	南国の実	〃	エッチング・紙	8.9× 13.8	1961	山口県立美術館	
70	卵と実	〃	エッチング・紙	6.1× 17.8	1961	山口県立美術館	
71	生き物	〃	エッチング・紙	13.9× 8.8	1961	山口県立美術館	
72	一つの葉	〃	エッチング・紙	8.9× 13.8	1961	山口県立美術館	
73	海	〃	エッチング・紙	8.9× 13.9	1962	山口県立美術館	
74	壁の人	〃	エッチング・紙	9.0× 8.7	1962	山口県立美術館	
75	巣	〃	エッチング・紙	13.8× 11.2	1962	山口県立美術館	
76	春	〃	エッチング・紙	10.9× 18.6	1962	山口県立美術館	
77	野	〃	エッチング・紙	14.7× 18.6	1962	山口県立美術館	
78	野鳥	〃	エッチング・紙	10.2× 13.3	1962	山口県立美術館	
79	岩と花	大 沢 昌 助 (1903～)	油彩・キャンバス	116.7× 90.9	1940		
80	岩と人	〃	油彩・キャンバス	161.5×130.0	1940	東京国立近代美術館	
81	エデンの午后	井 上 長三郎 (1906～)	油彩・キャンバス	130.2×193.3	1953		
82	めがね	〃	油彩・キャンバス	121.3× 53.0	1956		
83	天 使	鶴 岡 政 男 (1907～1979)	油彩・キャンバス	65.2× 53.0	1951		
84	喰 う	〃	油彩・キャンバス	130.0× 97.0	1954		
85	二 人	森 芳 雄 (1908～)	油彩・キャンバス	132.5×162.5	1950		
86	動	〃	油彩・キャンバス	97.0×130.0	1960	神奈川県立近代美術館	
87	雲・鳩	吉 井 忠 (1908～)	油彩・キャンバス	193.9×130.3	1954		
88	とかげとふくろう	〃	油彩・キャンバス	112.8×144.8	1958		
89	母 子	麻 生 三 郎 (1913～)	油彩・キャンバス	91.0× 60.5	1948	東京都美術館	
90	母 子	〃	油彩・キャンバス	90.0× 71.5	1959	東京国立近代美術館	
91	飢 え	阿 部 展 也 (1913～1971)	油彩・キャンバス	80.0×130.0	1949	神奈川県立近代美術館	
92	神話A	〃	油彩・キャンバス	91.5×116.5	1951	東京都美術館	
93	ハリツケ	小山田 二 郎 (1915～)	油彩・キャンバス	100.0× 80.3	1954		
94	聖 母	〃	油彩・キャンバス	145.5×112.1	1955		

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸 法 (縦×横)cm	制作年	所 蔵
95	画 室	倉 石 隆 (1916~)	油彩・キャンバス	97.0×145.5	1954	
96	椅 子	〃	油彩・キャンバス	50.0× 72.7	1955	
97	オト・オテム	山 下 菊 二 (1919~)	油彩・キャンバス	72.7×116.7	1951	
98	生活戦線	〃	油彩・合板	100.8×169.5	1955	
99	古 代	利根山 光 人 (1921~)	油彩・キャンバス	90.8× 64.7	1951	
100	いれずみ	〃	油彩・キャンバス	90.9×116.7	1956	
101	群 像	小野木 学 (1924~1976)	油彩・キャンバス	145.5× 97.6	1953	
102	生きもの(鳥)	永 田 力 (1924~)	油彩・キャンバス	115.8× 80.5	1960頃	
103	生きもの(牛)	〃	油彩・キャンバス	112.5×145.5	1960頃	
104	まぐろのある食卓	中 野 淳 (1925~)	油彩・キャンバス	80.5×116.5	1954	
105	重い首	〃	油彩・キャンバス	144.5×111.7	1956	
106	〇君の肖像	前 田 常 作 (1926~)	油彩・キャンバス	90.7× 73.3	1955	
107	不安児	〃	油彩・キャンバス	91.0× 72.8	1956	
108	核観念の内包1	石 橋 和 巳 (1927~)	油彩・キャンバス	161.5×130.5	1961	
109	核観念の内包2	〃	油彩・キャンバス	161.5×130.5	1961	
110	谷 間	池 田 龍 雄 (1928~)	ペン画・紙	29.2× 37.8	1955	
111	巨 人	〃	ペン画・紙	37.4× 29.2	1956	
112	部 落	〃	ペン画・紙	29.2× 37.8	1956	
113	湿地帯	〃	ペン画・紙	37.4× 29.2	1956	
114	密閉せる倉庫	曹 良 奎 (1928~)	油彩・キャンバス	162.0×130.5	1957	東京国立近代美術館
115	マンホールB	〃	油彩・キャンバス	130.3× 97.4	1958	
116	基 地	中 村 宏 (1932~)	油彩・合板	92.3×174.3	1957	
117	血 井	〃	油彩・合板	91.0×181.3	1962	
118	浴室(妊婦)	河 原 温 (1933~)	油彩・キャンバス	140.0×134.5	1954	東京国立近代美術館
119	黒人兵	〃	油彩・キャンバス	164.0×201.0	1955	大原美術館

## (5) 展評など

新聞(報道記事をのぞく)

### 展評

中本達也と戦後美術の一断面 生命への賛歌貫く 朝日新聞(西部)／(源) 57・7・28

「中本達也と戦後美術の一断面」展をみて 中国新聞／(寺本) 57・8・2

中本達也と戦後美術の一断面 究極の人間像を最後まで追求 読売新聞(西部)／(秋) 57・8・4

原始的な表現に徹す 中本達也と戦後美術の一断面 毎日新聞(西部)／(三田)

### シリーズ

怒りと愛と 中本達也と戦後美術の一断面 読売新聞(県内)

〈上〉(57・8・4) 〈中〉(8・5) 〈下〉(8・6)

海を抱えた魂「中本達也と戦後美術の一断面」展から 高田美規雄 西日本新聞

1. 強烈な母のイメージ(57・8・7)
2. 自分の内にひろがる海(8・8)
3. 寄宿生活での孤独(8・10)
4. 常に完成されざる人間(8・11)
5. ジレンマに立ち不器用な解決(8・12)
6. 戦後の混乱期(8・13)
7. 複雑な機械乗りこなす楽しみ(8・15)
8. 渡欧前まで絵画教室開く(8・18)
9. 手のぬくもり残るアトリエ(8・19)
10. 大学紛争に精力的に取り組む(8・20)

### エッセイ

鮮烈な色彩の「人間讃歌」中本達也と戦後美術の一断面 展 高田美規雄 新美術新聞 57・7・21  
(No. 304)

素朴で原初的なエネルギー「中本達也と戦後美術の一断面」展に寄せて 高田美規雄 西日本新聞  
57・8・6

### その他

中本展に全力 県立美術館学芸員 高田美規雄さん 中国新聞(県内) 57・7・18

「中本達也展」を企画した県立美術館学芸員 高田美規雄さん 読売新聞(県内) 57・8・15





## 4. 三輪休和

1982(昭57)年10月23日～11月28日

月曜日、11月23日休館



主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ



### (1) 趣 旨

陶芸というジャンルが真に近代的自覚をもった作家を有するのは、他の美術分野にくらべてけっして早いとはいえない。そして、伝統という言葉が陶芸の世界で検討されるのも、それをまたねばならなかった。作家にとって伝統とは、たとえば古くからの技術の習得、といったものではないのは当然である。古代から連綿とつづく作陶の歴史を有するこの国においては、ただ「伝統的」とひとくくりにされる人たちだけでなく、すべての陶芸にたずさわる人間にとって、伝統というものへの対し方が、その近代性、現代性というものへの踏絵的役割を果しているのではなかろうか。

三輪休和というひとりの作家の歩みは、その一つの典型といえるだろう。

明治28年、江戸時代から続く萩焼窯元の次男として生まれ、15歳から本格的修業をはじめた。昭和2年、32歳で家業を継ぎ、十代休雪を名のった。家業継承以後の休和の活動は、以下のように3期に分けられよう。

第1期 昭和2年から昭和30年頃

第2期 昭和30年頃から昭和42年

第3期 昭和42年以降

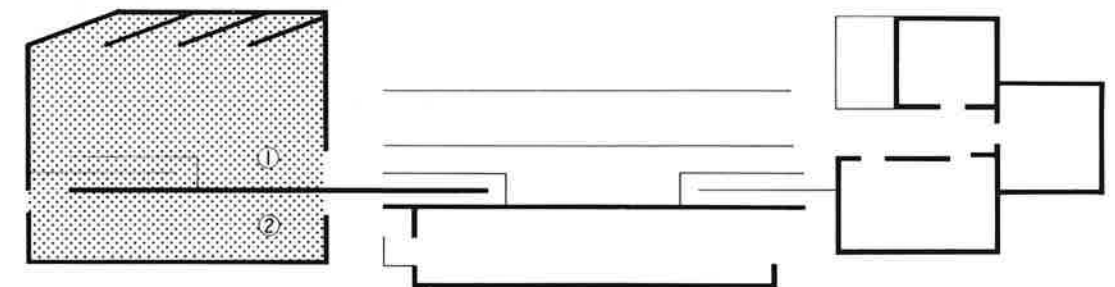
第1期はいわゆる修業時代である。修業の内容の一端は、彼が昭和2年以来40年以上にわたって書きつづけた『窯日誌』にうかがうことができる。昭和前期という時期は、近代陶芸史において一つの転期である。一方においては帝展四部の開設など、展覧会という場への陶芸の進出があり、他方では茶道を軸とした古美術ブームにともない大きな売立や、古陶磁発掘熱の高まりがあった。このような

なかで休和も古萩に興味をいだくようだが、それだけにとどまらず、精力的に古陶磁を売立などで見てあるく。『窯日誌』にみるかぎり、休和は、伊賀、信楽にひかれたようである。

昭和30年前後から、日本伝統工芸展を軸に休和の活動は広がる。東京をはじめ各地のデパートなどでの個展活動も盛んになる。ある地方の需要を満たすだけの制作をする窯元から、全国的な活動をするものへという変化は、たとえば、職人から作家へという言葉であらわされるような質的变化を要求するものである。しかし、それはひとことでいえるほど容易なことではない。日常的次元での制作と近代的自覚の上にたつ制作との隔たりは大きい。個展といえども家業の延長線上にあったとしても不思議ではない。その休和が個人様式を確立するのは、昭和40年前後であろう。おそらく、家業を弟にゆづったのが一つの契機になっているのではあるまいか。家業からはなれたがゆえに個を見つめなおす機会を得、それをてこに一つのスタイルをつくりあげたのであろう。

昭和前期という、地方窯にとっては苦難の時期に家業を継ぎながらも、意欲的に古陶磁を幅広く研究し、戦後の陶芸ブームと呼ばれる現象のなかで自己のスタイルを確立していった休和の歩みは、わが国の陶芸、とくに地名を冠した焼物という、その特殊性をもったジャンルの作家のひとつの典型である。その作品の展開を見ることによって、伝統と近代性の問題を考えるのが本展覧会のねらいである。

### (2) 会場構成



①会場Ⅰ ▶戦前の作陶 ▶休雪時代 ▶休和時代 ②会場Ⅱ ▶置物と小品 ▶三輪休和関係資料

### (3) カタログ

責任編集 榎本徹

内容

ごあいさつ

カラー図版

三輪休和一人と技術と作品― 河野良輔

展覧会ノート―窯日誌にみる三輪休和― 榎本徹

三輪休和年譜 河野良輔

文献目録

三輪休和資料

三輪休和の印と刻銘

制作年順出品目録

出品目録

●A 4 版 148ページ ●アート紙110kg/4色オフセット80ページ

●上質紙90kg/オフセット68ページ



#### (4) 出品作品

番号	作 品	口径 (cm)	高さ (cm)	(cm)	制 作 年	所 蔵
1	萩刷毛目平茶碗	15.6	6.4	以下高台径 5.8	昭和30(1955)年頃	東京国立近代美術館
2	萩茶碗	12.7	9.9	5.5	昭和33(1958)年	
3	萩茶碗	13.6	9.3	6.2	昭和40(1965)年	
4	萩割高台茶碗	14.5	9.3	7.0	昭和40(1965)年	
5	萩茶碗	12.4	9.2	6.0	昭和40(1965)年	
6	萩沓茶碗	14.5	9.7	5.8	昭和40(1965)年頃	
7	萩茶碗	12.9	10.3	6.4	昭和41(1966)年	
8	萩割高台茶碗	13.1	9.0	7.1	昭和41(1966)年	
9	萩割高台茶碗	14.1	8.7	6.1	昭和42(1967)年	
10	萩割高台茶碗	15.3	9.1	6.0	昭和42(1967)年頃	
11	萩茶碗	12.8	9.7	6.5	昭和42(1967)年	東京国立近代美術館
12	萩茶碗	12.4	10.2	6.0	昭和43(1968)年	
13	萩茶碗	11.8	10.4	6.0	昭和44(1969)年	
14	萩茶碗	13.2	6.9	5.6	昭和44(1969)年	
15	萩茶碗	11.7	10.2	5.7	昭和45(1970)年	
16	萩割高台茶碗	13.5	10.0	6.8	昭和46(1971)年	
17	萩茶碗	13.2	9.6	5.8	昭和46(1971)年	
18	萩茶碗	11.9	9.3	5.7	昭和46(1971)年	
19	萩井戸茶碗	16.0	9.7	5.8	昭和47(1972)年	
20	萩井戸茶碗	15.6	9.9	5.3	昭和46～47(1971～72)年	山口県立美術館
21	萩井戸茶碗	15.5	9.2	5.8	昭和46～47(1971～72)年	
22	萩井戸茶碗	15.0	9.8	5.7	昭和46～47(1971～72)年	
23	萩筆洗茶碗	12.6	9.8	6.5	昭和48(1973)年	
24	萩割高台茶碗	13.6	8.7	5.8	昭和49(1974)年	
25	萩茶碗	16.4	8.5	5.5	昭和49(1974)年	
26	萩茶碗	12.8	10.1	6.1	昭和49(1974)年	
27	萩茶碗	12.9	9.5	6.2	昭和50(1975)年頃	
28	萩沓茶碗	13.6	9.2	6.2	昭和50(1975)年	
29	萩井戸茶碗	14.4	8.1	4.9	昭和51(1976)年	

番号	作 品	口径 (cm)	高さ (cm)	(cm)	制 作 年	所 蔵
30	萩綴目茶碗	15.0	8.1	5.8	昭和52～53(1977～78)年頃	東京国立近代美術館
31	萩茶碗	14.5	8.6	5.7	昭和52(1977)年	
32	萩菱形水指	16.7	13.9		昭和5(1930)年	
33	萩編笠水指	21.0	15.7		昭和33(1958)年	
34	萩三島手水指	31.6	9.3		昭和35(1960)年頃	
35	萩平水指	26.7	11.0		昭和37(1962)年	
36	萩細水指	11.2	25.6		昭和37(1962)年	
37	萩菱形水指	18.3	17.3		昭和38～39(1963～64)年	
38	萩灰被水指		16.3	以下胴径 20.7	昭和38(1963)年	
39	萩灰被水指		14.5	21.7	昭和39(1964)年	文化庁
40	萩灰被水指		17.2	19.7	昭和41(1966)年	
41	萩水指		14.3	18.0	昭和42(1967)年	
42	萩水指		17.5	17.4	昭和43(1968)年	
43	萩水指		16.4	19.7	昭和46(1971)年	
44	萩耳付水指		18.3	22.5	昭和46～47(1971～72)年頃	
45	萩水指		15.9	25.8	昭和46(1971)年	
46	萩水指		12.5	25.1	昭和46(1971)年	
47	萩耳付水指		19.7	20.2	昭和46(1971)年	
48	萩編笠水指	26.5	12.6		昭和48(1973)年	山口県立美術館 文化庁
49	萩編笠水指	22.5	13.5		昭和50(1975)年	
50	朝鮮唐津花入	4.8	16.0	15.9	昭和34(1959)年	
51	萩掛花入	9.0	12.1	13.2	昭和44(1969)年	
52	萩耳付花入	12.5	22.1	13.9	昭和46(1971)年	
53	萩掛花入	7.6	14.1	12.8	昭和46(1971)年	
54	萩耳付花入	7.6	20.6	11.5	昭和47(1972)年頃	
55	萩掛花入	6.9	12.6	11.6	昭和50(1975)年	
56	萩鉈袋掛花入	11.0	9.9	幅 23.0	昭和50(1975)年	
57	萩花入	7.3	17.7	以下胴径 17.0	昭和51(1976)年	山口県立美術館
58	萩四方鉢	24.7	9.3	26.0	昭和7(1932)年頃	
59	萩絵付手鉢	41.7	8.8		昭和10(1935)年	
60	萩鉢	40.5	11.8		昭和30(1955)年頃	
61	萩手付鉢		21.9	25.5	昭和30(1955)年頃	
62	萩灰器	31.8	10.4		昭和35(1960)年頃	
63	萩木葉皿	34.5	5.6		昭和39(1964)年	
64	萩小皿(5客)	12.3	3.3		昭和47(1972)年頃	
65	萩茶入	2.4	8.7	7.3	昭和38(1963)年頃	
66	萩肩衝茶入	3.1	9.5	6.4	昭和39(1964)年	
67	萩耳付茶入	5.6	6.8	7.6	昭和40(1965)年頃	
68	萩肩衝茶入	3.1	9.3	6.1	昭和41(1966)年頃	
69	萩肩衝茶入	4.1	9.3	7.0	昭和43(1968)年頃	
70	萩丸壺茶入	3.9	7.4	7.7	昭和43(1968)年頃	
71	萩肩衝茶入	3.3	8.5	6.2	昭和43(1968)年頃	
72	萩大海茶入	5.8	6.5	8.7	昭和43(1968)年頃	
73	萩肩衝茶入	3.8	9.2	6.4	昭和46(1971)年	
74	萩肩衝茶入	3.8	9.3	7.2	昭和50(1975)年	

番号	作 品	口径 (cm)	高さ (cm)	(cm)	制 作 年	所 蔵
75	萩徳利	4.3	12.9	9.0	昭和42(1967)年	山口県立美術館
76	萩徳利	4.2	13.5	9.5	昭和43(1968)年	
77	萩徳利	4.1	13.5	9.3	昭和44(1969)年	
78	萩酒盃	6.6	4.8		昭和45(1970)年	
79	萩酒盃	6.9	4.2		昭和50(1975)年	
80	萩酒盃	6.1	5.5		昭和51(1976)年	
81	萩酒盃	7.9	5.9		昭和51(1976)年頃	
82	萩酒盃	8.0	4.1		昭和52(1977)年	
83	萩獅子置物		20.3	以下幅 29.0	大正年代	
84	萩東方朔置物		40.8	17.9	昭和4(1929)年	防府毛利報公会
85	萩和風長寿楽置物		47.0	34.6	昭和8(1933)年	
86	萩布袋置物		35.0	28.4	昭和8(1933)年	
87	萩大黒天置物		22.0	29.2	昭和40(1965)年	
88	萩獅子置物		23.5	30.6	昭和40(1965)年頃	
89	萩獅子置物		28.0	33.8	昭和42(1967)年	
90	萩ふくら雀香合		4.8	6.5	昭和39(1964)年	
91	萩丸香合		5.1	6.8	昭和44(1969)年	
92	萩松笠香合		4.0	8.5	昭和46(1971)年	
93	萩みかん香合		4.1	6.2	昭和48(1973)年	
94	萩はじき香合		4.9	5.5	昭和50(1975)年頃	
95	萩四方香合		4.6	7.2	昭和50(1975)年頃	
96	萩蓋置		4.9	6.8	昭和38(1963)年	
97	萩蓋置		5.1	6.7	昭和50(1975)年	
98	萩獅子香炉		16.1	15.5	昭和5(1930)年頃	
99	萩天人風炉		19.9	以下胴径 37.8	昭和20(1945)年頃	
100	萩富士釜		20.5	24.2	昭和20(1945)年頃	
101	萩火鉢		32.5	65.5	昭和20(1945)年頃	
102	萩水注		24.3	幅 20.3	昭和35(1960)年頃	

## (5) 展評など

新聞(報道記事をのぞく)

### 展評

三輪休和の世界 朝日新聞(西部)／(源) 57・10・30

三輪休和展 没後1年遺業しのび 読売新聞(西部)／(秋) 57・11・10

### シリーズ

休和物語 朝日新聞(県内)

1. 冬の時代 (57・10・26)
2. 学問はいらん (10・27)
3. 不志時流 (10・28)
4. 土踏み三年 (10・31)
5. 文人 (11・2)
6. 茶陶 (11・5)
7. 革新の血 (11・7)
8. 朝鮮行脚 (11・9)
9. 苦境時代 (11・10)
10. 疾風怒濤 (11・11)
11. 家を立てる (11・14)
12. 窯日誌(上) (11・16)
13. 窯日誌(中) (11・17)
14. 窯日誌(下) (11・19)
15. 台頭 (11・21)
16. 陶工受難 (11・23)
17. 火のころ (11・25)
18. じいちゃん (11・28)
19. 石部金吉 (11・30)
20. 作家へ (12・1)
21. 静と動 (12・2)
22. 休雪白 (12・5)
23. 大和説 (12・7)
24. 隠退 (12・8)
25. 人間国宝 (12・9)
26. 語録 (12・12)
27. 三代 (12・14)
28. 妻の目 (12・15)
29. 葛藤 (12・17)
30. 休和を越えて (12・19)

萩焼がいとしくて 三輪休和の陶芸 榎本徹 西日本新聞

1. 窯日誌 (57・10・28)
2. 窯焚き (10・29)
3. 税務署報告分 (10・30)
4. 古陶磁 (10・31)
5. 技術保存法 (11・2)
6. 陶芸ブーム (11・3)
7. 隠退 (11・4)
8. 人間国宝 (11・5)

### エッセイ

萩焼の近代化「三輪休和展」に寄せて(上)(下) 榎本徹 中国新聞 57・11・4、5

三輪休和展によせて 技に生きた人生 奥田聡 西日本新聞 57・11・10

休和展を終えて 河野良輔 西日本新聞 57・12・6

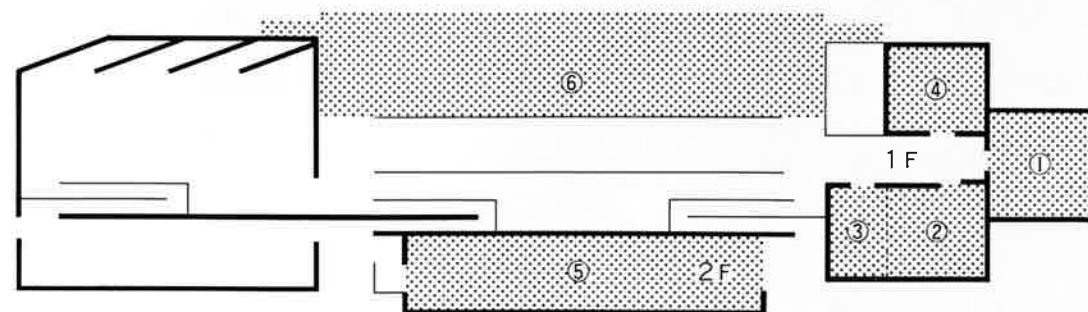
### その他

今週のひと・意見 榎本徹さん 朝日新聞(県内) 57・12・20



## (2) 常設展

館蔵品(借用品をふくむ場合もある)の常時公開の場として常設展示室を設け、年4回でいどの展示替えてテーマを設定して館蔵品を紹介している。常設展示のエリアは、図に示されるように5つの室からなっており、このうち4室が1階フロア、1室が2階フロアに設置されている。前4室を常設展示室Ⅰと総称し、それぞれの室は特定の展示内容にかぎられている。すなわち、①絵画展示室Ⅰが香月泰男、②同Ⅱが小林和作、③資料展示室が版画・素描・画稿などの第2次資料、④郷土工芸室が萩焼および赤間硯の展覧にそれぞれ利用されている。一方、2階フロアは⑤常設展示室Ⅱと称し、館蔵品全般から選ばれた作品紹介の場として利用されており、常設ⅠとⅡは相互補完的に機能し全体として偏りのない展示となるよう配慮されている。この他に戸外には⑥野外展示場が設けられている。ここは、館内展示が不可能な立体造形の紹介・展覧の場として現代彫刻数点が設置されているが、鑑賞の合間の休憩の場としても利用されている。



常設展示室Ⅰ(①～④)	462.309㎡(延べ面積)
常設展示室Ⅱ(⑤)	471.825㎡(◇)
野外展示場(⑥)	1.370㎡(◇)

### 昭和56～57年度の常設展

#### 常設展示室Ⅰ

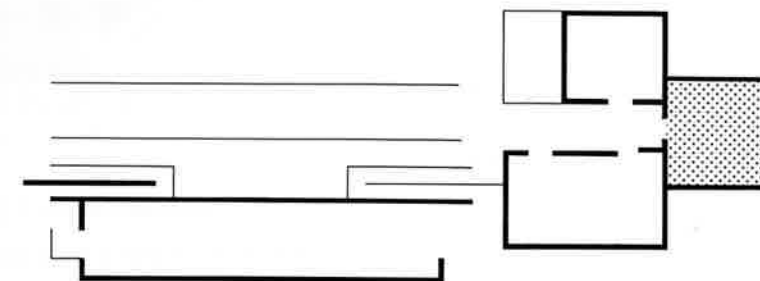
絵画室Ⅰ(香月泰男)	37
絵画室Ⅱ(小林和作)	41
資料展示室	46
郷土工芸室	49
常設展示室Ⅱ	55

※凡例 常設展示記録は、各展示室に即して整理し、また、個々については、名称・趣旨・出品目録の順に編集されている。

## 常設展示室Ⅰ

### 絵画展示室Ⅰ

(香月泰男)



#### 1. シベリア・シリーズ

1981(昭56)年5月12日～8月9日

#### 趣 旨

香月泰男のライフワークとして1948年より制作が開始されたシベリア・シリーズは、途中一時中断はあるものの1974年63歳で亡くなるまで続き、合計57点を数えるにいたっている。現在当館にはそのうち寄託品も含めて54点を収蔵しており、それらより毎回14～15点を選び展示している。その作品は戦争という極限状況によって研ぎすまされた感性により得られたシベリアの体験を、方解末と木炭の粉による重厚なマチエールによって絵画へと昇華したものである。

#### 出品作品(すべて油彩・キャンパス)

番号	作 品	制作年
1	釣床	1941
2	風	1948
3	埋葬	1948
4	昼	1949
5	休憩	1952
6	青年	1954
7	左官	1956
8	ダモイ	1959
9	1945	1959
10	北へ西へ	1959
11	涅槃	1960
12	黒い太陽	1961
13	雪〈窓〉	1963
14	餓	1964

#### 2. シベリア・シリーズ

1981(昭56)年8月11日～12月6日

#### 出品作品(すべて油彩・キャンパス)

番号	作 品	制作年
1	石と壺	1940

2	水浴	1949
3	草上	1950
4	春	1951
5	夏	1951
6	盪舟	1954
7	山羊	1955
8	路傍	1956
9	穴掘人	1960
10	渚〈ナホトカ〉	1961
11	風	1963
12	鋸	1964
13	私〈マホルカ〉	1966
14	雨	1968
15	—35°	1971

### 3. シベリア・シリーズ

1981(昭56)年12月8日～1982(昭57)年3月14日

出品作品 (すべて油彩・キャンパス)

番号	作 品	制作年
1	波紋	1943
2	朝	1948
3	室内	1950
4	仕事場	1952
5	牡牛	1954
6	鳩と青年	1954
7	二人	1955
8	新聞	1955
9	運ぶ人	1959
10	避難民	1960
11	黒い太陽	1961
12	雪	1963
13	荊	1965
14	雲	1968
15	日本海	1972

### 4. 香月泰男の自然Ⅰ(水・雨・雪)

1982(昭57)年3月16日～6月6日

#### 趣 旨

シベリア・シリーズに代表される香月後期作品の特徴は、その乾いた深みのある黒と黄土のマチエールとともに、具象性を独自の仕方では抽象の寸前まで押し進めた絵画内容にある。それは長年にわたる自然観照がひとつの絵画様式に熟成・転化したものであり、彼が達した最後の相における自然観を要約したものといえよう。

では、その自然観はどのような変化をたどって後期様式に反映されるものにまで展開したのか。「香月泰男の自然」では、彼のこうした自然との関わりあいテーマに、自然観の深化のプロセス、事象や事物にたいする関心の移りかわりの跡をたどる。

出品作品 (すべて油彩・キャンパス)

番号	作 品	制作年
1	石と壺	1940
2	水鏡	1942
3	波紋	1943
4	雨(牛)	1947
5	牡牛	1954
6	遊泳	1955
7	雪	1963
8	凍河(エニセイ)	1966
9	雨	1968
10	私の地球	1968
11	バイカル	1971
12	—35°	1971
13	雪の山	1972
14	日本海	1972

### 5. 香月泰男の自然Ⅱ(太陽・気)

1982(昭57)年6月8日～9月26日

出品作品 (すべて油彩・キャンパス)

番号	作 品	制作年
1	風	1948
2	昼	1949
3	朝	1949
4	草上	1950
5	黒い太陽	1961

番号	作 品	制作年
6	風	1963
7	朝陽	1965
8	星〈有刺鉄線〉夏	1966
9	雲	1968
10	青の太陽	1969
11	煙	1969
12	業火	1970
13	日の出	1974
14	月の出	1974

## 6. 香月泰男の自然Ⅲ(大地)

1982(昭57)年9月28日～1983(昭58)年1月9日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作 品	制作年
1	埋葬	1948
2	鳩と青年	1954
3	青年	1954
4	路傍	1956
5	ダモイ	1959
6	鋸	1964
7	餓	1964
8	凍土	1965
9	凍河〈エニセイ〉	1966
10	－35°	1971
11	日本海	1972
12	雪の山	1972
13	道	1973
14	海拉爾	1973

## 7. シベリア・シリーズの自然

1983(昭58)年1月11日～4月24日

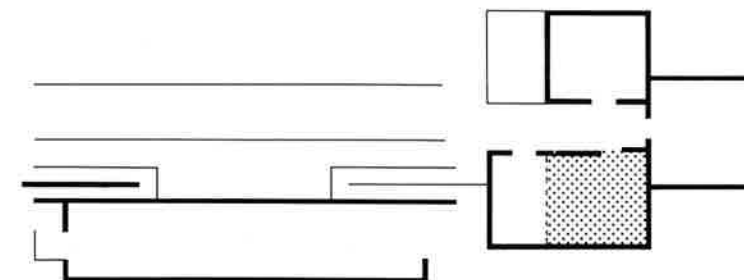
出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作 品	制作年
1	ホロンバイル	1960
2	ナホトカ	1961
3	黒い太陽	1961
4	アムール	1962
5	雪	1963

番号	作 品	制作年
6	伐	1964
7	荊	1965
8	私〈マホルカ〉	1966
9	冬〈ペーチカ〉海	1966
10	〈私の〉地球	1968
11	雨	1968
12	朕	1970
13	点呼(右)	1971
14	点呼(左)	1971

## 絵画展示室Ⅱ

(小林和作)



### 1. 小林和作展

1981(昭56)年4月14日～7月12日

#### 趣 旨

小林和作は、明治21年吉敷郡秋穂町に生まれ、京都市立絵画専門学校で日本画を学んだのち、洋画に転じた。全国各地をスケッチ旅行し、自然の中に深く溶けこみ、独特の色彩感覚で、みずみずしさにあふれた画面を創り出した。

今回は、それら独自の感覚を示す風景画を中心に、小林芸術の軌跡をあとづけてみる。

#### 出品作品

番号	作 品	材質・形状	制作年
1	果物	紙本彩色・軸	
2	きつつき	〃	
3	桃鳩	〃	
4	椋鳥	〃	
5	南画風山水	絹本墨画彩色・軸	
6	山茶花と青鳩	絹本彩色・軸	
7	白椿	〃	
8	上高地(其三)	油彩・キャンバス	1925
9	エクス風景	〃	1929
10	秋山	〃	
11	海	〃	

番号	作 品	材質・形状	制作年
12	海	◇	
13	溪流	◇	
14	伯耆大山の春	◇	
15	山湖の春	◇	
16	きつつき	◇	
17	山(磐梯山中秋元湖の秋)	◇	
18	唐津立神岩	水彩・紙	
19	紀伊太地	◇	
20	出雲簸川上流	◇	
21	岡山県加茂	◇	
22	紀州大島	◇	

## 2. 小林和作とそのコレクション

1981(昭56)年7月14日～10月25日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	佐渡の海	小林和作	油彩・キャンバス	
2	春	◇	◇	
3	春の海	◇	◇	1974
4	山湖の秋	◇	◇	
5	秋果	◇	◇	
6	秋晴	◇	◇	
7	婦人像	◇	◇	
8	海	◇	◇	
9	阿波牟岐	◇	水彩・紙	
10	室戸岬	◇	◇	
11	山陰上石見	◇	◇	
12	富士山裾野	◇	◇	
13	慶長時代風俗画遊楽之図		紙本彩色・軸	
14	寛永時代風俗人物画		◇	
15	豊国風立美人		◇	
16	久米仙人	平 岸	絹本彩色・軸	
17	歌麿風肉筆浮世絵美人		紙本彩色・軸	
18	美人画	宗 寿	絹本彩色・軸	

## 3. 雪舟と芳崖

1981(昭56)年10月27日～11月15日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	牧牛図二幅	雪 舟	紙本淡彩・軸	室町時代

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
2	山水小巻	雪 舟	紙本墨画・画卷	1474
3	八臂弁才天図	狩野芳崖	絹本彩色・軸	
4	雪中山水図	◇	紙本墨画淡彩・軸	
5	青砥藤綱滑川拾銭図	◇	◇	
6	五十鈴川神仙図巻	◇	紙本墨画淡彩・画卷	
7	羅漢図双幅	◇	紙本彩色・軸	

## 4. 山口県の近代美術

1981(昭56)年10月27日～1982(昭57)年1月31日

出品作品(15～20番は11月17日から展示・15番は57年1月12日まで展示)

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	廃船	小野具定	紙本彩色・額	1961
2	懷壁	西野新川	◇	1962
3	網船	澤野文臣	◇	1957
4	踏切	山本文彦	油彩・キャンバス	1971
5	黄色い壁	宮崎 進	◇	1976
6	円の光景(1)	田中稔之	◇	1979
7	◇(2)	◇	◇	◇
8	人間の扉	中本達也	◇	1967
9	裸婦	松田正平	◇	
10	更紗の前	永地秀太	◇	1924
11	ホノルル	桑重儀一	◇	1915
12	婦人像	小林和作	◇	
13	春	◇	◇	
14	山湖の秋	◇	◇	
15	芥川図	森 寛斎	絹本彩色・軸	
16	四季耕作図	狩野芳崖	紙本墨画淡彩・軸	
17	高嶺深谷図	高島北海	絹本彩色・軸	1916
18	雪景山水図	◇	◇	1916
19	緑陰水亭図	田中柏陰	◇	1919
20	仙峡聴泉図	松林桂月	紙本墨画	1929

## 5. 小林和作展

1982(昭57)年2月2日～6月6日

### 出品作品

番号	作 品	材質・形状
1	果物	紙本彩色・軸
2	きつつき	◇
3	桃鳩	◇
4	桎梏	◇
5	南画風山水	絹本墨画彩色・軸

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
6	山茶花と青鳩		絹本彩色・軸	
7	白椿		〃	
8	山(磐梯山中秋元湖の秋)		油彩・キャンバス	
9	きつつき		〃	
10	山湖の秋		〃	
11	伯耆大山の春		〃	
12	溪流		〃	
13	海		〃	
14	海		〃	
15	備後山野溪の秋		〃	
16	初冬の山		〃	
17	山形県三瀬		水彩・紙	
18	房州白浜		〃	
19	越後能生		〃	
20	越中上梨		〃	
21	尾道吉和		〃	
22	福光		〃	
23	室戸岬		〃	
24	鎌手		〃	
25	妙高山		〃	
26	大山		〃	

## 6. 小林和作とそのコレクション

1982(昭57)年6月8日～9月26日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	秋山	小林和作	油彩・キャンバス	
2	海	〃	〃	
3	春	〃	〃	
4	海	〃	〃	
5	伊太利カプリ島風景	〃	〃	
6	秋果	〃	〃	
7	春の海	〃	〃	1974
8	室戸	〃	水彩・紙	
9	霧島山中六観音池	〃	〃	
10	坊ノ津燈台附近	〃	〃	
11	桜島	〃	〃	
12	奈良	〃	〃	
13	女と龍	梅原龍三郎	〃	
14	椿	中川一政	紙本彩色・額	
15	ノートルダム	林 武	水彩・紙	
16	婦人の顔	青山熊治	油彩・キャンバス	
17	カプリ島風景	山脇信徳	〃	
18	フローレンスタ映	西山英雄	紙本彩色・額	

## 7. 小林和作の世界

1982(昭57)年9月28日～1983(昭58)年1月9日

出品作品 (12～18番は11月2日～11月14日をのぞいて展示)

番号	作 品	材質・形状
1	残雪の妙高山中	油彩・キャンバス
2	海	〃
3	海	〃
4	海	〃
5	秋山	〃
6	秋晴	〃
7	秋山	〃
8	桜島	水彩・紙
9	坊ノ津燈台附近	〃
10	室戸	〃
11	霧島山中六観音池	〃
12	果物	紙本彩色・軸
13	きつつき	〃
14	桃鳩	〃
15	檜島	〃
16	南画風山水	絹本墨画彩色・軸
17	山茶花と青鳩	絹本彩色・軸
18	白椿	〃

## 8. 小林和作とそのコレクション

1983(昭58)年1月11日～4月24日

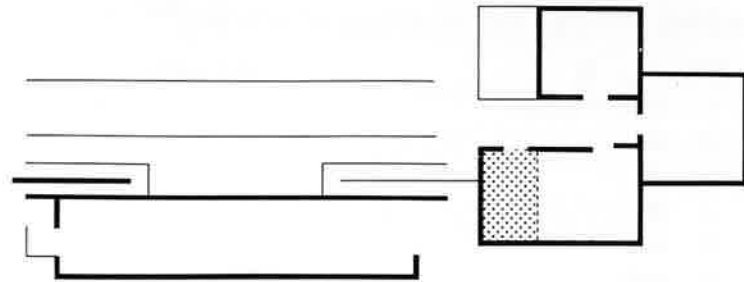
### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状
1	婦人像	小林和作	油彩・キャンバス
2	海	〃	〃
3	秋山	〃	〃
4	春	〃	〃
5	海	〃	〃
6	秋果	〃	〃
7	隠岐浄土ヶ浦	〃	水彩・紙
8	隠岐国賀	〃	〃
9	隠岐白島	〃	〃
10	日の岬	〃	〃
11	山陰上石見にて	〃	〃
12	慶長時代風俗画遊楽之図		紙本彩色・軸
13	寛永時代風俗人物画		〃
14	豊国風立美人		〃
15	久米仙人	平 岸	絹本彩色・軸
16	美人画	宗 寿	〃
17	美人画双幅	月岡雪鼎	〃



## 資料展示室

(美術史資料その他)



### 1. 中本達也小品展

1981(昭56)年3月17日～7月12日

#### 趣 旨

1973年51歳で夭折した中本達也は、1959年にみづゑ賞を受賞し、ついでその年の安井賞まで受賞し、一躍当時の画壇の注目を集めた。

今回は1960年前後のエッチング作品とともに、ヨーロッパ旅行後の水彩作品、そして60年代後半から70年代前半に描かれた小説のカバー装画や雑誌のカットを展示する。単純化された人間の顔や肢体は、その底から多様な情念が湧出してくるような、いわば人間の内面の断片ともいえるものである。

#### 出品作品

番号	作 品	材質・形状	制作年
1	人	油彩・キャンバス	1967
2	人びと	水彩・墨・紙	1965
3	西方の女	水彩・コラージュ・紙	1968
4	Sacra S.Michele	水彩・パステル・紙	1964
5	古代ローマの二人	墨・紙	1964
6	三島由紀夫「豊饒の海」カット	〃	1968
7	〃	〃	1968
8	〃	墨・コラージュ・紙	1968
9	ハーディ「テス」装画	墨・紙	
10	スタインベック「怒りの葡萄」カバー装画	油彩・墨・紙	
11	開高健「パニック・裸の王様」カバー装画	〃	1971
12	M氏宛葉書	墨・紙	1970
13	とり	銅版・水彩・紙	1957
14	野の花	銅版・紙	1959
15	潮	〃	1960
16	作品	〃	1960
17	南の実	〃	1961
18	地底の花	〃	1961
19	化石(葉)	〃	1961
20	海	〃	1962

## 2. 香月泰男のカット絵原画と陶画

1981(昭56)年7月14日～10月25日

#### 趣 旨

香月泰男は、シベリア抑留から昭和22年に帰国すると、さっそく旺盛な制作活動を再開するが、その活動の一環として新たに着手されたのがカット絵と陶画である。昭和26～27年頃に始まり晩年に至るまで続けられたこのふたつの分野の仕事は、単に独立した仕事として秀れているばかりでなく、彼の本業である油絵に影響を与えている点においてもきわめて大きな意義をもっている。今回は、カット絵原画として、朝日新聞「新・人国記」(山口編)のために描かれたカット絵原画(全20点のうち12点)と、陶画として鉢、皿、茶碗などの絵つけ代表作十数点を紹介し、一方では修正の許されない絵つけの呼吸、他方ではカットの絵にみられる濃淡のトーンや自由な線と面のリズム、これらが相互にどのように影響しあっているか、またそれぞれの独自の制約を備える表現素材が、どのような手の作業を通していわゆる香月泰男の表現にまでたかめられているかを探る。

#### 出品作品

番号	作 品	材質・形状
1	新・人国記(山口県の略図)	鉛筆・墨・紙
2	〃 (八代のツル)	〃
3	〃 (岩国の錦帯橋)	〃
4	〃 (ザビエル記念聖堂)	〃
5	〃 (石城山遠望)	〃
6	〃 (山口常栄寺の庭)	〃
7	〃 (宇部の常盤池)	〃
8	〃 (萩松下村塾)	〃
9	〃 (青海島遊覧)	〃
10	〃 (萩市遠望)	〃
11	〃 (秋芳洞)	〃
12	〃 (長門峡)	〃
13	母子	陶板
14	母と子	〃
15	すすき	〃
16	あやめ	〃
17	ほおづき	〃
18	ギリシア	〃
19	みょうが	〃
20	桔梗	〃
21	モロッコ	〃
22	桔梗	萩皿
23	自画像	〃
24	男の像	〃
25	牡丹	萩大皿
26	くずかずら	〃

番号	作 品	材質・形状	制作年
27	そら豆	萩四方鉢	
28	つゆくさ・ぎばし	湯呑(2客)	
29	数珠玉	萩茶碗	

### 3. 雪舟と芳崖

1982(昭57)年11月2日～11月14日

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	山水小巻	雪 舟	紙本墨画・画巻	1474
2	牧牛図2幅	〃	紙本淡彩・軸	
3	八臂弁才天図	狩野芳崖	絹本彩色・軸	
4	雪中山水図	〃	紙本墨画淡彩・軸	
5	青砥藤綱滑川拾銭図	〃	〃	
6	羅漢図双幅	〃	紙本彩色・軸	

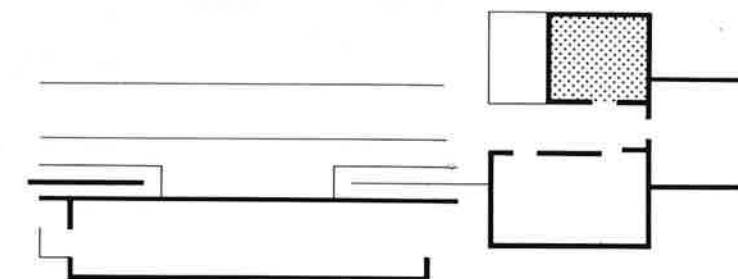
### 4. 香月泰男のさし絵展

1983(昭58)年1月11日～4月24日

#### 出品作品

番号	作 品	材質・形状
1	新・人国記(山口県の略図)	鉛筆・墨・紙
2	〃 (八代のツル)	〃
3	〃 (岩国の錦帯橋)	〃
4	〃 (秋穂のエビ養殖場)	〃
5	〃 (ザビエル記念聖堂)	〃
6	〃 (山口常栄寺の庭)	〃
7	〃 (徳山尚白園)	〃
8	〃 (宇部の常盤池)	〃
9	〃 (萩松下村塾)	〃
10	〃 (捕鯨古図)	〃
11	〃 (青海島遊覧)	〃
12	〃 (防府天満宮から見た市街)	〃
13	〃 (秋芳洞)	〃
14	〃 (長門峡)	〃
15	〃 (長門市の南条踊)	〃
16	〃 (大内人形・夏橙)	〃
17	〃 (たこ・ふぐ)	〃

## 郷土工芸室



### 1. 萩焼展

1981(昭56)年4月14日～7月12日

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	花I	三輪龍作	1977
2	予感	〃	1977
3	花器「曉雲」	吉賀大眉	1973
4	麦文壺	〃	1946
5	萩井戸茶碗	〃	
6	萩ちりめん釉花入	11代 坂高麗左衛門	1979
7	萩茶碗	〃	1975
8	〃	12代 坂倉新兵衛	
9	萩水指	〃	
10	萩茶碗	14代 坂倉新兵衛	1974
11	萩平水指	〃	1974
12	萩花入	〃	1974
13	萩茶碗	12代 田原陶兵衛	1978
14	萩水指	〃	1978
15	萩灰被耳付花入	〃	1979
16	萩茶碗	13代 坂田泥華	1979
17	萩水指	〃	1978
18	萩茶碗	11代 三輪休雪	1979
19	〃	〃	1979
20	萩茶碗	三輪休和	1975
21	〃	〃	1976
22	赤間硯「ビルディング」	堀尾卓司	1970
23	〃 「双体」	〃	

### 2. 萩焼水指展

1981(昭56)年7月14日～10月11日

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	萩編笠水指	三輪休和	1973
2	萩水指	11代 坂高麗左衛門	1975
3	〃	〃	

番号	作 品	作 者	制作年
4	〃	12代 坂倉新兵衛	
5	萩とじめ水指	〃	
6	萩水指	〃	
7	萩水指	11代 三輪休雪	
8	〃	〃	
9	〃	13代 坂田泥華	1978
10	〃	〃	
11	〃	12代 田原陶兵衛	1978
12	〃	〃	

### 3. 現代の萩焼展

1981(昭56)年10月13日～1982(昭57)年1月31日

#### 趣 旨

古萩展に関連して三輪休和をはじめとする現代萩焼作家の作品を展示。

### 4. 萩焼と赤間硯

1982(昭57)年2月2日～4月4日

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	赤間硯「ビルディング」	堀尾卓司	1970
2	〃 「おしべ」	〃	1957
3	萩茶碗	14代 坂倉新兵衛	1974
4	〃	〃	1974
5	萩食籠	〃	1974
6	萩水指	11代 三輪休雪	
7	萩茶碗	〃	1979
8	麦文壺	吉賀大眉	1946
9	花器「暁雲」	〃	1973
10	斗々屋写茶碗	〃	1974
11	萩灰被耳付花入	12代 田原陶兵衛	1979
12	萩割高台茶碗	〃	1979
13	萩茶碗	13代 坂田泥華	1979
14	萩水指	〃	1978
15	〃	11代 坂高麗左衛門	1975
16	萩鉢「早春」	三輪龍作	1981
17	〃 「雷童」	〃	1981

### 5. 11代坂高麗左衛門遺作展

1982(昭57)年4月6日～5月30日

#### 趣 旨

「伝統は守らなければならない。しかし、十代のやった仕事をそのまま受け継ぐのでは一、それは伝統ではなく因習でしかない。一回、一回が一年生です。薄氷を踏む思いです。」昭和33年、萩焼の名門坂家の十一代高麗左衛門を襲名したときのことばである。以来、伝統に現代的な感覚を盛り込んだ独自の作風で今日の萩焼の隆盛に貢献し、とりわけ土灰うわぐすりを駆使した独特の井戸茶碗には熱烈なファンも多かった。

昭和56年1月、惜しまれて世を去ったが、「萩焼は色や形だけで評価すべきものではない。使いやすくて美しいものでなくてはならない。」という信条は、彼の作品の中に生きている。

今回は、井戸茶碗を中心に30点を展覧する。

#### 出品作品

番号	作 品	制作年
1	萩井戸茶碗	1975
2	〃	1979
3	〃	1980
4	萩茶碗	1970
5	萩井戸茶碗	1976
6	〃	1977
7	〃	1980
8	萩唐人笛茶碗	1980
9	萩割高台茶碗	1979
10	萩三島茶碗	1975
11	萩割俵茶碗	1968
12	萩井戸茶碗	1980
13	萩水指	1975
14	萩中置水指	1975
15	萩茶入	1980
16	萩肩衝茶入	1979
17	萩文琳茶入	1979
18	萩ちりめん釉花入	1979
19	萩耳付花入	1978
20	萩魚文壺	1975
21	萩水蓮文壺	1974
22	萩竹花入	1980
23	萩干支香合(子)	1970
24	〃 (龍)	1974
25	〃 (羊)	1978
26	〃 (酉)	1980
27	萩六瓢蓋置	1980
28	萩德利	1979
29	萩酒盃	1974
30	〃	1974

## 6. 吉賀大眉展

1982(昭57)年6月1日～8月15日

### 趣 旨

「暁雲」シリーズで知られる吉賀大眉の戦前から最近までの作品をそろえ、小規模ながら、その歩みを展覧会出品作品を主に概観しようとする展示である。

日本芸術院賞を受賞した「暁雲」連作に代表される作品は、単純なフォルムに見せる力強い形態感覚と、萩焼の白釉を主として、鉄のさまざまな発色を効果的に配した釉調によって独自の領域を切り開いている。

### 出品作品

番号	作 品	制作年
1	羽毛文面取花器	1942
2	象嵌花瓶	1943
3	麦文壺	1946
4	草花文水盤	1947
5	菱形檜垣円文花器	1954
6	花器菱	1965
7	陶壺「暁雲」	1966
8	深雪	1967
9	花器「暁雲」	1973
10	広口花器「朝」	1975
11	暁雲大海	1976
12	朝霧	1979
13	曙	1981

## 7. 個人コレクション展 I

1982(昭57)年8月17日～10月3日

### 趣 旨

個人コレクションは、たとえば国宝、重要文化財といった名品とよばれるものがなくとも、テーマや方向性が明らかで、ひとつのまとまった個性のようなものが感じられるものであれば意味があるといえよう。

今回は、その第1回目として岩国市長河上武雄氏所蔵の中国・朝鮮古陶磁コレクションを展示した。

### 出品作品

番号	作 品
1	青磁盤口瓶
2	青磁刻線文碗

番号	作 品
3	青磁牡丹唐草文瓶
4	青磁魚文盤
5	五彩龍文盤
6	五彩花卉文盤
7	五彩人物文盤
8	赤絵金彩細口瓶(金襴手)
9	青花山水人物文盤
10	青花人物文盤
11	粉彩花卉文盤
12	青磁象嵌雲鶴文鉢
13	青磁鉄絵花卉文瓶
14	五彩菊花梅樹文瓶
15	青磁花卉文瓶
16	白磁鳥文壺
17	白磁祭器
18	粉彩三友文鉢
19	黒地粉彩龍文瓶
20	粉彩百花文瓶
21	三彩盃
22	緑釉広口壺
23	青磁広口壺
24	青磁双魚文盤
25	澱青釉壺
26	紫紅盤
27	紅釉合子(桃花紅)
28	粉彩花卉文合子
29	褐釉碗
30	黒釉碗
31	褐釉碗(天目茶碗)
32	家形水滴
33	桃形水滴
34	粉青沙器碗
35	青井戸茶碗
36	斗々屋茶碗
37	井戸脇茶碗

## 8. 現代の萩焼

1982(昭57)年10月5日～1983(昭58)年2月6日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	萩編笠水指	三輪休和	1973
2	萩筆洗切茶碗	〃	1975
3	萩茶碗	11代 三輪休雪	1978
4	〃	〃	1979

番号	作 品	作 者	制作年
5	萩水指	11代 三輪休雪	
6	萩割高台茶碗	12代 田原陶兵衛	1979
7	萩灰被耳付花入	〃	1979
8	萩水指	13代 坂田泥華	1978
9	萩茶碗	〃	1979
10	〃	12代 坂倉新兵衛	
11	萩水指	〃	
12	萩茶碗	14代 坂倉新兵衛	1974
13	萩食籠	〃	1974
14	萩花入	〃	1974
15	萩茶碗	11代 坂高麗左衛門	
16	萩水指	〃	1975
17	萩魚文壺	〃	1975
18	斗々屋写茶碗	吉賀大眉	1974
19	萩井戸茶碗	〃	
20	花器「曉雲」	〃	1973
21	花 I	三輪龍作	1977
22	女	〃	1976
23	LOVE(ハイヒール)	〃	1969
24	鉢「雷童」	〃	

## 9. 郷土の陶芸 I ―豊北町の陶磁器(原焼)―

1983(昭58)年1月11日～5月8日

趣 旨

「シリーズ 郷土の陶芸」は、近世山口各地でつくられた陶磁器を紹介し、山口県の陶磁史を概観しようとするものである。

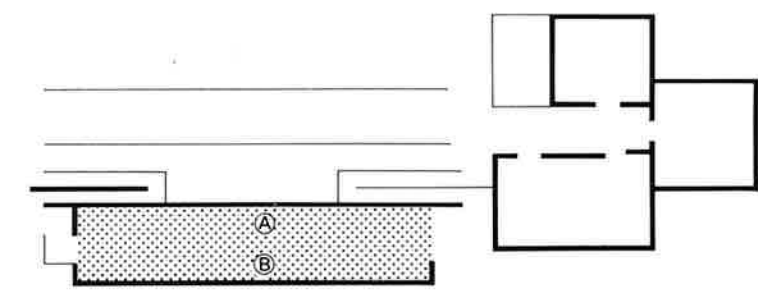
出品作品

番号	作 品	材質・形状	制作年
1	染付山水図盃	紙本彩色・額	1960
2	染付人物図盃	〃	1963
3	染付盃	彩色・キャンパス	1964
4	染付葡萄文高足盃	絹本彩色・額	
5	染付花卉蝶文酒器		
6	染付松樹文酒器		
7	染付花卉文瓶		
8	染付葡萄文瓶		
9	染付扇面花卉山水図蓋付鉢		
10	染付花卉文鉢		
11	染付花卉山水図大皿		
12	染付山水図皿		
13	染付山水図蓋付壺		
14	染付山水図植木鉢		
15	染付牡丹文盃洗		

番号	作 品	材質・形状	制作年
16	色絵牡丹文盃洗	紙本彩色・額	1960
17	色絵花卉文鉢	〃	1963
18	色絵花鳥文角皿	彩色・キャンパス	1964
19	色絵花卉文蓋付鉢	絹本彩色・額	
20	色絵唐子七福神図大皿		
21	大福帳 4 冊(資料)		
22	陶職鑑札( 〃 )		
23	よこ 春 2 箇( 〃 )		

## 常設展示室Ⅱ

展示エリア㉔㉕はともに石膏ボードによるパネル壁面からなっているが、このうち展示エリア㉕の壁面は可動壁面となっており、この壁面の奥には固定ケースが設置されている。したがって、このエリアは壁面として油彩等の展示に利用されるほか、これを取払い、固定ケースで日本画等の展示も可能である。このため、同時期に㉔㉕を使い分け、別趣旨の常設展示を併設する場合が多い。



## 1. 藤田隆治展

1981(昭56)年5月12日～8月30日

趣 旨

豊浦郡豊北町に生まれた藤田隆治は、はじめ長府に帰郷中の高島北海に師事、のち上京して野田九浦に就いて日本画を学んだ。日本画会や青龍社展で活躍、1936年のベルリンオリンピック芸術展では3等賞を受賞した。戦後は個展を中心に作品を発表、毎日新聞社主催の現代日本美術展にも委嘱出品をしている。1965年1月57歳で逝去。戦前は平明な写実を基本とした作品を描いたが、戦後は絵具の材質感を生かした幻想的な作風に移った。今回は遺族から寄贈された戦後制作の作品を展示する。

出品作品

番号	作 品	材質・形状	制作年
1	原始太陽	紙本彩色・額	1960
2	三眠	〃	1963
3	動的な群像	彩色・キャンパス	1964
4	魚貝石	絹本彩色・額	

番号	作 品	材質・形状	制作年
5	海老と魚	紙本彩色・額	
6	鳥と魚	絹本彩色・額	
7	鷺のいる風景	紙本彩色・2曲屏風一双	
8	魚のいる風景	彩色・キャンバス	
9	有明海	紙本彩色・額	
10	格子魚	〃	

## 2. 山口県近代洋画の流れ

1981(昭56)年 5 月12日～ 8 月30日
趣 旨
具象から抽象まで非常に幅広い領域で、多面的に展開した山口県の洋画の流れをクローズアップする。

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	紋り	永地秀太	油彩・キャンバス	1913
2	婦人像	〃	〃	
3	裸婦	桑重儀一	〃	
4	百合花	錦義一郎	〃	
5	マドモワゼルS	〃	〃	
6	欲張り婆さん	桂 ゆき	油彩・紙・板	1966
7	アダムとイヴ	〃	〃	1968
8	作品	〃	〃	1968
9	月夜	松田正平	油彩・キャンバス	1956
10	砧風景	〃	〃	1958
11	高萩風景	〃	〃	1959
12	さいはて	三浦俊輔	〃	1973
13	舳先	尾崎正章	〃	1977
14	地平のさすらい	田中稔之	〃	1965
15	円の響応	〃	〃	1976
16	古園	入江一子	〃	1966

## 3. 山口県の近・現代彫刻

1982(昭57)年 2 月24日～ 5 月30日
趣 旨
明治期の彫刻は洋風彫刻の移植と伝統木彫の近代化とのふたつの流れを包摂し、洋画と日本画間のそれに似た諸相をみせながら大正、昭和へと展開していく。とはいえ、絵画にくらべ近代化に大幅な遅れをとったことは否定できない。

ところでそういった展開の中で、県関係の近代的な意味の彫刻家の活躍は、明治後期生まれの世代にまたれる。今回はこの第一世代ともいうべき作家の中から、朝倉文夫に師事し重厚な人体造形を追求した河内山賢祐、高村光雲に師事したのち木彫からブロンズに転じた中野四郎などを展示。

また第二世代として戦後活躍する現代彫刻家の中から「ドッキングシリーズ」で県下に現代彫刻家の波を起こした田中米吉、「そりのあるかたちシリーズ」で注目される澄川喜一、萩焼の手法で漸新なオブジェを創出する三輪龍作、といった作家をとりあげる。

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材 質	制作年
1	マスク	澄川喜一	木	1977
2	おうぎ	〃	〃	
3	そりとそぎ	〃	〃	1980
4	女	三輪龍作	陶器	1976
5	花Ⅰ	〃	〃	1977
6	花Ⅱ	〃	〃	1977
7	無題(裸婦抽象)	河内山賢祐	ブロンズ	1962
8	立像C	〃	石膏	1952
9	永遠	中野四郎	ブロンズ	1968
10	踊り子	〃	〃	1953
11	若い女	〃	〃	1957
12	或る日	〃	木	1944
13	渌(エスキース)	〃	ブロンズ	1957
14	トルソ	〃	〃	1951
15	点字A	田中米吉	アルミ板・ラッカー	1965
16	ドッキングNo. 15	〃	プラスチック・グラスファイバー・アクリルラッカー	1974
17	ドッキングNo. 22	〃	プラスチック・グラスファイバー・アクリルラッカー	1975
18	ドッキングB W. 20	〃	アルミ・鉄・アクリルラッカー	1968
19	碧空	中村青田	木	1971
20	フルートを吹く女	伊藤 鈞	ブロンズ	1970
21	カリアチュード	〃	石膏	1963

## 4. 山口県近代日本画の流れ

1982(昭57)年 6 月1日～ 9 月2日
趣 旨
明治以降の近代日本画の黎明期において、山口県出身作家は美術史上に大きな足跡をのこした。明治初期には狩野芳崖、森寛斎を輩出し、彼らはそれぞれ独自の画風をもって画壇をささえた。明治末期には初期文展の審査員などをつとめた高島北海、帆足杏雨に教えをうけた金子鷗雨らがいた。大正期に入ると田能村直入の弟子となり伝統的な南画の画風を堅持した田中柏陰、昭和期には帝室技芸員

となり近代南画の復興に尽力した松林桂月や鷹の描写を得意とした福田翠光、幻想的な作風をもった藤田隆治らが出、活気を呈した。

出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	動的な群像	藤田隆治	彩色・キャンバス	1964
2	山葡萄	福田翠光	絹本彩色・軸	1955
3	愛吾廬図	松林桂月	〃	1936
4	緑蔭水亭図	田中柏陰	〃	1919
5	群仙図	金子鷗雨	紙本彩色・軸	
6	春秋山水図屏風	高島北海	紙本金地彩色・六曲一双	1928
7	山水図屏風	森 寛斎	紙本墨画淡彩・六曲一双	1884
8	牧馬図	狩野芳崖	紙本墨画・軸	
9	四季耕作図屏風	〃	紙本墨画淡彩・四曲一隻	

5. 洋画にみる人間像

1982(昭57)年6月1日～9月2日

趣 旨

明治以降の急速な文明開化は洋画の技法の発達と同時にその対象のつかみ方の変革にも影響を及ぼした。西洋からの油彩画の導入は、従来日本の絵画で求められた主観性とは別個のものである対象の造形感あるいはその構造といった客観性を求める側面を生み出したといえる。

特に人物表現は、描かれる対象への主観性と客観性の接点を見る上で非常に興味のある題材であるといえよう。

出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	更紗の前	永地秀太	油彩・キャンバス	1924
2	壁に倚れる女	〃	〃	
3	ホノルル	桑重儀一	〃	1915
4	婦人像	小林和作	〃	
5	マドモワゼルS	錦義一郎	〃	
6	欲張り婆さん	桂 ゆき	油彩・紙・板	1966
7	笑う人	〃	油彩・キャンバス	1968
8	女	里見勝蔵	〃	
9	1945	香月泰男	〃	1959
10	北へ西へ	〃	〃	1959
11	残された壁(女)	中本達也	〃	1967
12	裸婦	松田正平	〃	
13	旅芸人	宮崎 進	〃	
14	黄色い壁	〃	〃	1976
15	昼	〃	〃	1676
16	木精の地(Ⅰ)	山本文彦	〃	1979

6. 屏風絵展

1982(昭57)年10月13日～1983(昭58)年1月23日

趣 旨

屏風は日本の邸宅へ西洋からの生活様式がさかんに導入されるようになる以前は、きわめて実用的な調度品であった。したがってそこに描かれた屏風絵は古くより日本人の生活に密着した鑑賞画として親しまれ、その主題・技法・様式も各時代の生活感情と深く結びついたものであった。

出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	樓閣山水図屏風	雲谷等顔	紙本墨画淡彩・六曲一双	
2	四季耕作図屏風	狩野芳崖	紙本墨画淡彩・四曲一隻	
3	牧童図屏風	森 周峰	〃	
4	巖上鷺図屏風	森 寛斎	紙本墨画・六曲一隻	
5	龍虎図屏風	〃	紙本彩色・八曲一双	1848

7. 近・現代の風景画

1982(昭57)年10月13日～1983(昭58)年1月23日

趣 旨

風景は時代や地域によってさまざまな捉えられ方をしてきた。風土、民族性、科学の進歩による自然観の変化などに加えて、画家個人の資質や表現意図によって、きわめて多様なあらわれかたをする。日本の近代以降の風景画にかぎってみても、日本的共通性と同時に、その変化と広がりがつよくうかがわれる。

出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	トレド風景	桑重儀一	油彩・キャンバス	1921
2	風景	河上左京	水彩・紙	
3	〃	〃	〃	
4	パイカル	香月泰男	油彩・キャンバス	1971
5	風景	錦義一郎	〃	
6	カブリ島風景	山脇信徳	〃	
7	魚のいる風景	藤田隆治	彩色・キャンバス	
8	フローレンスタ映	西山英雄	紙本彩色・額	
9	海	小林和作	油彩キャンバス	1964
10	春の海	〃	〃	1974
11	網船	澤野文臣	紙本彩色・額	1957
12	バーミヤン回想	入江一子	油彩・キャンバス	1977
13	有明海(えご)	三浦俊輔	〃	1977

番号	作 品		材質・形状	制作年
14	砧風景	松田正平	油彩・キャンバス	1958
15	月夜	〃	〃	1956
16	赤の地平	田中稔之	〃	1976
17	ランドスケープ	宮崎 進	〃	1976

## 8. 現代の陶芸

1983(昭58)年 1 月25日～ 5 月29日

### 趣 旨

単に、伝統的拘束のつよい陶芸という分野において新しい造形の可能性を探るというだけでなく、逆に新しい表現を求めるために土と火という素材を選んだともいえる作家たちにとって、もはやジャンルの枠は存在していないのかもしれない。荒木高子、伊藤公象、鯉江良二、里中英人、星野暁、三島喜美代、三輪龍作の「現代陶芸」を代表する 7 人の作家の作品によって、その造形するところの意味を問う。

### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	砂の聖書	荒木高子	1980
2	起土―魚形の仮説―	伊藤公象	1982
3	証言	鯉江良二	1973
4	スパーク・スパーク ・アーム	〃	1982
5	赤ちゃんの <small>ヘルメット</small> 帽子	里中英人	1973
6	表層深層	星野 暁	1982
7	Appearance・Substance	〃	1982
8	コピー'82	三島喜美代	1982
9	LOVE (ハイヒール)	三輪龍作	1969
10	花器	〃	1982
11	流沙の人	〃	1979

## (3) 共催展など

いわゆる共催展は、新聞社などの企画による巡回展が主なものである。原則として年 2 回程度開催する。展示場は、企画展示室ⅠおよびⅡを使用する。

### 昭和56～57年度の主な共催展

1. ピカソ陶芸展……………	62
生誕100年記念	
2. イヴ・ブレイエル展……………	63
3. 鮮烈な色彩―フォーブの巨匠……………	64
モーリス・ド・プラマンク展	
4. サンパウロ美術館展……………	66



## 1. ピカソ陶芸展

生誕100年記念

1981(昭56)年6月27日～8月2日

月曜日休館

主催 TYS テレビ山口・山口県立美術館・毎日新聞社・TNC テレビ西日本・国際文化交流協会

後援 山口県・山口県教育委員会・外務省・文化庁・スペイン大使館・フランス大使館

協力 彫刻の森美術館

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

1946年、南フランスのヴァローリスを訪れたピカソは、はじめて陶土を手にした。その手からつくり出されたのはわずか3点の小品であったが、翌年からは本格的な制作がはじまった。その作品は、本展図録に中原佑介氏が書かれているように、三通りに大別できよう。第1は皿に絵の描かれた作品、第2は花瓶などを変形した作品、第3はいわゆる陶彫である。それらは、中原氏の指摘のように、物質の変貌を簡明に示し得る方法として、いとも自由に、そして気儘に描かれ、形づくられている。顔となり、闘牛場となった皿、ふくろうとなり、人のからだとなった花瓶、そして、ひねりだされたハト、それらはすべてピカソ以外のなものでもなく、そこにある。

本展に出品された作品は、ピカソの遺品として、マイア・ウイドマイアーが相続したものである。陶芸というジャンルが本質的にもつ親しみやすさといったものが、これらの作品にもみなぎり、絵画や彫塑とは質的に異なった展覧会となっており、ピカソの一断面を見るのには意義あるものであろう。

### カタログ

編集 フジテレビギャラリー

### 内容

ごあいさつ 中安閑一(テレビ山口株式会社社長)

メッセージ ホセ・アラゴネス(駐日スペイン大使)

メッセージ グザビエ・ドーフレヌ＝ド＝ラ＝シュバルリー(駐日フランス大使)

ピカソと土の変貌 中原佑介

ピカソの陶芸と創造性をめぐる言葉

図版

ピカソの陶器 ジョルジュ・ラミエ

ピカソの手 中田耕治

写真 デービッド・ロ・ダンカン

年譜 八重樫春樹

出品リスト

制作年代別索引



## 2. イヴ・ブレイエル展

(KRY山口放送開局25周年記念)

1981(昭56)年12月9日～12月24日

月曜日休館

主催 KRY 山口放送・読売新聞西部本社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・フランス大使館・山口県・山口県教育委員会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

フランス絵画においてすぐれてフランス的なものとは何か。そのことを考えさせずにはおかなかったものにイヴ・ブレイエル(1907～)の回顧展があった。ブレイエルの画面は明解そのものである。どの部分も一たとえば陰影すらも一澄明な鏡にうつし出されたかのように彫塑的形象を得ながら、全体の調和のなかにおさめられている。風景・人物いずれにも通底する赤と黒のセンスのある使いわけも、そうした線の秩序を乱してはいない。作品を見おわっての印象からみちびきだされるのは、内面(イデアリズム)に対する外界(リアリズム)への関心の優位、質料として重さ(触覚性)に対する形態性(視覚性)の優位、さらにタッチに対する線の、厚ぬりに対する平ぬりの優位といったものであり、要するにブレイエルの芸術は、われわれがフランス的とイメージするものに、より具体性をあたえてくれるものである。魂の暗部の不条理にさえ、くまなき知性の光をあてようとするデカルト以来の主知主義的な性向を、フランス的というとき、たしかにフランス絵画の独自性とは、節度と明晰さを特長とするブレイエル芸術にこそより妥当するといわなければならない。

しかしながら一方、フランスにはもう一つの顔がある。前世紀の印象派から新印象主義、さらに20世紀はじめのフォーヴィスム、キュビズムから今次大戦後のアンフォルメルまで絵画が絵画以外のなものでもあろうとしないための実験を、まったくの内発的持続的論理において、おし進めてきた歴史の顔である。このいわゆる前衛の第一線で戦闘的に様式史をぬりかえてきた歴史の所産としての絵画も、そうした純粋な展開が、この国でしかおこりえなかった、という意味ではすぐれてフランス的といわざるを得ない。だとすれば、フランス絵画の独自性(アイデンティティ)は、今世紀におけるめまぐるしい継起的喧噪のなかで二つの方向に分極化していった、と考えるべきなのだろうか。またその過程から生じた具象と抽象の対立は、民族の深層にまでさかのぼって、ラテン的古典とケルト的古代の対立という歴史的民族的コンテクストにおいて理解されるべきなのだろうか。

その際、絵画の独自性の両極分解という表現は厳密に言えば正しくない。なぜならばこの二つは、一つの原理から発生しながら途中根わかれした二つの原理からの、独立した展開に起因すると考えられるからである。一つは近代において自国文化のアイデンティティを求める原理、二つはその文化から生まれながら文化からの独立をとげることによって、あるいは文化を捨てることによって、絵画が絵画そのもののアイデンティティを求める原理である。前者からブレイエル芸術が成立したことはいうまでもない。そして後者の原理が、今日、絵画を自家撞着の矛盾に至らしめていることも明らかなのである。

1911年から77年までの油彩画60点に、水彩20点、デッサン10点、舞台装置と衣裳5点、挿絵本6点

が展示された。

## カタログ

### 内容

ごあいさつ

メッセージ グザビエ・ドーフレヌ=ド=ラ=シュバルリー（駐日フランス大使）

イヴ・ブレイエルへのオマージュ クロード・ロジェ=マルクス

イヴ・ブレイエルとスペイン フランソワ・ドールト

イヴ・ブレイエルとイタリア ピエール・デュ・コロンビエ

カラー図版

モノクローム図版

フランス現代絵画とイヴ・ブレイエル 村木明

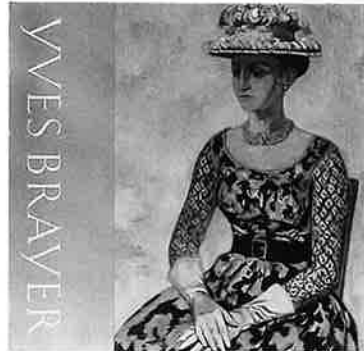
イヴ・ブレイエル画伯訪問記 塩谷敬

出品リスト

アルバム

イヴ・ブレイエルの年譜 村木明訳・編

参考文献抄



## 3. 鮮烈な色彩—フォーブの巨匠

### モーリス・ド・ブラマンク展

1982(昭57)年5月15日～6月27日

月曜日休館

主催 KRY 山口放送・読売新聞西部本社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・フランス大使館・山口県・山口県教育委員会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

近年わが国では一昨年のマチス展を頂点にしてマンガン、ドランなどフォーブ系作家の回顧展もさかんであるが、そのなかにあってマチスに比肩するほど重要と思われるにも拘らず、画集、展覧会いずれにおいてもこれまで余りとりあげられる機会のなかった作家に、モーリス・ド・ブラマンク（1876～1956）がいる。ブラマンクは、わが国では里見勝蔵や佐伯祐三に関連して有名であるが、そのわりには晩年の暗い雪景色や静物が知られるのみで、その芸術すべてにおよぶ実体理解にはほど遠いものがあつた。こうした事情を反映してか、本展は水彩・版画・陶画とともにブラマンクの全画業を網羅する油彩によるトータルで106点の作品構成からなり、文字どおり質・量とも大型回顧展にふさわしい性格があたえられていた。なかでも今回の回顧展を意義ぶかくしたのは、フォーブの成立と軌を一にした彼の画壇デビューをピークに、そこからキュビズムやセザンヌへの接近によって画面が構成的傾向にうつり変わるまでの初期作品の紹介である。この部分は、フォービズムの代表画家と評

されながら、そのブラマンクを晩年の作品を通してしか知りえなかったこれまでの不足を十分にうめあわせてくれた。それによって、ようやくフォーブ期におけるこの画家の実像が得られたといつてよい。いずれにせよこの時期をはじめ彼の生涯の作品をこれほどまとまった量でみる事ができたのはこれがはじめてであり、その意味で貴重な機会だったといわなければならない。

ブラマンクが日本に紹介されたのは、大正も10年代に入ってからである。同じフォーブ系のマチスが明治42年には早くも高村光太郎の解説つき翻訳「アンリ・マチスの画論」を通して「スバル」誌上に紹介されているのに比べると、その紹介は決して早くはない。作品では、大原コレクションの基礎をつくった児島虎次郎が、大正12年泰西名画蒐集のため三度めの最後の渡欧をした際、ブラマンク2点を買ひもとめたことが知られる。しかしこれも、マチス、マルケなどが、かれの大正10年の第1回収集旅行ですでに購入されていることを想えば、それほど早い買ひものではなかった。もっともマチス購入については、絵画研究の手本としてというより、むしろ西洋のあたらしい動向に対する浮わついた模倣をいましめるという逆の教育配慮からでたものといわれ、恐らくブラマンクもそうした意図からコレクションに入ったのかもしれない。この大正後半期は、ヨーロッパにわたった里見勝蔵や佐伯祐三が現地でブラマンクに強い感化をうけた時代でもあつた。やがてこれらの画家が日本にブラマンクとフォービズムを伝える。しかしその様式や思想は一部の若手「前衛」作家のあつまる1930年代協会の重要な構成要素とはなりながらも、結局装飾性のつよい日本の表現主義を刺激しただけで終つた。

## カタログ

編集 瀬木慎一

### 内容

ごあいさつ

メッセージ グザビエ・ドーフレヌ=ド=ラ=シュバルリー（駐日フランス大使）

ブラマンクの教え フランソワ・ドールト

カラー図版

モノクローム図版

カタログ フランソワ・ドールト

ブラマンクのフォーヴ時代 マルセル・ジリー

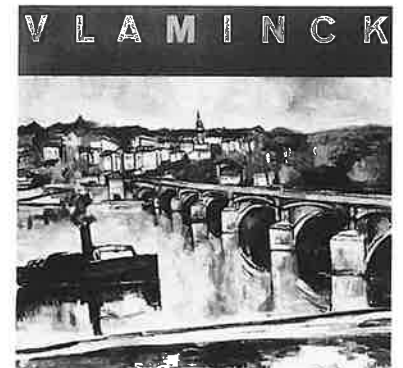
ブラマンクの進展 エレーヌ・ルジウール=トゥッペ

ブラマンクと生活環境 瀬木慎一

手紙による前書き ブラマンク

ブラマンク年譜

文献



## 4. サンパウロ美術館展

1983(昭58)年1月5日(水)～1月30日

月曜日休館

主催 サンパウロ美術館・サンパウロ美術館展組織委員会・毎日新聞社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・ブラジル大使館

協力 ヴァリグ・ブラジル航空

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

ブラジルのサンパウロ美術館の所蔵品展は、西欧絵画の総合的な展覧として2回(1973年、1978年)、「ドガ・彫刻のすべて」展(1979年)を含めて過去3回紹介されているが、本展は、パブロ・ピカソの「競技者」ほか、新たに紹介される8点を含めた泰西名画60点と、ブラジルを代表する近・現代の主要な作家26人の26点とで構成された。

前者は、創設者アシス・シャトーブリアンのコレクションの粋ともいえるべきものであり、1400年代から今世紀初頭までの美術史上の主要な作家と傾向(様式)をよくおさえたもので、比較のごく新しく形成されたコレクションとしては、その充実ぶりが高く評価されているものである。たとえばルネサンス期のもを見れば、フィレンツェ派、ヴェネツィア派のイタリア、北方のフランドル、オランダ、ドイツというように地域的な幅が考慮され、バロック期には宗教性の高いエル・グレコとフランス・ハルスなどの現実的なものへの眼差しがふたつながらに示されるなど、美術史的な大きな流れが時代を追って理解されるとともに、モチーフやテーマの変化が、まさに表現の本質に深くかかわって推移しながら現代に及んでいることがよくわかった。一方、後者の側面では、日系移民の多い国柄を反映して日系人作家の比重が高められており、そこには、非ヨーロッパ文化圏に育った作家の体質と擬ヨーロッパ的な教養とが複雑に絡みあった独自の国情が読みとれるとともに、近代化が西欧化に他ならなかったわが国の姿が重なりあう部分と、南方的な風光に親しんだまったく別の感性の表出とが交互に見え隠れするといった、われわれの近代化をいわば逆照射するような要素も見受けられて興味深い。

### カタログ

#### 内容

ごあいさつ

メッセージ ラミロ・サライヴァ・グレイロ(ブラジル連邦共和国外務大臣)

メッセージ パウロ・ディセウ・ピニエイロ(ブラジル代理大使)

メッセージ ジョゼ・マリア・マリン(サンパウロ州知事)

序文 ピエトロ・マリア・バルディ(サンパウロ・アシス・シャトーブリアン美術館長)

サンパウロ美術館—その収集と活動について 陰里鉄郎(三重県立美術館長)

カラー図版

カタログ

## Ⅱ. 普及活動

### (1) 山口県美術展覧会

第35回……………68

第36回……………70

### (2) 現代美術展

山口の現代美術Ⅰ……………72

現代の陶芸Ⅰ……………76

(3) 美術講演および講座……………78

(4) 美術館ニュース……………80

(5) 移動美術館……………82

(1) 山口県美術展覧会

第35回山口県美術展覧会

会期 1981(昭56)年 9月19日～10月 4日  
会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ、常設展示室Ⅱ

○運営委員

美術作家	学識経験者
中村 脩 (日本画) 友近琢男 (洋画)	杉本春生 田口克己 杉尾 守
田中米吉 (彫塑) 吉賀大眉 (工芸)	県教育委員会
田中江舟 (書) 三堀英夫 (写真)	小林末次 (文化課長)
服部碩夫 (デザイン)	

○審査員

日本画・洋画	中原佑介 村上景介	書	今井凌雪 坪井正庵
	富永恒光 秋山 泉	写 真	林 忠彦
彫 塑	中原佑介 乾 由明	デザイン	佐口七朗
工 芸	乾 由明 中村光哉		

○受賞者

〈最優秀賞〉

MELANCONIA	濱野邦昭 (彫塑)	黒陶窯変壺「黄河への想い」
		後迫奉文 (工芸)

〈優秀賞〉

マイ・ビーナス	大野光史 (日本画)	秋のうた三題	岡村紫水 (書)
過ぎ去りし日々Ⅰ	山下哲郎 (洋画)	凝視	河田 貢 (写真)
マグマ	中本成紀 (彫塑)	FRONT	磯部 司 (デザイン)
萩線条文壺	大野孝晴 (工芸)		

〈奨励賞〉

冬山にて	三上研治 (日本画)	李賀詩	奥屋雨城 (書)
鼓動	金井健一 (洋画)	グルーム(Gloom暗影)	森脇 享 (写真)
二十歳	松原 茂 (彫塑)	HORIZON(コラージュ)Ⅱ	
黄塵の街	佐藤千鶴子 (工芸)	足立勝身 (デザイン)	

〈佳作賞〉

追憶	山県モモエ (日本画)	鉄絵山芋文鉢	大井正則 (工芸)
----	-------------	--------	-----------

夏の日	元井元子 (日本画)	紙抜十字文壺	大和敏男 (工芸)
生	窪田和則 (日本画)	白居易詩	重田恵苑 (書)
感性B	川崎遷神 (洋画)	曇り日のオホーツク海	小野成鶴 (書)
祭りの賑い	中元章一 (洋画)	牝馬	田中夢石 (書)
昼寝さめよ	堀 晃 (洋画)	沫雪の	守友玉纓 (書)
Work 81-J	小林功於 (洋画)	萬首唐人絶句	藤村鶴秀 (書)
海況々 (歩む)	藤崎恒頼 (洋画)	茂吉の歌	坂本洋子 (書)
夢のまた「夢」(リトグラフ)		高適詩	松本桃香 (書)
	武市 勝 (洋画)	初雪	松里博利 (写真)
door	祝 敔夫 (洋画)	湖面	川崎貞士 (写真)
点文鉢	加藤重美 (工芸)	DESTINY	弘重能子 (デザイン)
木漏れ陽	亀本広高 (工芸)		

○実 績

部 門	出 品	入 選	入 賞	無 審 査	展示合計	展 示 率
日 本 画	93 (84)	13 (16)	5 ( 3 )	2 ( 2 )	20 (21)	22% (25%)
洋 画	312 (283)	47 (44)	9 ( 7 )	1 ( 3 )	57 (54)	18% (19%)
彫 塑	18 (28)	2 ( 8 )	3 ( 4 )	0 ( 0 )	5 (12)	28% (42%)
工 芸	214 (271)	33 (57)	7 ( 8 )	0 ( 2 )	40 (67)	19% (24%)
書	284 (451)	47 (79)	9 ( 8 )	0 ( 2 )	56 (89)	20% (19%)
写 真	133 (97)	21 (17)	4 ( 5 )	1 ( 3 )	26 (25)	20% (25%)
デザイン	50 (41)	9 (10)	3 ( 3 )	0 ( 2 )	12 (15)	24% (36%)
計	1,104 (1,255)	172 (231)	40 (38)	4 (14)	216 (283)	20% (22%)

( )は55年度



第36回山口県美術展覧会

会期 1982(昭57)年9月18日～10月3日  
会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ、常設展示室Ⅱ

○運営委員

美術作家

中村 脩 (日本画) 友近琢男 (洋画)  
田中米吉 (彫塑) 吉賀大眉 (工芸)  
田中江舟 (書) 三堀英夫 (写真)  
服部碩夫 (デザイン)

学識経験者

杉本春生 田口克己 杉尾 守

県教育委員会

小林末次 (文化課長)

○審査員

日本画・洋画 中原佑介 富永恒光  
秋山 泉  
彫 塑 中原佑介 乾 由明  
工 芸 乾 由明 鈴木健二

書 甫田鶏川 坪井正庵  
写 真 林 忠彦  
デザイン 佐口七朗

○受賞者

〈最優秀賞〉

MONTE (山) 濱野邦昭 (彫塑) 灰被陶宮 新庄貞嗣 (工芸)

〈優秀賞〉

生存 木島裕司 (日本画) 鬼萩焰箔四方大皿 大和保男 (工芸)  
その後のMちゃん 濱田純人 (洋画) 九月三日泛舟湖中作 小倉菊太郎 (書)  
パイプライン→解→パイプラインⅠ 群れ 川崎貞士 (写真)  
中本成紀 (彫塑)

〈奨励賞〉

長閑 (のどか) 古沢京子 (日本画) 阿蘇山の 守友郁子 (書)  
新しき夜 堀 晃 (洋画) 生きる 梅田正一 (写真)  
那津子 湯野比呂子 (彫塑) イラストレーション お・ん・な  
窯変方壺 大野孝晴 (工芸) 永田好人 (デザイン)

〈佳作賞〉

春野 三上研治 (日本画) 窯変壺 岡田 裕 (工芸)  
観音様の日 笠井順子 (日本画) 緋色線文皿 田原謙次 (工芸)

帰途 山県モモエ (日本画) 雲 下畑典子 (書)  
風の中ゆくB 堀 研 (洋画) 秋のうた 有由知子 (書)  
蟬時雨の頃 下瀬亜矢子 (洋画) 書品論 井上功一 (書)  
Work 82-い 小林功於 (洋画) 白楽天詩 真鍋めぐみ (書)  
作品1 佐森芳夫 (洋画) 梅花 元谷京子 (書)  
作品② 殿敷 侃 (洋画) 題瑤公山地 阿川彰徳 (書)  
太陽頌讚 国田敦子 (洋画) 闘志 河田 貢 (写真)  
美容室 伊藤貞子 (洋画) 湖畔 山根義章 (写真)  
久美 山近宏子 (彫塑) 初秋草原 川本 浩 (写真)  
鉄絵葛文壺 大井美智子 (工芸) PM3:00 石丸康生・真弓 (デザイン)  
異空間への階段 伊藤昌子 (工芸) 青い恋人 加藤 昇 (デザイン)

○実 績

部 門	出 品	入 選	入 賞	無 審 査	展示合計	展 示 率
日 本 画	78 (93)	13 (13)	5 (5)	— (2)	18 (20)	23% (22%)
洋 画	272 (312)	47 (47)	9 (9)	— (1)	56 (57)	21% (18%)
彫 塑	20 (18)	1 (2)	4 (3)	— (0)	5 (5)	25% (28%)
工 芸	182 (214)	30 (33)	7 (7)	— (0)	37 (40)	20% (19%)
書	225 (284)	38 (47)	8 (9)	— (0)	46 (56)	20% (20%)
写 真	113 (133)	18 (21)	5 (4)	— (1)	23 (26)	20% (20%)
デ ザ イ ン	30 (50)	3 (9)	3 (3)	— (0)	6 (12)	20% (24%)
計	920 (1,104)	150 (172)	41 (40)	— (4)	191 (216)	21% (20%)

( )は56年度



## (2) 現代美術展

### 山口の現代美術 I

1981(昭56)年4月18日～5月10日

月曜日、4月29日休館・5月3日／5日開館

主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ



#### (1) 趣 旨

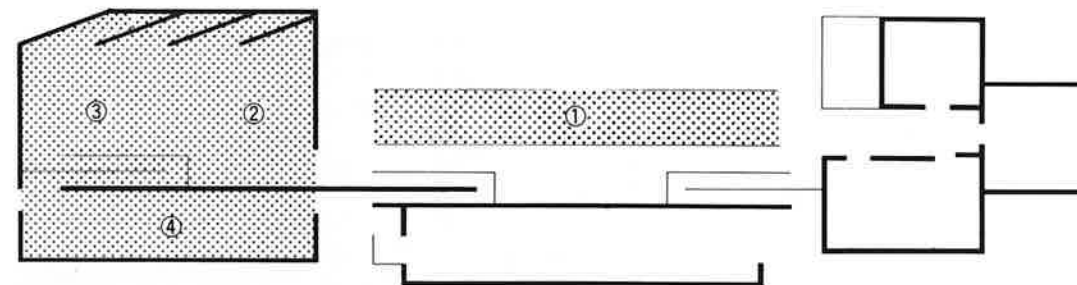
現代美術をアヴァンギャルドイズム（前衛主義）という視点からとらえれば、本県にどれほど先鋭的な作家がいるかどうかは大いに疑問としなければならないだろうし、最も難解とされる現代美術の先端部分だけをとりえてみても、日頃そうした動向になじみのない県下の状況では、一層現代美術に親しみや理解を促すのは困難でさえある。とはいえ、今私たちが生活する時代＝現代は、過去未来においてかけがえのない時間であり、あらゆる意味で必然的に時代に則した問題を抱えているのは事実であろう。そこで、多様な表現が試みられている同時代としての現代性という大まかな理解から、難解といわれる現代美術に一步でも近づいてみよう——そして、知識として美術に対するのではなく、わずかでもそこからえられた感覚や理解を自らの日常にフィードバックさせることはできないか——こうした問題を提起するのが本展の趣旨である。

単に表現様式レベルでの新しさをねらうだけでは、その奥に潜む歴史的な問題はみえてこないであろうことは勿論であるが、そのような問題を端的に提示するということは不可能に近い。むしろ、さまざまな人々がそれぞれの方法においてどんなことをしているのか、そうした多様性に直に触れ、考え、問いを発する私たち個々の役割こそ重要である。というのも、現代美術では、観る側の人々の立場が作品そのものの意味に深くかかわるようになってきているからである。ある平面や物体に作品の意味がとじこめられているのであれば、例えば古い宗教画を読み解くように、それぞれの表現要素の使われ方という鍵をひとつひとつ拾っていき、最後に総合的な作品の意味に到達することができるかもしれない。これに対して表現されているものが見えるものそのものだけといえるような作品、あるいは

部分の持つ意味が他の何かによって限定されるのではなく、見えるものの範囲内で意味を担っているというような作品では、部分の役割も全体の意味も作家が決定するにしろ、それだけでは一般的なものとなりえない。ここに観る側の主体性がからんでくるのは当然である。

このような問題をふまえながら、県ゆかりの作家たちが今何をしようとしているのかを考えてみることは、彼らの仕事を完成されたものとして受けとるのではなく、彼らとともに現代の意味を問い、新たな価値創造に私たちも参画していくということになるのではないだろうか。

#### (2) 会場構成



①澄川喜一 ②三輪龍作、堀晃、藤崎恒頼 ③田辺武、服部碩夫、田中稔之 ④殿敷侃、濱野邦昭、吉村芳生

#### (3) カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

ごあいさつ

モノクロ図版 作家略歴 作家のことは

出品目録



●大スキラ版44ページ ●アート紙90kg

#### (4) 出品作品

作 者	作 品	制作年	寸 法
澄 川 喜 一	そりとそぎのあるかたち	1980	H140×W308×D 34
	そりとそぎのあるかたち B	1979	H 80×W252×D 35
	そりのあるかたち	1980	H 56×W200×D 35
	そりとこぐち	1981	H 66×W 31×D 13
	おおぎ	〃	H 44×W 65×D 12
	MUSHI (むし)	〃	H 42×W 27×D 13

作 者	作 品	制作年	寸 法
田 中 稔 之	円の光景 (西チベットの夜)	1979	182×259
	円の光景 (シルクロード)	1981	197×291
	円の光景 (タクラマカン砂漠の陽)	1981	194×259
	円の光景	1981	227×162
田 辺 武	MESSAGE FROM ICHINOSAKA RIVER POINT A~F	1981	H 50×W205×D205他
	ポスター 1~20	1981	各103×72.8
	作 品 80-105	1980	181.8×227.3
殿 敷 侃 服 部 碩 夫	作 品 81-115	1981	〃
	作 品 81-116	1981	〃
	作 品 81-117	1981	〃
	BACK AND CROSS(1)~(3)	1980	各180×135.2
濱 野 邦 昭	WIND OF GRAY	1980	H 40×W 84×D 70
	青い麦	1981	H 82×W 34×D 27
	WAVERING HEAD	1979	H 46×W 30×D 30
	黙	1981	H 38×W 16×D 12
	青空に想う	1981	H 52×W 12×D 14
	漠	1981	H 31×W 9×D 8
	漁 夫	1979	181.8×227.3
	友	1980	〃
堀 晃	友の昇天	1980	227.3×181.8
	海と私と祖先	1981	181.8×227.3
	とべるかな	1980	162×112
	哀しい奏者	〃	194×130.3
	お別れ	〃	〃
	唱えや踊れ	1981	162×112
	呼びかける	〃	162×130.3
	あやとりに疲れた人	〃	〃
三 輪 龍 作	古代の人	1979	各H100×W470×D270
	M氏夫妻	1980	各H 48×W 60×D 70
	LOVE	1980	H 23×W720×D135
	女 帝	1980	H 30×W185×D230
吉 村 芳 生	ドローイング写真(風景シリーズ)		
	A STREET SCENE No. 8	1978	140×227
	河 原 No. 1~3	〃	各110× 80
	河 原 No. 6	〃	112×371
	A STREET SCENE		
	〃 No. 5 (リトグラフ)	〃	94.5× 83.5
	〃 No. 3 (シルクスクリーン)	〃	〃
	〃 No. 6 (マジック)	〃	〃
	〃 No.10(銅板)	〃	84×60
	ドローイング写真(友達シリーズ) No. 1~115	1981	各6.8×10.3

## (5) 展評など

新聞 (報道記事をのぞく)

展評

山口の現代美術Ⅰ 朝日新聞(西部) / (源) 56・4・25

「山口の現代美術Ⅰ」をみて 中国新聞 / (寺本) 56・4・29





## 現代の陶芸 I

—いま、土と火でなにが可能か—

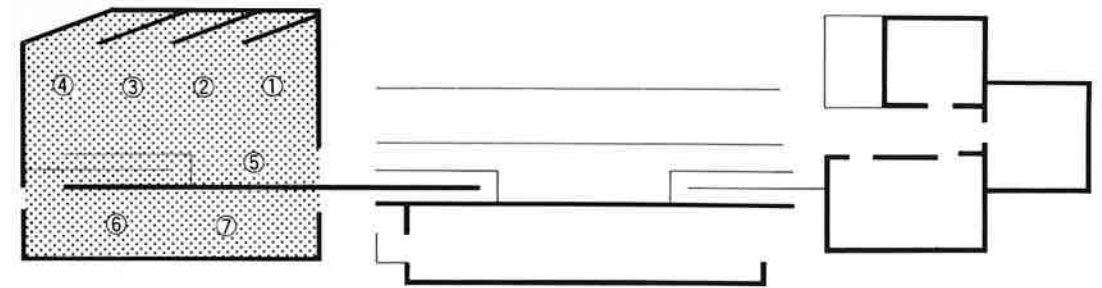
1982(昭57)年4月17日～5月9日



月曜日、4月29日休館  
5月3日/5日開館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
主催＝山口県立美術館



## (2) 会場構成・出品作品



①三島喜美代「無題」 ②鯉江良二「いま、土と火でなにが可能か」 ③伊藤公象「作品——魚形の仮説——」 ④星野暁「表層・深層シリーズ」 ⑤里中英人「予兆空間」 ⑥三輪龍作「HAGI CERAMICS」 ⑦荒木高子「聖書シリーズ」

## (3) カタログ

責任編集 榎本徹

内容

ごあいさつ

カラー図版

モノクローム図版・メッセージ

展覧会ノート—いま、土と火でなにが可能か— 榎本徹



●A 4版48ページ ●アート110kg／4色オフセット4ページ、1色オフセット28ページ ●上質紙90kg／1色オフセット16ページ

## (4) 展評など

新聞（報道記事をのぞく）

展評

「いま、土と火でなにが可能か」展をみて 表現の多様性探る 中国新聞／（寺本）57・4・23  
画期的な前衛陶芸展 山口県立美術館「いま、土と火でなにが可能か」 朝日新聞（西部）／（源）57・4・24  
現代の陶芸Ⅰ「いま、土と火でなにが可能か」展 あふれる生命力の刻印 読売新聞（大阪）／乾由明 57・4・24  
表現改革への必殺パンチ 〈現代の陶芸Ⅰ・いま、土と火でなにが可能か〉展 毎日新聞（西部）／（晴）57・5・1  
現代陶芸の課題 山口県立美術館の企画展から 信濃毎日新聞／伊藤公象 57・6・22

## (1) 趣旨

昭和55年度の「山口県現代美術選抜展」をうけて、まったく別の視点から昭和56年度に「山口の現代美術Ⅰ」を開催した。本展はこれと対になる展覧会として、交互に1年おきに開催するものとして企画された。しかし、ジャンルが限定される本展は、おのずと前者とはちがった視点とならざるを得ない。

シリーズとしての本展を通したねらいは、多様化している陶芸というジャンルがかかえる今日的問題を、多角的に問いかけてみようということである。問題意識から発生した問いをテーマにすえ、それを作家に問いかけることによって展覧会を構成しようとするもので、展覧会ごとにテーマも作家もちがうものとなろう。また立体造形としての陶芸というジャンルも、空間性をより強めており、公募展や個展では展示スペースを限られ、作家の主張を十分に表現できない場合がでてくる。そのような状況をも考慮し、展示スペースにも可能なかぎり配慮した展覧会というねらいもある。

第1回として設定したテーマは「いま、土と火でなにが可能か」というものである。第1回として、このシリーズを通したテーマともなるべき、基本的問いかけである。制作は荒木高子、伊藤公象、鯉江良二、里中英人、星野暁、三島喜美代、三輪龍作の各氏におねがいがした。名作家とも館の空間を充分にいかした作品を発表した。作品は土と火の根源的な在り方を問うものとなり、主な陶土をつかうものをはじめとして、会場で完成するものが多く、コンセプチュアルなイベントの様相をしめした。



(3) 美術講演会および講座

美術講演会

日 時 1981(昭56)年11月15日 11時～12時  
場 所 講座室  
講 師 作家 加藤唐九郎  
演 題 作陶談議  
参集人員 390人

日 時 1982(昭57)年 7 月31日 13時～15時  
場 所 講座室  
講 師 美術評論家 中原 佑介  
演 題 私と戦後美術  
参集人員 100人

美術講座

(56年度)

区 分	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
年 月 日	56. 9. 19	56. 9. 27	56. 10. 4	57. 1. 23
講 師	作家(日本画) 中 村 脩	作家(写真) 三 堀 英 夫	作家(書) 田 中 江 舟	京都芸工大名誉教授 土 居 次 義
演 題	県美展出品作品について	〃	〃	円山応挙と祐常門主
参集人員	90人	70人	80人	90人

(57年度)

区 分	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
年 月 日	57. 9. 19	57. 9. 26	57. 10. 3	58. 1. 9	58. 1. 16
講 師	作家(彫刻) 田 中 米 吉	山口芸短教授 富 永 恒 光	梅光女学院教授 田 中 江 舟	作家 古 川 薫	大阪府立大助教授 中 江 彬
演 題	彫刻について	洋画について	書について	私の好きな絵	西洋美術雑感
参集人員	50人	80人	60人	80人	90人

実技講座

初級(56年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
陶 芸	大 和 保 男	5月～6月 毎週1回 3時間	30人
日 本 画	中 村 脩	7月～8月 〃 〃	30人
洋 画	田 口 克 己	9月～10月 〃 〃	30人

上級(56年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
洋 画	富 永 恒 光	7月17日～7月19日	20人
日 本 画	中 村 脩	7月22日～7月24日	20人

上級(57年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
洋 画	富 永 恒 光	7月20日～7月22日 7月23日～7月25日 9時30分～16時	各20人
版 画	吉 村 芳 生	8月2日～8月4日 8月21日～8月23日 〃	〃
日 本 画	中 村 脩	11月8日～11月10日 11月11日～11月13日 〃	〃



古萩展シンポジウム



洋画実技講座(上級)

#### (4) 美術館ニュース「天花（てんげ）」

館活動の状況報告、とくに企画展の案内を中心に、年4回、12ページの構成で発行している。  
1981・82（昭56・57）年度は8号から15号まで発行された。

##### 第8号（56・9・1発行）

館蔵品紹介「萩花文割倭鉢」 榎本徹  
古萩—その源流と周辺— 榎本徹  
美術エッセイ 初咲展 三輪龍作（陶芸家）  
山口画人伝(7) 中本達也 高田美規雄  
伝統の構造 デュッセルドルフ通信(1)  
—若い作家の声— 島田日出夫（画家）



##### 第9号（56・12・1発行）

館蔵品紹介「葡萄とりす図」 森寛斎 高田美規雄  
円山派と森寛斎—応挙から寛斎へ— 勝津吉生  
休和翁追想 河野良輔  
三輪休和 年譜 関連資料  
山口画人伝(8) 中野四郎 安井雄一郎  
伝統の構造 デュッセルドルフ通信(2)  
—若い作家の声— 島田日出夫（画家）  
美術エッセイ 中国の博物館周遊  
—その(一)京北— 勝津吉生



##### 第10号（57・2・1発行）

館蔵品紹介「山水図巻(山水小巻)」雪舟 山本英男  
地方美術館として(一) 河野良輔  
山口画人伝(9) 桑重儀一 高田美規雄  
美術エッセイ 中国の博物館周遊  
—その(二)南京・揚州・蘇州・上海— 勝津吉生



##### 第11号（57・4・1発行）

館蔵品紹介「予感」三輪龍作 山本英男  
現代の陶芸Ⅰ いま、土と火でなにが可能か 榎本徹  
地方美術館として(二) 河野良輔  
伝統の構造 デュッセルドルフ通信(3)  
—若い作家の声— 島田日出夫（画家）  
研究ノート 初期青花メモ(上) 榎本徹



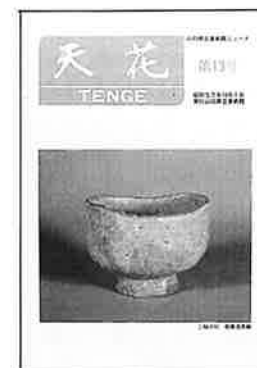
##### 第12号（57・7・1発行）

館蔵品紹介「人間の扉」 中本達也 高田美規雄  
中本達也と戦後美術の一断面 高田美規雄  
山口美術家伝(10) 松林桂月 勝津吉生  
伝統の構造 大内塗の変遷(1)  
内田伸（山口市歴史民俗資料館長）  
研究ノート 初期青花メモ(下) 榎本徹



##### 第13号（57・10・1発行）

館蔵品紹介「萩筆洗茶碗」三輪休和 奥田聡  
三輪休和展 榎本徹  
三輪休和追想 休和翁—如是我観  
満岡忠成（滴翠美術館顧問）  
伝統の構造 大内塗の変遷(2)  
内田伸（山口市歴史民俗資料館長）  
研究ノート 雲谷派画人メモ(一) 雲谷等的 山本英男



##### 第14号（58・1・1発行）

館蔵品紹介「牧牛図」雪舟 山本英男  
サンパウロ美術館展 ルネサンスからピカソまで 高田美規雄  
「開かれた美術館」とは一展示を考える 足立明男  
伝統の構造 大内塗の変遷(3)  
内田伸（山口市歴史民俗資料館長）  
研究ノート 森寛斎補考一・二  
—初期の寛斎について— 勝津吉生



##### 第15号（58・3・31発行）

館蔵品紹介「証言」鯉江良二 榎本徹  
山口の現代美術Ⅱ 高田美規雄  
美術エッセイ 山東省文化の現況 足立明男  
伝統の構造 ヨーロッパで考えたこと(1)  
—カッセルと市民意識と社会性— 殿敷侃（美術家）  
研究ノート 高橋由一  
—『鮭』以後の変貌について— 濱本聡  
美術館この一年 1982・4—1983・3



(5) 移動美術館

昭和56年度「安井賞受賞作家展」

1981(昭56)年5月17日～5月24日 下関市民会館  
5月27日～6月2日 岩国市民会館

(1) 趣 旨

安井賞は肖像をはじめ静物、風景など安井様式とよばれる独自の画風を確立して近代日本洋画の代表的画家のひとりである安井曾太郎を記念して制定された。具象的新人の登龍門として毎年ひとりずつ選ばれている。本県ゆかりの作家も、中本達也(第3回)、宮崎進(第10回)、山本文彦(第14回)の3氏が受賞している。本展では当館所蔵の3氏の作品を展示することによって、現代の具象絵画の一つの傾向を見ようとするものである。

(2) カタログ

大スキラ版16ページ(表紙とも)ノフセット4色3ページ・1色9ページ・2色表1

(3) 出品作品

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸法(cm)	制作年
1	洪水	中 本 達 也	油彩	120.5× 68.0	1956
2	憩える海人	〃	〃	106.5×117.5	1957
3	渇き	〃	〃	114.0× 55.0	1958
4	魚人	〃	〃	105.1×131.0	1958
5	黒潮	〃	カゼインカラー・紙	41.0× 69.0	1959
6	森の声	〃	油彩・キャンバス	104.5×141.0	1960
7	海の扉	〃	油彩	111.0×193.0	1961
8	岩の蛾	〃	〃	53.2× 45.6	1961
9	人間の扉	〃	〃	179.3×140.7	1967
10	人	〃	〃	32.4× 28.7	1967
11	西方の女	〃	水彩	75.5× 56.1	1968
12	祭壇	〃	油彩・キャンバス	145.0× 97.0	1967
13	古代ローマの二人	〃	ペン画	78.0× 54.0	1964
14	人びと	〃	水彩	72.5× 51.7	1965
15	三島由起夫「豊饒の海」カット	〃	水墨	14.0× 23.0	1968
16	開高健「パニック・裸の王様」カバー装画	〃	紙に油彩	18.6× 38.6	1971
17	スタインバック「怒の葡萄」カバー装画	〃	〃	26.0× 19.0	
18	とり	〃	手彩色・銅板・紙	11.3× 10.0	1957
19	さかな	〃	銅板・紙	8.9× 13.8	1959
20	少女	〃	〃	13.9× 8.9	1960
21	潮	〃	〃	6.7× 17.8	1960
22	壁の人	〃	〃	9.0× 8.7	1962
23	海	〃	〃	8.9× 13.9	1962
24	残された壁(女と男C)	〃	油彩・紙・板	166.6×181.9	1967
25	人間の邑	〃	リトグラフ	19.0×182.0×2	1968
26	人間の声4	〃	グワッシュ・紙	119.2× 67.9	1972

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸法(cm)	制作年
27	旅芸人	宮 崎 進	油彩・キャンバス	41.0× 53.1	
28	小屋	〃	〃	60.6× 90.8	
29	夜	〃	〃	45.4× 53.0	1976
30	昼	〃	〃	145.3× 97.0	1976
31	黄色い壁	〃	〃	130.2×162.1	1976
32	ランドスケープ	〃	〃	91.0× 72.7	1976
33	デッサン(5点)	〃			
34	オートバイ	山 本 文 彦	油彩・キャンバス	162.3×227.8	1971
35	踏切	〃	〃	P50号	1971
36	木精の地(1)	〃	〃	163.0×163.0	1979
37	星の園にて	〃	〃	161.8×162.1	1977
38	ねむり	〃	石版・紙	52.0× 37.0	1976
39	てんとうむし	〃	〃	52.1× 37.1	1976
40	ゆふぐれ	〃	〃	52.0× 37.0	1976
41	ずきん	〃	〃	51.2× 37.4	1976
42	みず	〃	〃	52.0× 36.5	1976
43	かべ	〃	〃	50.8× 36.0	1976
44	いす	〃	〃	52.2× 37.0	1976
45	くんしょう	〃	〃	52.2× 37.1	1976

昭和57年度「山口県の洋画家—その画風の移り変わり—」

1982(昭57)年7月15日～7月19日 むつみ村農民研修所  
10月30日～11月3日 久賀町民センター

(1) 趣 旨

山口県立美術館では、開館以来、県ゆかりの作家の作品を調査し、その収集にも力をいれてきた。今回は、その内から洋画家11人を取りあげ、その作風の変遷を見ようとするものである。

(2) カタログ

大スキラ版16ページ(表紙とも)ノフセット4色1ページ・1色11ページ・2色表1

(3) 出品作品

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸法(cm)	制作年
1	少女像	永 井 秀 太	油彩・キャンバス	47.2× 35.0	
2	しほ 絞り	〃	〃	91.0× 65.0	1931
3	風景	〃	〃	41.3× 32.0	
4	婦人像	〃	〃	53.4× 45.8	
5	裸婦	桑 重 儀 一	〃	78.5× 53.2	1913
6	おどけ役者	〃	〃	91.0× 72.8	1933
7	上高地	小 林 和 作	〃	48.5× 71.5	1925
8	エクス風景	〃	〃	60.2× 72.5	1929
9	山湖の秋	〃	〃	60.6× 72.7	

番号	作 品	作 者	技法・材質	寸法(cm)	制作年
10	佐渡の海	小 林 和 作	油彩・キャンバス	60.6× 72.7	
11	風景	香 月 泰 男	〃	61.0× 72.8	1936
12	雨〈牛〉	〃	〃	72.9×116.1	1948
13	穴掘人	〃	〃	72.8×116.7	1960
14	白い椅子の枯れた花	尾 崎 正 章	〃	100.0× 65.2	1954
15	薄雪	〃	〃	162.5× 60.6	1977
16	帰り道	桂 ゆ き	〃	54.7× 91.0	1934
17	アダムとイヴ	〃	〃	130.3× 97.0	1968
18	作品	〃	コラージュ・板	116.5×182.2	1979
19	高津風景	松 田 正 平	油彩・キャンバス	64.9× 90.8	1933
20	高萩風景	〃	〃	91.8× 66.4	1959
21	明王	〃	〃	116.4× 72.8	
22	洪水	中 本 達 也	〃	120.5× 68.0	1956
23	森の声	〃	〃	104.5×141.0	1960
24	残された壁〈女と男C〉	〃	〃	166.6×181.9	1967
25	人間の声 4	〃	グワッシュ・紙	119.2× 67.9	1972
26	小屋	宮 崎 進	油彩・キャンバス	60.6× 90.8	
27	夜	〃	〃	45.4× 53.0	1976
28	ランドスケープ	〃	〃	91.0× 72.7	1976
29	動	田 中 稔 之	〃	183.8×251.0	1958
30	円の響応	〃	〃	182.1×227.2	1976
31	踏切	山 本 文 彦	〃	181.8×227.3	1971
32	星の園にて	〃	〃	161.8×162.1	1977
33	ねむり	〃	石版・紙	52.0× 37.0	1976
34	てんとうむし	〃	〃	52.1× 37.1	1976
35	ずきん	〃	〃	51.2× 37.4	1976
36	いす	〃	〃	52.2× 37.0	1976

### Ⅲ. 入館者数一覧



久賀町（57年度）

展覧会名	開催期間	個人							団体							計			合計	累計
		大人		高大		小中		小計	大人		高大		小中		小計	有料	無料	招待		
		料金	人数	料金	人数	料金	人数		料金	人数										
常設展	56. 4. 1 ～57.3. 31(304)	100	24,027	70	1,672	50	2,896	28,595	80	1,847	50	348	30	2,655	4,850	33,445	418	0	33,863	33,863
山口の現代美術Ⅰ	56. 4. 18 ～ 5. 10( 20)	200	2,807	150	326	100	520	3,653	170	128	120	111	50	109	348	4,001	128	673	4,802	38,665
第35回県美展	56. 9. 19 ～ 10. 4( 13)	200	6,820	150	477	100	592	7,889	170	275	120	405	50	84	764	8,653	174	999	9,826	48,491
古萩展	56. 10. 17 ～ 11. 29( 39)	600	18,357	400	455	300	743	19,555	500	1,675	300	160	200	263	2,098	21,653	132	3,347	25,132	73,623
円山派と森寛斎展	57. 1. 8 ～ 2. 11( 30)	600	9,187	400	404	300	644	10,235	500	301	300	130	200	320	751	10,986	93	1,691	12,770	86,393
インドネシア古代美術展	56. 4. 1 ～ 4. 12( 11)	700	3,846	500	635	300	1,098	5,579	500	78	300	0	200	0	78	5,657	23	3,182	8,862	95,255
日本現代工芸美術展	56. 5. 16 ～ 5. 31( 14)	500	3,584	300	298	200	291	4,173	400	634	200	258	100	0	892	5,065	190	2,511	7,766	103,021
伝統工芸新作展	56. 6. 4 ～ 6. 14( 10)	300	1,774	200	45	100	131	1,950	200	178	100	0	50	0	178	2,128	192	818	3,138	106,159
ピカソ陶芸展	56. 6. 27 ～ 8. 9( 38)	700	13,862	500	1,590	300	5,787	21,239	500	852	300	64	200	545	1,461	22,700	172	3,950	26,822	132,981
山口県学校美術展	56. 12. 3 ～ 12. 6( 4)																4,447	0	4,447	137,428
イヴ・ブレイエル展	56. 12. 9 ～ 12. 24( 14)	700	2,707	500	565	300	497	3,769	600	187	400		200	97	284	4,053	0	1,755	5,808	143,236
モダンアート山口作家展	57. 2. 18 ～ 2. 21( 4)																740		740	143,976
山口大学卒業制作展	57. 2. 25 ～ 2. 28( 4)																		896	144,872
山口芸術短期大学卒業制作展	57. 3. 4 ～ 3. 7( 4)																		1,253	146,125
56年度計			86,971		6,467		13,199	106,637		5,719		1,476		4,073	11,704	118,341	8,858	18,926	146,125	
常設展	57. 4. 1 ～58.3. 31(300)	100	27,916	70	1,798	50	2,974	32,688	80	1,422	50	161	30	2,439	4,022	36,710	323	0	37,033	37,033
現代の陶芸Ⅰ	57. 4. 17 ～ 5. 9( 19)	600	1,638	400	161	300	133	1,932	500	138	300	0	200	152	290	2,222	141	373	2,736	39,769
ブラマンク展	57. 5. 15 ～ 6. 27( 38)	800	24,769	600	2,436	400	3,724	30,929	700	709	500	151	300	766	1,626	32,555	272	6,658	39,485	79,254
中本達也と戦後美術の一断面	57. 7. 24 ～ 8. 22( 26)	600	2,183	400	332	300	330	2,845	500	48	300	0	200	0	48	2,893	61	806	3,760	83,014
第36回県美展	57. 9. 18 ～ 10. 3( 13)	250	6,317	200	293	150	553	7,163	200	610	150	224	100	861	1,695	8,858	52	1,146	10,056	93,070
三輪休和展	57. 10. 23 ～ 11. 28( 32)	600	7,309	400	184	300	291	7,784	500	674	300	49	200	37	760	8,544	149	1,758	10,451	103,521
山口行動展	57. 4. 3 ～ 4. 11( 8)	600	1,375	500	197	200	170	1,742	500	0	400	0	100	0	0	1,742	0	144	1,886	105,407
新美会その後展	57. 7. 10 ～ 7. 18( 8)																1,243		1,243	106,650
山口県高等学校芸術文化祭	57. 8. 27 ～ 8. 29( 3)																830		830	107,480
山口県学校美術展	57. 12. 2 ～ 12. 5( 4)																5,357		5,357	112,837
モダンアート展	57. 12. 11 ～ 12. 19( 8)																895		895	113,732
サンパウロ美術館展	58. 1. 5 ～ 1. 30( 24)	800	47,417	600	5,264	400	10,044	62,725	600	611	400	203	200	536	1,350	64,075	496	7,597	72,168	185,900
山口大学卒業制作展	58. 2. 24 ～ 2. 27( 4)																983		983	186,883
山口芸術短期大学卒業制作展	58. 3. 3 ～ 3. 6( 4)																1,398		1,398	188,281
57年度計			118,924		10,665		18,219	147,808		4,212		788		4,791	9,791	157,599	12,200	18,482	188,281	

収集資料

I. 館蔵品貸出利用状況..... 90

II. コレクション

    新収蔵品（昭和56～57年度）..... 92

III. 美術図書..... 104

# I. 館蔵品貸出利用状況(昭和56～57年度)

作 品	作 者	期 間	貸 出 先	展覧会名等	備 考
雪	香月 泰男	56.5.7～56.7.12	神奈川県立 近代美術館	日本近代洋画の 展開展	
復員〈タラップ〉	〃	〃	〃	〃	
朝 陽	〃	〃	〃	〃	
左 官	香月 泰男	56.8.28～56.11.18	東京都美術館	現代美術の動向Ⅰ 1950年代—その暗 黒と光芒展	
人 と 箱	〃	〃	〃	〃	寄託品
移動美術館作品 45点		56.10.14～56.10.21	光市教育委員会	安井賞作家展	本館企画の「移動 美術館」作品一括
花 I	三輪 龍作	56.10.20～56.12.20	佐賀県立 九州陶磁文化館	世界の現代陶芸展	
萩編笠水指	三輪 休和	56.11.9～56.12.20	〃	〃	
萩編笠水指	三輪 休和	57.1.15～57.4.3	サントリー美術館	現代陶芸 —伝統と前衛—展	
LOVE(ハイヒール)	三輪 龍作	〃	〃	〃	
萩筆洗切茶碗	三輪 休和	57.2.1～57.7.31	読売新聞社	現代の茶陶百俎展	
萩 茶 碗	三輪 休雪	〃	〃	〃	
萩井戸茶碗	吉賀 大眉	〃	〃	〃	
移動美術館作品 45点		57.3.19～57.4.2	宇部市教育委員会	安井賞作家展	本館企画の「移動 美術館」作品一括
芥 川 図	森 寛斎	57.4.19～57.6.7	京都府立 総合資料館	近代京都画壇の巨匠 森寛斎と山元春挙展	
松林瀑布山水図	〃	〃	〃	〃	
葡萄とりす図	〃	〃	〃	〃	
森 徹 山 像	〃	〃	〃	〃	
写 生 図 巻	〃	〃	〃	〃	
森 寛 斎 像	森 雄山	〃	〃	〃	
フェノロサ名刺		〃	〃	〃	
印 章		〃	〃	〃	

作 品	作 者	期 間	貸 出 先	展覧会名簿	備 考
森寛斎文書目録		57.4.19～57.6.7	京都府立 総合資料館	近代京都画壇の巨匠 森寛斎と山本春挙展	
海	小林 和作	57.8.15～57.9.30	島根県立博物館	「山陰を描いた美 術と文学」展	
水彩画22点	〃	〃	〃	〃	
〈私の〉地球	香月 泰男	〃	〃	〃	
復員〈タラップ〉	香月 泰男	57.10.20～57.11.30	三重県立美術館	「日本近代の洋画 家たち」展	
運 ぶ 人	〃	〃	〃	〃	
冬〈ペーチカ〉海	香月 泰男	57.11.4～57.12.12	広島県立美術館	日本の洋画展 —戦後30年の展望—	
北 へ 西 へ	〃	〃	〃	〃	
欲張り婆さん	桂 ゆき	〃	〃	〃	
アダムとイヴ	〃	〃	〃	〃	
絞 り	永地 秀太	57.11.2～57.11.24	銀座松屋 読売新聞社	「回顧・文展」展	
移動美術館作品 36点		58.1.24～58.1.31	美祢市 歴史民俗資料館		本館企画の「移動 美術館」作品一括 (寄託作品2点をふく む)
萩筆洗切茶碗	三輪 休和	58.2.13～58.4.15	香雪美術館 朝日新聞社	三輪休和展	
萩 沓 茶 碗	〃	〃	〃	〃	

## Ⅱ. コレクション—新収蔵品（昭和56年度～57年度）

### ※凡例

以下の目録は1981(昭56)年4月から1983(昭58)年3月までに収蔵された館蔵品をすべて網羅したものである。作品の整理方針および個々のデーターの記録法は「山口県立美術館蔵品目録1979」に準じている。すなわち、作品は日本画(J)・洋画(O)・水彩画(W)・版画(P)・工芸(C)・資料(M)の順で編集され、また個々のデーターについては整理番号・作者・生没年・タイトル・制作年・素材技法・寸法(cm)・サイン等の位置・収蔵年とその経緯の順で記録されている。整理番号は54・55年度年報につづく通し番号とした。

## 日本画 (Japanese-style paintings)



J-72  
小田海儒 ODA, Kaisen  
1785~1862  
飲中八仙図 Eight Heavy Drinkers in Tang Dynasty  
1844  
絹本墨画・軸 86.5×152.0  
上部に賛・印3、左下に印  
昭和56年度 購入



J-73  
小野具定 ONO, Gutei  
1914~  
海と霧 Sea and Mist  
1979  
板・彩色 274.8×201.2  
昭和57年度 購入



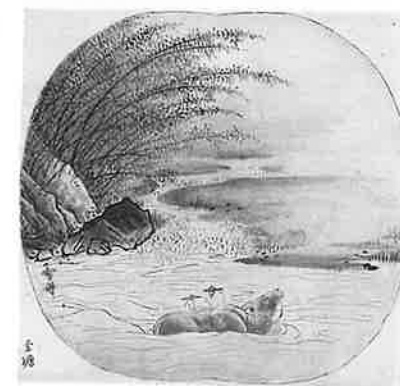
J-74  
狩野松栄 KANŌ, Shōei  
1519~1592  
花鳥図屏風 Flowers and Birds in Four Seasons  
紙本彩色・六曲屏風一双 各144.3×351.4  
箱（墨書：狩野古永徳筆とあり）  
昭和57年度 購入



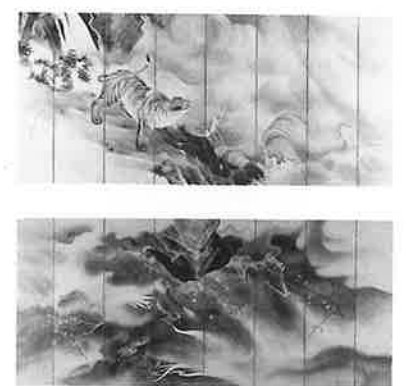
J-75  
狩野芳崖 KANŌ, Hōgai  
1828~1888  
呂洞賓鉄拐図 Lü Tung-pin T'ieh-kwai  
紙本墨画淡彩・軸 137.1×62.7  
右上に落款「芳崖」、朱文円印「貫甫」  
昭和57年度 購入



J-76  
雪舟 SESSYŪ  
1420~1506  
牧牛図(牧童) Herdsboy and Water Buffaloes  
紙本彩色・軸 30.2×31.4  
右下に落款「雪舟」  
昭和56年度 購入



J-77  
雪舟 SESSYŪ  
1420~1506  
牧牛図(渡河) Herdsmen and Water Buffalo  
紙本彩色・軸 30.0×30.5  
左下に落款「雪舟」  
昭和56年度 購入

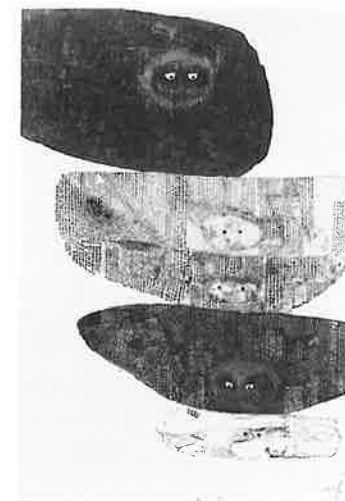


J-78  
森 寛斎 MORI, Kansai  
1814~1894  
龍虎図屏風 Dragon and Tiger  
1848  
紙本彩色・八曲屏風一双 各171.0×370.0  
昭和56年度 購入

## 油彩画 (Oil paintings)



O-127  
香月泰男 KAZUKI, Yasuo  
1911~1974  
風景 Landscape  
1936  
油彩・キャンパス 61.0×72.8  
キャンパス裏に墨書「昭和十一年八月・中旬／香月泰男」  
昭和56年度 寄贈



O-128  
桂 ゆき KATSURA, Yuki  
1913~  
つぶされた I was crushed  
1973  
油彩・紙・板 131.0×90.0  
右下にサイン KATSURA  
昭和56年度 購入



O-129  
高橋由一 TAKAHASHI, Yuichi  
1828~1894  
鴨図 Wild Duck  
1877  
油彩・キャンパス 45.7×66.8  
昭和56年度 購入





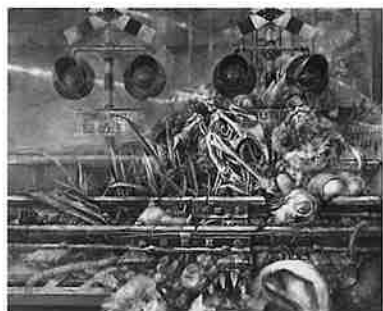
O-130  
中本達也 NAKAMOTO, Tatsuya  
1922~1973  
残された壁(人間断片 A) Surviving  
Walls "Man- Fragment A"  
1967  
混合技法 コラージュ・キャンバス  
113.0×89.3  
右下にサイン Tat N 1967  
昭和57年度 購入



O-131  
中本達也 NAKAMOTO, Tatsuya  
1922~1973  
罟 Snare  
1960  
油彩・キャンバス 104.0×59.0  
左下にサイン Tat N  
昭和57年度 購入



O-132  
長谷川三郎 HASEGAWA, Saburō  
1906~1957  
星空の富士 Mt. Fuji against a Starry  
Sky  
1934  
油彩・キャンバス 130.0×162.2  
左下にサイン Sabro  
昭和57年度 購入



O-133  
山本文彦 YAMAMOTO, Fumihiko  
1937~  
踏切 Railroad Crossing  
1971  
油彩・キャンバス 181.8×227.3  
右下にサイン '71F.ya  
昭和56年度 購入

## 素描(Drawings)



D-10  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
ふたつのコンポジション Two  
Compositions  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-11  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
裸 Nude  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-12  
宮崎 進 MIYASAKI, Susumu  
1922~  
顔 Face  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-13  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
こしかける Sitting  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-14  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
よりかかる女 Leaning Woman  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-15  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
ひざまづく裸婦 Kneeling Nude Woman  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-16  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
ふたつの裸 Two Nude Women  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-17  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
男と女のコンポジション Composition of  
Man and Woman  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-18  
宮崎 進 MIYAZAKI, Susumu  
1922~  
立つ女 Standing Woman  
鉛筆・紙 62.8×49.0  
昭和56年度 購入



D-19  
吉村芳生 YOSHIMURA, Yoshio  
1950~  
A STREET SCENE NO.8  
1978  
紙・コンテ・額 140.0×227.0  
昭和57年度 購入



D-20  
吉村芳生 YOSHIMURA, Yoshio  
1950~  
A STREET SCENE NO.13  
1978  
紙・インク・額 162.3×112.0  
昭和57年度 購入



D-21  
吉村芳生 YOSHIMURA, Yoshio  
1950~  
A STREET SCENE NO.7  
1978  
紙・コンテ・額 140×227  
162.3×112.0  
昭和57年度 購入

## 版画(Prints)



P-51  
殿敷 侃 TONOSHIKI, Tadashi  
1942~  
作品1 Work 1  
1981  
新聞紙・シルクスクリーン・額 160.0×95.0  
昭和57年度 購入



P-52  
殿敷 侃 TONOSHIKI, Tadashi  
1942~  
作品2 Work 2  
1981  
新聞紙・シルクスクリーン・額 160.0×95.0  
昭和57年度 購入



P-53  
殿敷 侃 TONOSHIKI, Tadashi  
1942~  
作品3 Work 3  
1981  
新聞紙・シルクスクリーン・額 160.0×95.0  
昭和57年度 購入

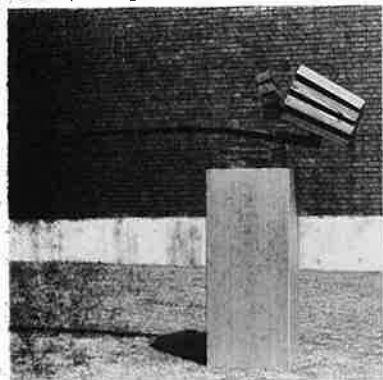


P-54  
殿敷 侃 TONOSHIKI, Tadashi  
1942~  
作品4 Work 4  
1981  
新聞紙・シルクスクリーン・額 160.0×95.0  
昭和57年度 購入



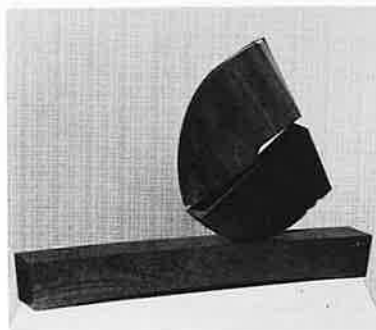
P-55  
殿敷 侃 TONOSHIKI, Tadashi  
1942~  
作品5 Work 5  
1981  
新聞紙・シルクスクリーン・額 160.0×95.0  
昭和57年度 購入

## 彫刻(Sculptures)



S-46

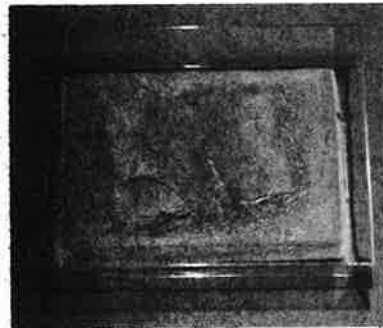
澄川喜一 SUMIKAWA, Kiichi  
1931～  
そりのあるかたち Curved Shape  
1980  
木(ケヤキ) 35×200×56  
昭和56年度 購入



S-47

澄川喜一 SUMIKAWA, Kiichi  
1931～  
おうぎ Fan  
1981  
木(ケヤキ) 12×65×44  
昭和56年度購入

## 工芸(Crafts)



C-51

荒木高子 ARAKI, Takako  
1921～  
砂の聖書 Bible of the Sand  
1980  
陶 61.5×44.0×11.8  
昭和57年度 購入



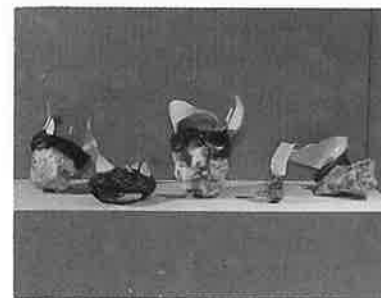
C-52

伊藤公象 ITÔ, Kōshō  
1932  
起土ー魚形の仮説ー Raised Earth  
ーImage of Fish Form  
1982  
陶 244×395  
昭和57年度 寄贈



C-53

鯉江良二 KOIE, Ryōji  
1938～  
証言 Testimonies  
1973  
陶 51.9×52.0×24.4  
昭和57年度 購入



C-54

鯉江良二 KOIE, Ryōji  
1938～  
スパーク・スパーク・アーム Spark・  
Spark・Arm  
1982  
陶 5個1組  
昭和57年度 購入



C-55

坂高麗左衛門(11代) SAKA, Kōraizaemon  
1912～1981  
萩茶碗 Teabowl  
1979  
陶器 高さ7.4, 径15.0(高台径5.2)  
昭和56年度 購入



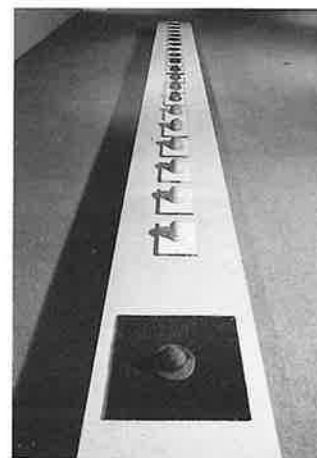
C-56

坂高麗左衛門(11代) SAKA, Kōraizaemon  
1912～1981  
萩茶碗 Teabowl  
1980  
陶器 高さ8.0, 径15.2(高台径5.2)  
昭和56年度 購入



C-57

坂高麗左衛門(11代) SAKA, Kōraizaemon  
1912～1981  
萩茶入 Teacaddy  
1980  
陶器 高さ8.1, 径3.3  
昭和56年度 購入



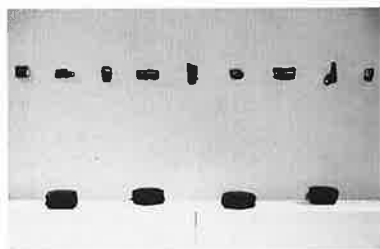
C-58

里中英人 SATONAKA, Hideto  
1932～  
赤ちゃんの帽子 Baby's Hat  
1973  
陶 20個1組  
昭和57年度 購入



C-59

星野 暁 HOSHINO, Satoru  
1945～  
表層・深層 Surface of Deep Strata  
1982  
陶 7個1組  
昭和57年度 購入

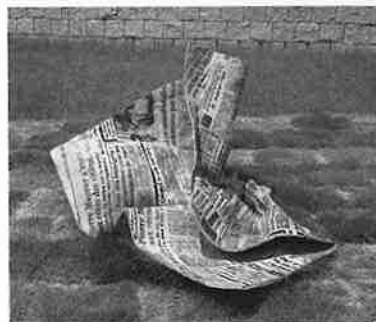


C-60

星野 暁 HOSHINO, Satoru  
1945~

Appearance・Substance  
1982

陶 13個 1組  
昭和57年度 購入



C-61

三島喜美代 MISHIMA, Kimiyo  
1932~

ニューズペーパー '82 Newspaper'82  
1982

陶 117.8×84.2×78.0  
昭和57年度 購入



C-62

三島喜美代 MISHIMA, Kimiyo  
1932~

コピー '82 Copy'82  
1982

陶 22個 1組  
昭和57年度 購入

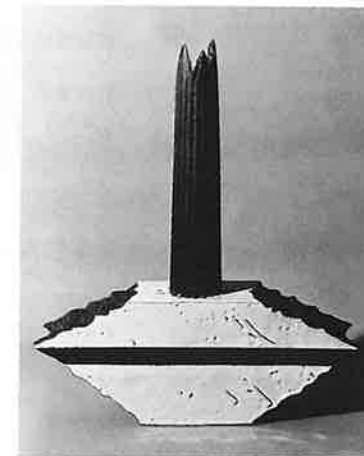


C-66

三輪龍作 MIWA, Ryōsaku  
1940~

LOVE (ハイヒール)  
1980

陶 57個 (1個 3ピース)  
台 23×720×135  
昭和56年度 購入



C-67

三輪龍作 MIWA, Ryōsaku  
1940~

花器 Flower-vase  
1982

陶 54.2×12.0×64.0  
昭和57年度 購入



C-68

不詳  
萩花文割俵形鉢 Bowl  
江戸時代前期  
陶器 高さ10.8, 径19.5 (底径8.1)  
昭和56年度 購入



C-63

三輪休雪(11代) MIWA, Kyūsetsu  
1910~

萩水指 Water Container  
1981

陶器 15.3×16.7×18.0  
昭和56年度 購入



C-64

三輪龍作 MIWA, Ryōsaku  
1940~

鉢「雷童」Bowl  
1981

陶器 26.0×21.0×7.0  
昭和56年度 購入



C-65

三輪龍作 MIWA, Ryōsaku  
1940~

流砂の人The Man from Silk Road  
1979

陶 112×32×25  
昭和57年度 購入



C-69

不詳  
萩檜垣文筆洗形割高台茶碗 Teabowl  
江戸時代前期

陶器 高さ8.3, 径15.4 (底径5.8)  
昭和56年度 購入



C-70

不詳  
上野割山椒向付 Bowl  
江戸時代前期

陶器 径11.7 (底径5.7)  
昭和56年度 購入



C-71

不詳  
萩茶碗 Teabowl  
江戸時代前期~中期

陶器 高さ8.7, 口径11.3  
昭和57年度 購入



C-72

不詳  
萩馬上杯形茶碗 Teabowl  
江戸時代前期～中期  
陶器 高さ10.4、口径12.3  
昭和57年度 購入

## 資料 (Reference materials)

R-12雲谷派資料 UNKOKU SCHOOL

雲谷等顔 UNKOKU, Tōgan  
1547～1618  
枯木にかわせみ図 Kingfisher on a Dead Tree  
紙本墨画・軸 53.4×28.8  
右中方に沢庵 賛、白文瓢印「雲谷」、白文方印「等顔」  
昭和57年度 購入

雲谷等益 UNKOKU, Tōeki  
1591～1644  
樓閣山水図 Landscape with Mansion  
紙本墨画淡彩・軸 122.0×52.2  
左下隅に白文瓢印「雲谷」、朱文方印「等益」  
昭和57年度 購入

雲谷等益 UNKOKU, Tōeki  
1591～1644  
達磨図 Bodhidharma  
紙本墨画・軸 87.2×28.3  
上に無著の賛、右中に白文瓢印「雲谷」、朱文方印「等益」  
昭和57年度 購入

長谷川等的 HASEGAWA, Tōteki  
三番叟図 Customary Prelude  
絹本彩色・軸  
右中央に落款「法橋信厚等の筆」、朱文方印「等的法橋」  
昭和57年度 購入

雲谷等的 UNKOKU, Tōteki  
～1664  
竹林雀図 Bamboos and Sparrow  
紙本墨画・軸 115.7×48.8  
左下隅に白文円印「雲谷」、朱文方印「等的」  
昭和57年度 購入

雲谷等的 UNKOKU, Tōteki  
～1664  
月梅図 Moon and Plum  
紙本墨画・軸 115.6×48.8  
右下隅に白文円印「雲谷」、朱文方印「等的」  
昭和57年度 購入

雲谷等作 UNKOKU, Tōsaku  
布袋図 Hotei (Pu-tai)  
紙本墨画・軸 85.3×44.5  
朱文瓢印「雲谷」、朱文法印「等作」  
昭和57年度 購入

雲谷等与 UNKOKU, Tōyo  
1612～1668  
布袋図 Hotei (Pu-tai)  
紙本墨画・軸 83.2×28.2  
上に賛 左下隅に落款「雪舟五世雲谷法眼等與筆」  
白文方印「等與」  
昭和57年度 購入

雲谷等爾 UNKOKU, Tōji  
1615～1671  
対月図 Monk Reading Sutra in Moonlight  
紙本墨画淡彩・軸 71.0×43.9  
右下隅に白文方印「等爾」  
昭和57年度 購入

雲谷等爾 UNKOKU, Tōji  
1615～1671  
雪景山水図 Snow Landscape  
紙本墨画・軸 111.0×48.8  
右下隅に落款「雲谷等爾筆」、朱文二重円印「雲谷法橋」、朱文方印「等爾」  
昭和57年度 購入

雲谷等哲 UNKOKU, Tōtetsu  
1631～1683  
破墨山水図 Landscape  
紙本墨画・軸 95.0×37.2  
右下に落款「雪舟末孫雲谷等哲墨」、朱文方印「雲谷」、白文方印「三玄」  
昭和57年度 購入

等巴 TŌHA  
寒山拾得図 Priests Han-shan and Shih-te  
紙本墨画・双幅 各101.5×40.5  
左幅左下隅に落款「古谷等巴筆」、朱文長方印「古谷」、朱文円印「等巴」  
昭和57年度 購入

等碩 TŌSEKI  
布袋唐子遊図 Hotei (Pu-tai) and Children  
紙本墨画淡彩・軸 41.8×78.7  
左下に白文方印「等碩」  
昭和57年度 購入

斎藤等順 SAITŌ, Tōjun  
～1626  
渡唐天神図 Tenjin God to China  
紙本彩色・軸 67.4×26.3  
左下隅に朱文二重方印「等順」  
昭和57年度 購入

雲沢等悦 UNTAKU, Tōetsu  
柳蔭野馬図 Wild Horse  
紙本墨画・軸 26.0×36.2  
右下に白文瓢印「雲沢」、朱文方印「等悦」  
昭和57年度 購入

狩野洞白 KANŌ, Tōhaku  
1772～1821  
虎溪三笑図(雪舟写し) The Laughers of Tiger Valley  
紙本墨画淡彩・軸 131.2×58.0  
右上に落款「膳雪舟狩野洞白愛信筆」、白文方印「狩野洞白」  
昭和57年度 寄贈

雲谷等微  
中国故事人物図屏風 Historical Figures in China  
江戸末期  
紙本彩色・二曲屏風一隻 155.5×171.4  
昭和57年度 寄贈

R-13  
不明  
傲芳崖 四季山水図 Landscape in Four Seasons  
六曲屏風一双 各165.0×350.0

R-14  
小田海傷 ODA, Kaisen  
1785～1862  
花卉図巻 Scroll of Flowers  
1841  
絹本彩色・画卷 31.9×344.3  
巻頭右下隅に白文方印、巻末に賛と3印  
昭和57年度 購入

R-15  
桑重儀一 KUWASHIGE, Giichi  
1883～1943  
トレド風景 Toledo  
1911  
油彩・キャンパス 37.8×45.7  
右下にサイン  
昭和56年度 購入

R-16  
三輪休和 MIWA, Kyūwa  
1895～1981  
萩井戸茶碗 Teabowl  
陶器 高さ9.4、口径15.1 (高台径5.8)  
二重箱  
昭和57年度 寄贈



分類	資 料 名	著・編 者	発 行	刊行年
704	美術講演会・講座記録集 第2集	兵庫県立近代美術館	同左	1982
	フランス中世美術の旅	黒江光彦	新潮社	1982
705	美術年鑑 昭和57年度版		美術年鑑社	1982
	コピー年鑑 1982	東京コピーライターズクラブ	誠文堂	
	日本美術年鑑 昭和55年版	東京国立文化財研究所美術部	同左	1982
706	藍画廊 1975—1980	藍画廊	同左	1981
	石川県美術館20年史	石川県美術館	同左	1980
	日展史	日展史編纂委員会	社団法人日展	
	6 帝展編一			1982
	7 帝展編二			1982
	8 帝展編三			1982
706.9	これからの美術館	長谷川栄	鹿島出版	1982
709	彫刻の町 宇部	宇部市公園緑地課	同左	1981
	彫刻とのふれあい——宇部	宇部市公園緑地課	同左	1981
	山口県文化財第11号	山口県文化財愛護協会	同左	1981
710	HANS ARP・DIE RELIEFS OEUVRE—KATALOG		Hatje	1981
	Barbara Hepworth	Hodin J.P.		
	Marino Marini	DuGriffon Neuchatel Suisse	Hatje	1961
	Oskar Schelemmer	Karin V.Maur		
	Henry Moore			
	1	David Sylvester		1944
	2			1955
	3	Alan Bowness		1965
	4	Alan Bowness		1977
711.9	古面	京都国立近代美術館	岩波書店	1982
720.67	ART AT AUCTION The year at Sotheby's 1981—82	Sotheby Publications	同左	1982
721	花鳥画の世界		学習研究社	
	第1巻 やまと絵の四季 平安・鎌倉の花鳥	真保享		1982
	第3巻 絢爛たる大画Ⅰ	武田恒夫、狩野博幸		1982
	第4巻 絢爛たる大画Ⅱ 桃山後期の花鳥	脇坂淳、田中敏雄		1982
	第6巻 京派の意匠 江戸中期の花鳥Ⅰ	佐々木丞平		1981
	第7巻 文雅の花・綺想の鳥 江戸中期の花鳥Ⅱ	辻惟雄		1983
	第8巻 幕末の百花譜 江戸末期の花鳥	河野元昭		1982
	第9巻 伝統と近代装飾 明治・大正・昭和の花鳥	小池賢博		1982
	西洋画の影響を受けたる日本画	黒田源次	中外出版	1924
	近世日本絵画の研究	土居次義	美術出版社	1970
721.1	雲道人—その人と芸術—	小林東五	春秋社	1981
721.3	畫聖雪舟	沼田頼輔	斎藤玉英堂	1912
	雪舟等揚論—その人間像と作品	蓮実重康	筑摩書房	1961
721.4	東山水墨画の研究	渡辺一	座右寶刊行会	1948

分類	資 料 名	著・編 者	発 行	刊行年
721.6	應挙名画譜 絵画円山派概説 大乘寺案内記 圓山円條畫鑑 寛斎畫譜	京都博物館 倉橋但斉 村山旬吾 森雄山	小林寫眞製作所出版部 大乘寺 国華社 芸艸堂	1936 1965 1911
	一 二 三			1906 1906 1910
	四			1910
721.7	日本南畫史	梅澤精一	東方書院	1923
721.8	近世風俗図譜 第一巻 年中行事 第五巻 四条河原 第六巻 遊里 第八巻 祭礼(1) 第九巻 祭礼(2)	山中裕、武田恒夫他 横井清、河野元昭他 西山松之助、狩野博幸他 赤井達郎、中島純司他 森谷尅久、佐々木丞平、立川洋他	小学館	1983 1982 1982 1982 1982
	肉筆浮世絵 第八巻 広重 第九巻 祐信・雪鼎 浮世絵の研究 上 中 下	山口佳三郎 赤井達郎 藤懸静也	集英社 藤原印刷所	1981 1982 1943
721.9	アーネスト・フランシスコ・フェノロサ フェノロサ 日本文化の宣揚に捧げた一生 上 下	久富貢 山口静一	中央公論美術出版 三省堂	1980 1982
722.2	支那絵画史	金原省吾	古今書院	1938
723	CLASSICI DELL' ARTE RIZZOLI 1 Michelangelo 2 Bosh 3 Ciotto 4 Raffaello 5 Botticelli 6 Caravaggio 7 Bruegel 8 Mantegna 9 Piero della Francesca 10 Antonello de Messina 11 Vermeer 12 Leonardo Pittore 13 Carpaccio 14 Edouard Manet 15 Hogarth Pittore 16 Giorgione	Salvatore Quaimodo Dino Buzzati Giancarlo Vigorelli Michele Prisco Renato Guttuso Giovanni Arpino Maria Bellonci Leonardo Sciacia Giuseppe Ungaretti Mario Pomilio Manlio Gancogni Marcello Venturi Gabriele Baldini Virgilio Lilli	Rizzoli Editore	1966 1966 1977 1966 1967 1967 1976 1967 1967 1967 1967 1967 1967 1968



分類	資	料	名	著・編 者	発 行	刊行年
723	17	Van Eyck		Raffaello Brignetti		1968
	18	Canaletto		Giuseppe Berto		1968
	19	Ingres		Emilio Radius		1968
	20	Veronese		Guido Piovene		1968
	21	Watteau		Giovanni Macchia		1968
	22	Picasso blu e vasa		Alberto Moravia		1968
	23	Dürer		Giorgio Zampa		1968
	24	Masaccio		Paolo Volponi		1968
	25	Ciambattista Tiepolo		Guido Piovene		1968
	26	Velázquez		Miguel Angel Asturias		1969
	27	Memling		Maria Corti		1969
	28	Giovanni Bellini		Renato Ghiotto		1969
	29	Rousseau il Doganiere		Giovanni Artieri		1969
	30	Perugino		Garlo Gastellaneta		1969
	31	Toulouse Lautrec		Giorgio Caproni		1977
	32	Tiziano		Corrado Cagli		1969
	33	Rembrandt Pittore		Giovanni Arpino		1969
	34	Boccioni		Aldo Palazzeschi		1969
	35	Il Greco		Gllana Manzini		1969
	36	Tintoretto		Carlo Bernari		1970
	37	Boldini		Carlo L.Ragghianti		1970
	38	L'Angelico		Elsa Morante		1970
	39	Cézanne		Alfonso Gatto		1970
	40	Modigliani		Leone Piccioni		1970
	41	Correggio		Alberto Bevilacqua		1970
	42	Fattori		Luciano Bianciardi		1970
	43	Simone Martini		Gianfranco Contini		1970
	44	Carrà		Piero Bigongiari		1970
	45	Degas		Franco Russoli		1970
	46	Paolo Uccello		Ennio Flaiano		1971
	47	Daumier Pittore		Luigi Barzini		1971
	48	Guido Reni		Gesare Garboli		1971
	49	Matisse		Mario Luzi		1971
	50	Holbein il Giovane		Roberto Salvini		1971
	51	Van Gogh-1		Paolo Lecaldano		1966
	52	Van Gogh-2		Paolo Lecaldano		1966
	53	Baraque		Marco Valsecchi		1971
	54	Hayez		Carlo Castellante		1971
	55	Seurat		Audré Chastel		1972
	56	Pisanello		Gian Alberto Dell'acqua		1972
	57	Delacroix		Luigina Rossi Bortolatto		1972
	58	Grünwald		Giovanni Testori		1972
	59	Renoir		Elda Fezzi		1972
	60	Duccio		Glulio Gattaneo		1972
	61	Gauguin		G.M.Sugana		1972
	62	Fragonard		Daniel Wildenstein		1972

分類	資	料	名	著・編 者	発 行	刊行年
723	63	Clande Monet		Luigina Rossi Bortolatto		1972
	64	Picasso cubista		Franco Russoli		1972
	65	Gerges de la Tour		Jacques Thuillier		1973
	66	Pontormo		Luciano Berti		1973
	67	Segantini		Francesco Arcangeli		1973
	68	Michelangelo scultore		Umberto Baldini		1973
	69	Zurbarán		Mina Gregori		1973
	70	Bronzino		Edi Baccheschi		1973
	71	Francesco Guardi		Luigina Rossi Bortolatto		1974
	72	Poussin		Jacques Thuillier		1974
	73	Cosme Tura		Rosemarie Molajoli		1974
	74	Goya		Rita De Angelis		1974
	75	Pietro Longhi		Terisio Pignatti		1974
	76	Frans Itals		Claus Grimm		1974
	77	Mondrian		Maria Grazia Ottolenghi		1974
	78	Bellotto		Ettore Camesaca		1974
	79	Lotto		Rodolfo Pallucchini		1974
	80	Crivelli		Anna Bovero		1974
	81	Cimabue		Enio Sindona		1975
	82	Salvator Rosa		Luigi Salerno		1975
	83	Claude Lorrain		Doretta Cecchi		1975
	84	Friedrich		Helmut Börsch-supan		1976
	85	Canva		Mario Praz		1976
	86	Gentile da Fabriano		Emma Micheletti		1976
	87	Annibale Grracci		Patrick J.Cooney		1976
	88	Piero di Cosimo		Mina Bacci		1976
	89	Sobastiano Ricci		Jeffery Daniels		1976
	90	Beccafumi		Giuliano Briganti		1977
	91	Füslì		Gert Schiff		1977
	92	Gericault		Jacques Thuillier		1978
	93	Murillo		Juau Antonio Gaya Nuño		1978
	94	Klimt		Johannes Dobai		1978
	95	Bramantino e Bramante pittore		G.A.Dell'Acqua		1978
	96	Liotard		Renée Loche e Marcel Roethlisberger		1978
	97	Ribera		Nicola Spinosa		
	98	Constable		Robert Hoozee		1979
	99	Sebastian del Piombo		Carlo Volpe		1980
	100	Boucher		Alexandre Ananoff		1980
	101	Parmigianino		Paolo Rossi		1980
	102	Van Dyck-1		Erik Larsen		1980
	103	Van Dyck-2		Erik Larsen		1980
	104	Cellini		C.Avery		1981
	105	Schiele		Gianfranco Malafarina		1982



分類	資 料 名	著・編 者	発 行	刊行年
723	106 Turner	Evelyn Joll e Martin Butlin		1982
	107 Turner			1982
723.06	視覚トリック VISUAL ILLUSION モンドリアン	福田繁雄 赤根和生	六耀社 美術出版社	1982 1971
723.1	中村貞夫画集第2巻 現代の裸婦美術 小林和作 水彩画の世界 香月泰男 芸術と人間像 日本水彩画名作全集8 名作選Ⅲ (昭和) くずれる沼 画家山下菊二の世界	中村貞夫 福田和彦 小林敏子 朝日新聞社 浅野徹 吉本隆明	 河出書房新社 日動画廊 同左 すばる書房	1981 1982 1982 1975 1982 1979
723.34	Osker Schlemmer Gustav Klimt	Karin V.Maur Werner Hofmann		1982
723.35	ピカソ全集		講談社	
	3 キュビズムの時代	神吉敬三		1981
	5 幻想の時代	神吉敬三		1982
	6 平和の時代	高階秀爾		1982
	8 彫刻	中原佑介		1982
727	世界のグラフィックデザイン		講談社	
	1 ヴィジュアルコミュニケーション	杉浦康平、松岡正剛		1976
	2 ポスター 歴史編	原弘		1974
	3 ポスター 現代編	田中一光、横尾忠則		1974
	4 アドバタイズメント	向秀男、梶祐輔、永井一正		1974
	5 パッケージ	岡秀行		1974
	6 エディトリアルデザイン	勝井三雄、大淵式美		1975
	7 環境のグラフィック	栗津潔、磯崎新、福田繁雄		
730	原色浮世絵大百科事典	原色浮世絵大百科事典編 集委員会	大修館書店	1982
	第二巻 浮世絵師			
	第三巻 様式・彫摺・版元			
	第六巻 作品―師宣―春信			
	第十一巻 歌舞伎・遊里・索引			
751	世界陶磁全集10 中国古代	後藤茂樹	小学館	1982
751.1	日本やきもの集成		平凡社	
	2 東海甲信越	檜崎彰一		1982
	8 山陰	原宏		1981
	10 四国	丸山和雄		1982
	やきものの美 現代日本陶芸全集		集英社	
	第8巻 中里無庵、三輪休和	林屋晴三		1982
	第10巻 現代の茶陶	林屋晴三		1983
	炎に生きる 西日本陶芸作家群像	読売新聞西部本社学芸課	創思社出版	
	PART I			1981
	PART II			1982
	PART III			1983
	内ヶ磯窯跡	直方市教育委員会	同左	1982

分類	資 料 名	著・編 者	発 行	刊行年
751.1	宮之原謙陶磁作品集	宮之原謙	講談社	1982
	陶による新しい造形・思考とテクノロジー	里中英人	富士井澄	1976
	窯の詩	原田隆峰	白藤書店	1978
751.2	東洋陶磁		講談社	
	第1巻 東京国立博物館	林屋晴三		1982
	第7巻 デイヴィッド財団コレクション	マーガレット・メドレイ		1982
	第9巻 ストックホルム東アジア博物館	ブ・ユリアンスヴァッド		1981
	第12巻 メトロポリタン美術館	スザンヌ・G・ヴァレン スタイン		

組織等

美術館顧問

前東京国立近代美術館長	岡 田 讓
京都国立近代美術館長	河 北 倫 明
山口県芸術祭運営委員長	三 好 正 直
陶芸家	三 輪 休 雪
山口県教育委員会教育長	井 上 謙 治
(以上 昭和56年度)	

京都国立近代美術館長	河 北 倫 明
山口県芸術祭運営委員長	三 好 正 直
陶芸家	三 輪 休 雪
山口県教育委員会教育長	井 上 謙 治
(以上 昭和57年度)	

美術品収集審査委員

国立国際美術館長	小 倉 忠 夫
東京国立博物館美術課長	小 松 茂 美
ジャパンアートコンサルタント社長	浦 上 敏 朗
山口大学名誉教授	友 近 琢 男
山口大学教授	服 部 碩 夫
(以上 昭和56・57年度)	

美術館職員構成

館 長	(事)	河 野 良 輔
副館長	(〃)	澄 川 一 雄

総務課

課 長	(事)	徳 光 武 明
主 任	(〃)	藤 本 正 文
	(〃) 主 事	古 屋 隆
	(技) 監視員	梅 本 三 男
		兼運転士

学芸課

課 長	(事)	足 立 明 男
	(〃) 研究員	安 井 雄一郎
	(〃) 学芸員	榎 本 徹
	(〃) 〃	勝 津 吉 生

普及課

課 長	(事)	佐々木 蔚
	(〃) 学芸員	高 田 美規雄
	(〃) 〃	山 本 英 男
	(下関市教育委員会派遣)	木 本 信 昭
		(以上 昭和56年度)

館 長	(事)	河 野 良 輔
副館長	(〃)	澄 川 一 雄

総務課

課 長	(事)	松 田 隆 行
主 任	(〃)	藤 本 正 文
	(〃) 主 事	中 谷 寧 夫
	(技) 監視員	梅 本 三 男
		兼運転士

学芸課

課 長	(事)	足 立 明 男
専門学芸員	(〃)	榎 本 徹
	(〃) 学芸員	高 田 美規雄
	(〃) 〃	山 本 英 男
併	(〃) 〃	奥 田 聰

普及課

課 長	(事)	佐々木 蔚
	(〃) 研究員	安 井 雄一郎
	(〃) 学芸員	勝 津 吉 生
	(下関市教育委員会に派遣)	木 本 信 昭
		(以上 昭和57年度)

職員の動静

56. 4 副館長、北村重明、転出（→山口県医務課長）
- 〃 総務課主任、江頭徳治、転出（→山口県教育庁指導課管理係長）
- 〃 木本信昭、下関市教育委員会に派遣（→下関市立美術・博物館〈仮称〉開館準備室長補佐）
- 〃 影山純夫、辞職（→山口大学教育学部講師）
- 〃 副館長として澄川一雄、転入（←萩県税事務所次長）
- 〃 総務課主任として藤本正文、転入（←大津教育事務所主任）
- 〃 普及課学芸員として山本英男、新採用（←大阪大学・学）
- 〃 高田美規雄、普及課に転属（←学芸課）
56. 10 榎本徹、中華人民共和国へ出張（56.10.23から11.1まで）
57. 1 出光美術館に榎本徹、研修派遣（57.3まで）
57. 4 総務課長、徳光武明、転出（→山口県県民生活課課長補佐）
- 〃 総務課主事、古屋隆、転出（→山口県教育庁総務課主事）
- 〃 総務課長として、松田隆行、転入（←山口県港湾課課長補佐）
- 〃 総務課主事として、中谷寧夫、転入（←柳井土木事務所主事）
- 〃 学芸課学芸員として、奥田聰、併任（下関市教育委員会事務局付主事）
- 〃 榎本徹、学芸課専門学芸員に昇任（←学芸課学芸員）
- 〃 高田美規雄、山本英男、学芸課に転属（←普及課）
- 〃 安井雄一郎、勝津吉生、普及課に転属（←学芸課）
57. 10 河野良輔、足立明男、中華人民共和国へ出張（57.10.27から11.5）
58. 1 山種美術館に勝津吉生、研修派遣（57.2まで）
- （職員構成 P.114参照）

---

発 行／山口県立美術館

山口市亀山町 3 - 1

Tel (0839)25-7788 (代)

発行日／昭和58年11月30日

印 刷／瞬報社写真印刷株式会社

Tel (0832)82-1841(代)

---

